

デートアルケミスト

+無音+

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目を覚ますと白い空間、筒状の部屋に一人の青年はいた。

天龍と名乗る神様に転生をするように頼まれる。彼はそんな頼みを聞き受けると・・・突然開いた穴に落とされ、転生した。

錬金術を持った青年は何を造り、何を見るか。これはそんな話。

「さあ、私達の錬成を始めよう」

#タイトル変更させていただきました。

※作品の見直しをしたところ、幾つかの抜け等があったのでこの際小説の内容の修正、書き直しをやると思います。終わり次第続きを更新します。

目次

デートアストライク

デートアストライク 1 | 1

灯夜リンカーネーション

プロローグ | 7

第一話 錬金術 | 13

第二話 逃避 | 22

第三話 禁忌 | 29

四糸乃パペット編

第四話 お茶会 | 33

第五話 出会い | 43

第六話 ケミスト | 48

第七話 レイニーガール | 56

第八話 きなこパン | 63

第九話 AST | 71

第十話 組織 | 78

第十一話 お誘い | 85

第十二話 デート | 90

第十三話 始動 | 98

第十四話 前兆 | 108

第十五話 前菜 | 118

第十六話 交渉【前編】 | 133

第十七話 交渉【後編】 | 142

第十八話 四糸乃の気持ち | 148

第十九話 大罪 | 152

第二十話 氷の絶望と救い

156

第二十一話 来訪者

170

狂三キラー

第二十二話 狂三

176

第二十三話 忠告

180

デートアストライク 1

雨雲一つない快晴の空。まるで先日の精霊の天使の使用で覆われた雲が嘘のように無くなっていた。その影響か、天宮市の天気は晴天続きだった。そんな天宮市にある陸上自衛隊天宮駐屯地。そこに一人の男が訪れていた。

「初めまして、日下部燎子一尉。私はDEM社から来ましたエドワード・エリックです。既に我が社のほうから連絡はしている筈ですが」
燎子の前には金髪の青年が立って此方に手を差し出して自己紹介をしている。

彼の口からも言ったように、数日前にDEM社の社員がこの駐屯地に来訪すると連絡は来ていた。

その手を握り返す。

「ええ、聞いているわ。まさか、見知らぬ人物が基地内で歩いてたから声を掛けてみれば、DEM社の派遣員とはね」

燎子は、今日配属となった新人を案内次いでに今基地内にいる隊員に紹介しようと歩いていたら見知らぬ人物が此方に来るのだから声を掛けたのだ。

「それで、DEMの方がうちに何の用なのかしら？」

そう、来るとは聞いてはいるがどういう理由で来るかまでは燎子は聞いてはいない。

その問いにエドワードは、首を傾げ一言言ってから携帯で何処かに連絡をし始める。

何度かのやり取りをした後に、最後に深い溜め息をついて携帯を切る。

「……その様子を見る目的のほう伝わっていないようですね。申し訳ありません」

燎子のほうへ向き直し謝罪するエドワードの表情は笑顔だが、その頬は少し引き吊っている。

「私が此方に来られた理由、それは数日後に此処天宮駐屯地に搬入される新型顕現装置“アシュクロフト”の性能チェックとアップグレードを行う為と、そちらに配備されているCRユニットのアップグレードです」

「ああ、あの新型ね。でも、CRユニットもアップグレード？ 私達としては有り難いけれど、具体的にどういった風に変わるのかしら？」

燎子は、エドワードの話に今一ピンと来ないのか首を傾げている。

そもそもCRユニットの強化と云えば、先ほど言ったように新型か、新たな武器……『DDD』変態武器等を使うと言ったものだ。

「そうですね、脳への負荷を抑えたり任意領域の出力や展開速度の上昇等が主ですね。今まで脳への負荷が大きく使うことが武器等が円滑に使える様にするのが目的ですのぞ」

燎子はそれを聞き驚愕する。それが本当ならこれからの精霊討伐での作戦の幅がさらに広がる。これから搬入される新型の事も考えれば精霊討伐も夢ではないかもしれない。

「それは……成る程理解したわ。そうだ、この子にこの基地内を案内するのだけど貴方もどうかしら？」

燎子は、隣にいる少女に視線を向けて提案する。

「右も左も解らない状態だったのでその誘いに乗らせて頂きます」

それに嬉しそうに笑顔を振り撒くエドワード。その隣にいる少女はその顔に見惚れているのかボーと見続けた。

それに気付いたのか、エドワードはその少女の前に立つ。

「エドワード・エリックです。暫くの間宜しくお願いしますね」

自分に言われていることに気付いた少女は、顔を紅くして慌てて自己紹介を返す。

「はははいーほ、本日付でここ陸上自衛隊天宮駐屯地に配属となった岡峰美紀恵二等陸士です！こ、こちらこそヨロシクお願いします！」
「ああは、そんなに堅くなくていいですよ。私は御偉いさんでもないのぞ、ただの研究者だからね。改めてヨロシクお願いしますね、美紀恵さん」

そう言い美紀恵に向かって右手を出す。オドオドと差し出された

手に握り返す。初めて異性の手を握ったのか更に顔を紅くしてしま
う美紀恵に可笑しそうに笑うエドワード。

「んん、そろそろ基地内を案内したいんだけど？」

「あわわ、そうでしたっ。すいません！」

「ああ、そうでしたね。それでは、案内宜しくお願いします」

まったくと呆れ気味な燎子は、基地内を案内する為に歩き出す。

それに着いていく美紀恵にエドワード。

だが、笑顔を絶やしていないエドワードの瞳は、後ろ姿の二人を品
だ目するような目で観察していた。

「……一人目」

基地内を案内をほぼ終え、最後に今いる隊員への紹介だけとなつ
た。その隊員は鳶一折紙で、エドワードは折紙が更衣室に居る為に少
し離れた場所で待たされていた。

「社長、ちゃんと連絡して貰いませんと此方が困りますよ」

暇となったエドワードは携帯で、DEM社の社長であるアイザック
へ連絡をしていた。ASTへの連絡の不備に対しては文句を言うが
肝心な社長は悪びれもなく、

『それはそれで面白いだろう？』

エドワードの態度に心底可笑しそうに笑うアイザック。

「笑い事じゃありません。説明が一々面倒なのですよ」

『そう言わないでくれ、折角の君から持ってきたビジネスだ。最後ま
でやると言ったのは君だろ？』アルケミスト』

「今はエドワード・エリックだ。そこら辺は間違えないで欲しいね」

アルケミストと呼ばれたエドワードは、訂正を求めるようアイザッ
クに正す。

そう、この男はエドワード・エリックの正体は灯夜である。

『おっと、それはすまない。ならエドワード、最近怪しい動きをしている者がいるようだから彼女等の処分は任せたい』

「彼女等と言っている時点で誰かは解っているみたいだが？」

『さあ、どうだろうか？では報告、楽しみに待っているよ』

意味ありげな事を残し、アイザックのほうから切られる。

それに、苛立ったのか乱暴に携帯をポケットへ捻り込む。

そして、丁度良く燎子と美紀恵が折紙を連れて此方に来るのが見え態度を替える。

「ごめんなさいね、待たせたかしら？」

「いえ、其ほど待つてはいませんよ。……そちらは？」

エドワードは、視線を隣にいる折紙へ向ける。

「ごっちは鳶一折紙一曹よ。折紙、DEM社から派遣されたエドワード・エリックよ」

「エドワード・エリックです。宜しくお願いします」

「鳶一折紙一曹、よろしく」

エドワードから差し出された手を折紙は、握り当たり障りのない挨拶する。

「さて、自己紹介も終わったことだし美紀恵の訓練でもしようかしら「え？」

自己紹介を丁度終えた二人に燎子は言う。行きなり訓練と言われ理解しきれていない美紀恵。

「美紀恵は顕現装置の適応テストで数字を叩き出したって聞いたからそれを見てみたいわ。どうかしら？」

「は、はい！大丈夫です！」

燎子の言った訓練は美紀恵な実力を見たい為のようだ。それに美紀恵は緊張しながらも元気良く返事をする。

「そう、それは良かったわ。エドワード、貴方はどうする？」

エドワードに訓練を見てくるかを聞いてくる。エドワードは、少し悩む仕草をした後に断ることにした。

「今日は此方に置いてあるCRユニットの性能チェックとアップグレードを行いたいと思っております」

「あらそう。保管庫はさつき案内したから解るわよね？なんなら誰か呼んで案内させようかしら」

「大丈夫です。保管庫の場所は覚えてますし、幸い其処まで距離は離れてもいけませんので」

その後、幾つかの予定を聞き、終わり次第集合場所を決めてからエドワードはその場を後にする。

充分、三人から距離が離れ辺りに人が無いことを確認しながらエドワードは再び携帯を手に取りある人物に連絡をする。

数回のコールで直ぐに受付の女性に掛かり、自分の名を告げある人物へ繋げるように伝えてから暫く待つとその人物へ掛かる。

『……エドガーだ』

「どうも、エドガーさん。エドワード・エリックです。先程の天宮駐屯地へ到着しました」

『そうか……社長には気付かれてはいないだろうな？』

「勿論です、社長には新型顕現装置のメンテナンスと天宮駐屯地のCRユニットのアップグレードを行う一研究者と報告しています。裏で色々細工をしておりますのでバレる危険性はないと」

その言葉に安堵の溜め息が聞こえる。

『なら、アシクロフトが到着次第、回収は任せたぞ。万が一でもこの事がバレたとしたら……』

「ええ、解ってます。安心してください、迅速に事は終わらせますのでエドガーさんは良報を気長に待っていてください。では、私は用がありますのでこれで」

エドガーが何か言ってきたが無視し通話を切る。

「やれやれ、小心者だなエドガーさんは……」

先のアイザックとの話し合いで無事にDEM社に入った灯夜は、自身の持っている力をDEM社へと貢献した。少ない時間ではあったがここではDEM社の技術力が更に上がったと言っておく。

そして、今回の目的である今回の目的であるアシクロフト、それのアップグレード。

単にプログラム等を弄る等ではない。いや、少しは弄る必要がある

がそこが重要ではない。

在るものを組み込むことで顕現装置での性能が格段に上がるのだ。勿論、それを造ったのは灯夜だが。

「CRユニットでは性能が倍になったが、果たして新型ではどうなるか」

結果を考えながら灯夜、エドワードは保管庫へと向かっていった。

灯夜リンカーネーション プロローグ

白い空間、筒状の部屋。上を見れば先が見えない程高い。
気づいたら俺はここにいた。

ここにくる直前の記憶がどうやら曖昧、というより無いに近いかな。

普通に学校から帰ってきて通学路つて辺りから記憶に霧が掛かったかのように思い出せない。

いくら思い出そうとしても無駄みたいだ、今はこの部屋を調べるか……

壁に近づいて触ってみる。暖かいようで冷たい、柔らかくて硬い奇妙な感触。

壁一周して調べたが出入り口は存在しない。床も同様。完全に隔離されているようだ。

あとは……この上か。

上から落ちてきたのなら出入り口が無いことが説明がつく。しかもこの床は柔らかいから落ちた衝撃を吸収でもしたんだろう。

だから俺は無事なんだ。

……固くもあるけど。

なら、この壁を登っていきたいところだが足を掛ける場所どころか、継ぎ目もない。

八方塞。ツミ。

そのうち誰か来てくれるだろう、そう願いながら腰を下ろし床に座る。硬いようで柔らかい意味不明な素材だ。理解し難い。

待っているのも暇だ、暇をつぶせるような物をポケットなどから探す。

ガム、財布、携帯、ゴミなどなど。

携帯があることは嬉しい、早速使う。

電源ボタンを押してもうんともすんとも動かない。バッテリーが

ない…… だとう？

使えない携帯をそこ等辺に放り出しガムを食べながらごろごろと床に寝そべる。

こうなったら寝てやる。

そう思っても睡魔はこない。そういえば、昨夜はぐっすり寝たんだっけ？

ひたすらゴロゴロとしているだけ。文字通り、あっちこっちゴロゴロと移動して。

軽くドンツと何かにぶつかる。壁かな？なんて思い見ると人が立っていた。

「うおっ!!？」

驚きのあまり飛び起きたがバランスを崩し、後ろへと倒れ転がり壁へとぶつかり悶絶する。やつこいのかかったのか解らん壁でも頭をぶつければ痛いよね。

相手は驚愕を顔に表していた。いきなり転がって壁にぶつかっている所誰も見れば驚くだろう。

「え…… っと、大丈夫？」

相手は俺に声を掛ける。鈴のような凜とした声。聞き惚れるほど透き通った美しい音。

俺は痛みを忘れて思わずその声に聞き惚れる。そんな俺を見て心配そうにする。

俺は慌てて身体を起こす。

「あ、ああ！大丈夫、大丈夫だ問題ない」

立ち上がり、改めて相手の顔を見る。

まだ幼さが残る童顔の少女。肌が透き通るような白さ。宝石のように金色の瞳。燃えるような色をした紅。何もかもが美しかった。

相手に失礼だが生きた芸術、ともいえるだろう。

「き、君は……？」

「私は…… 天龍」

天龍？…… 軽巡洋艦？

ってこれはちよつといろいろと危ないか？

「天龍…それが君の名前なのか？」

「……皆にそう言われている…天をも揺るがす煉獄の龍。それが私」

RP G風に言うとながうでの中で息絶えるがよいあたりの人なんじゃないですか、もしかしての。初めて出合ったヒト？、いきなりラスボス？ここで人生終了？

「えーと、強いのか？」

「わからない、でも最高神と戦って引き分けだから…多分」

最高神って誰ですか？もしかしての創造神と同列の神様のことですか…？

何このヒト、強いじゃん。そりや、天をも揺るがすわな。てか、このひと神様？ドラゴン？

「うん、おーけー分かった。君には逆らわないほうがいいと言う事が」
「…？」

彼女は不思議そうな顔をして首を傾げる。その姿はあざとく可愛い。思わず顔を紅くしてしまう。

「おうふ…と、ともかく！なんで俺ここにいるかわかる？」

胸の鼓動を抑えながら話を変える。

「それは私がここに連れて来た。貴方にお願いがあって」

彼女が俺を？お願い？

彼女の話は俺に疑問を増やすばかりだ。

てか、その前に連れて来たってそれ誘拐。

「貴方にはある世界に行ってもらいたい」

あれ、まさかまさかの俗に言うテンプレの転生ですか？特典とかあれば、ボク嬉しい。

「安心して、特典はある。だけど、ごめんなさい…こちらで既に決めてあるの」

あるんだ、でも既に決められちゃってんのかあ。できれば自分で決めたかったな…幻想殺しとか。あ、あれは幸福とか全部消しちゃうからいらんかな。ならば、王の宝物庫とか無限の剣製とかニコポナ

デポ。やばい、此じやあ踏み台転生だ。

「特典は……錬金術」

錬金術？あの、アニメの手を合わせてからの床とかに触ると発動するあれ？それとも、首に針刺して言葉のままに色々と書き換えるどM染みたやつとか？

「ちなみにどんな感じに？」

「貴方が錬金したいと思う物を錬金できる。鉱物でも食べ物でも生物でも創造物でもなんでも。貴方が望むもの大抵が錬金できる」

どうやら変態のほうでした。

万能やん。そんな力をくれるのか、無償で？

「ふふふ、どう？」

初めて笑みを見せるながらどうと聞いてくる。

「なんか、すごいとしか言えない」

うん、俺の語彙力の無さが伺える。

まあこの人、最高神とか戦っているだけはあるといえるなあ。

「褒めていいんだよ」

フンスと胸を張る天龍。なかなかの小山が主張する。

「さすが天龍、しびれるあごがれるう」

「えへへ」

褒めなれていないのか顔を染めて照れる天龍。うん、かわいい。かわいい。

「はっ！と、とにかく特典はあとで確認してっ。早く転生するから！」

忘れていたな……こいつ。

あれ？時間が無いの？

「じゃあ、転生するね」

彼女は指を鳴らすと何かが開く音がした。もしやと下を見たが穴は開いていなかった。

ではなんだろうか？っと思っていると上から何か落ちてくる音が聞こえる。

上を見ると遠い所為か黒い点にしか見えない何かが落ちてきている。

それはどんどん迫ってくる。一体なんだろう？
気づいたら既に眼と鼻の先まで迫っていた。
ガアアン！

金属音が響き渡る。俺は見事にデコと鼻をぶつけ蹲る。
どうやらタライが落ちてきたようだ。

くほっ！鼻がつデコがああ……！！

「あ、間違えた」

「間違えた、じゃねえよ!!」

「ごめん、もう一回」

もう一度指を鳴らすと今度は床に穴が開き俺は、落ちてい……

「つて、ふざけんなああああ……！！！」

テンプレの如く、俺は真っ暗な闇の中に落ちていった。



白い空間に残った天龍は深い溜息を付いた。

その表情は疲れや呆れ、喜び。そして悲しみ。

それらが入り混じった表情で先ほど彼が落ちていった穴を見つめる。

「やっぱり……私のことは」

小さく呟く。

【当たり前だね、記憶なんて消してあるんだから】

天龍の背後から声を掛けられた。

「……お前か」

振り返りその姿を見る。そこにはなんとも言えない、モノがいた。
全てがノイズのようにモザイクがかかっている、そこに『何か』が
いることだけ分かる存在がいた。声は、男のようで女のような声。老
人のようで子供の声。全てがあいまいな存在。

それを見た天龍は、嫌なものを見たような嫌悪する表情をしてい

た。

【彼は君の情報を記憶、記録、全て消してしまっただじやないか。期待なんてしないほうがいいと思うよ】

まるで全てを知った様な口でその『何か』が喋る。

「期待などしていない、私のことを覚えてるだけで迷惑だ」

【の割には緊張して、ドジって——】

『何か』が言い終わる前に天龍は焼き払う。全てを焼き尽くす煉獄の炎で。

これであれを殺せたとは思えない。そんな考えを読んだのかその『何か』はまた、話しかけてくる。何処に居るか分からない、周りから聞こえるかのように。

【本当のことを言ったのに、酷いね。彼を私達の世界に招いてあげたと言うのに】

「ちようどいい人材がいただけだ。別にあの男に特別な感情など一切無い」

そう言い切る天龍。

そんな天龍を見ている『何か』はクスクスと笑いながら気配を消していく。ただ、天龍をからかいに来ただけのようだ。

不機嫌な顔をした後、もう一度彼が落ちた場所を見る。その表情は先ほどの怒りだけではなく様々な表情が入り混じっていた。

『灯夜』……」

落ちた彼の名を呟きながらその姿を霧のように消えていった。

To Be Continued

第一話 錬金術

落ちていく身体。幾つも何かを通り抜けていく感覚。

それは水のように柔らかいようで空気のように抵抗なく消える。

一体俺は何処まで落ち、何処に向かっているのか。目を開ければ、闇が視界に入り込む。

何処か地面か、右か左か。上か下・・・は分かる。

今、落ちている。

このまま落ちれば何か見えるのだろうか。

何時までも落ちていく俺は、身を任せるしかなかった。

☆☆☆

どれほどの時間が経ったのだろう。

変わらない闇に変化が訪れた。

落下している方向―今俺は背中から落下している―から光が射して来ている。

眩しい光。

自分の中では長い時間を過ごしてきたようだから懐かしい。

光はその強さを増し、その中へ落ちていった。

光へ包み込まれる。

慣れない光。光で痛む視界。視界を歪ます痛み。

それでも目を開けると、空が見えた。

青い空。

雲ひとつ無い快晴。

きつと洗濯物を干せば直ぐに乾くだろう。

なんて暢気な考えをしているが自分の置かれている状況に気づいていない。

Q：俺は今どうなっているか？

A：現在進行で落下中☆

「転生早々、ゲームオーバー!!？」

声を残し、落下していった。

☆☆☆

結果的に俺は助かった。

地面が近づき、ぶつかりそうになった瞬間。

ふわりと体が浮き、ゆっくりと降りるように地面に横たわる。

絶対死ぬと思っていた俺は、暫く動けずにいた。すっかり腰が抜けてしまっていた。

視界には落下している時と同じ、青い空。

やはり、雲ひとつ無い空。

身体に力が入るようになり、身体を起こしてみると周りの光景に唾然とした。

破壊の限りを尽くしたかのような街並み。

台風や津波で押し倒されたかのような崩壊したビル。

そして何故か俺を中心に広がる巨大なクレーター。

クレーターの所々に何かが埋まっている。辛うじて分かるのがひしゃげた看板や潰れた車、折れた木などが埋まっていた。

一体何があったのか。

考えても混乱する一方。

とにかく、ここから移動しよう。

立ち上がると、ゆっくりと歩いていくがあまりにも現実離れた現状でその足を次第に早くなっていく。

やつのことで建っている、窓ガラスや建物に罅が入って廃墟一歩手前のビルへと入っていく。

他の建物は倒壊しているが、ここはしっかりと建っている所を見ると腕のいい建築家を作ったのだろうと思う。

まあ既にボロボロだけだな。

中に入ると、このビルはデパート、百貨店エリアだと分かった。

服屋のショーウィンドウが割れ、倒れた今時の服を着たマネキン。

潰れた野菜などが転げ落ちてしているショッピングコーナー。

地下へ降りるエスカレーター。今は、ビルの倒壊で瓦礫で埋まっている。

適当に歩いていく。落ちている瓦礫を避けながら。それによつて気づいたことがある。

どうやらここは俺の知らない場所、いや少し違う。

壁に掛かつてあつた案内にはここは、天宮大通りのデパートのようだ。

天宮市、南関東大空災によつて更地になつた東京都南部から神奈川県北部にかけての一带を様々な最新技術の実験都市として再開発した場所。

この南関東大空災とは、ある震災のことを指してある。

空間震。

ここまで聞けばわかる人にはたぶんきつと解る。

俺の考えと記憶が間違ひなければこの世界は……

「デートアライブ？」

うんまあ、質量の法則を無視した錬金術を特典にしたんだもんな。そりや、物騒な世界だよな。

でも、大人しくしてれば対して危険でもない。

極力錬金術を使わなければASTとかに襲われないし。そもそも、俺精霊じゃない。女じゃない。

よつて問題なし。ついでに、原作に関わつて置きたいから土道やら琴里に接触してラタトスクに入れて貰おう。

だが、ここが別世界に来たと改めて知らされた。

もう、両親とも会えないと思うと少し寂しいものがある。元気にしているといいが。

俺は、憂鬱な気分を吹き飛ばすように頬を叩き、気合を入れる。

「よー」

気合を入れたのはいいが、俺はどうすればいいだろうか。

天龍の頼みでこの世界に来たのはいいが。一体なにをやれと。

転生者つてよく原作に關つていくよな。時には、他の転生者を倒せとかなんか。

そもそも、ここどんな世界だよ。いきなり転生して、街が崩壊してるとか。

まあ、適当に生きていきますか。
さて、なら早速……

「トウヤの初めての錬金術コーナーキラ☆ミ」
自分の錬金術でも理解するか。

☆☆☆

「……土道。わかっていと思うけど精霊が出現したわ。今すぐへフラクシナス」に回収するわ」

耳についているインカムから聞こえてくる妹の声をただ呆然と聞いている土道と呼ばれた少年。

だが、その声は右から左へと流れていく。

今、目の前で起こっていることが頭の中で処理できていないからだ。

「土道、聞いている?」

「ああ……聞いている」

目の前には……壁が壊れ、外が見えるようになった隙間とそこから見える廃墟と化した街並み。崩れかけた学校、割れた窓ガラス、教科書など散乱とし教室。

教室の中には崩れてきた壁の瓦礫で怪我をして呻く男子生徒。倒れている友達の名を必死に呼ながら泣き続ける女子生徒。

一体何が起きたのか。いや、そんなことはわかっている。

空間震だ。

空間の地震と称される突発性広域災害。発生原因、発生時期共に一切分かっておらず、被害規模不確定の爆発、振動、消失などの現象の

総称。

初めて、この現象が観測されたのは、30年前、ユーラシア大陸の中央、ソ連・中国・モンゴルを含む一帯が一夜にして消失した。

それを皮切りに世界各地で小規模の空間震が頻発した。これを「ユーラシア大空災」という。

その6カ月後、〈南関東大空災〉を最後に一時は途絶えていたものの、5年前から俺達の住む天宮市周辺で再び発生し始めた。

それが今、起こっている。

いや、さっきの説明は一部間違っている。

空間震は、『精霊』という存在が起こしている現象だ。

この世界とは異なる隣界に存在する者。こちらの世界に現れる際に空間震という大爆発を引き起こすため、人類からは特殊災害指定生命体とされ、天敵として恐れられている。だが、それは政府からは極秘扱いとされ誰も知らない。

俺は、その精霊を封印するために「ヘラタトスク」という組織と協力している。

精霊と対話し、解決する。それが俺達の目的。

俺達の他にASTという陸自の部隊がいるが、彼らは戦力をぶつけて殲滅する方法をとっている。だが未だにそれを達成してはいない。何故か？

それは精霊の力が強大なためだ。

空間震を起こすだけではなく絶大な戦闘能力を有する。

そんな相手に土道は接触し、対話しようとするのだ。

無謀としかいえない。

だが、彼には精霊の力を封印する能力だけではなく、傷ついた身体を直す力も持っている。傷つけば炎が身体から現れ、傷を舐めるように治していく。

それによって精霊から致命的な攻撃を受けても耐えられるのだ。

だから、彼が選ばれた。

だが、精霊が出現しているのに関わらず彼は動けずにいる。

視界に映るのは苦しむクラスメイト。友である男子生徒、殿街はガ

ラスで切った肩を押さえながら他の生徒の介護をしている。気絶した教師のタマちゃん先生はぐったりと床に倒れている。そして頭から血を流し顔を青ざめた白い髪の少女、折紙が俺の手の中で倒れている。

「なんで、空間震が・・・空間震警報が鳴ってもいないのに」

空間震には空間の地震の名の通り、爆発する直前に「余震」が起る。

それを観測することによって事前に警報を鳴らし、避難させるとなっている。

だが、今回空間震では鳴らなかった。

余震がなかった？故障で鳴らなかった？鳴る前に空間震が発生した？

様々な憶測が飛び交うが答えは見つかからない。

今は、妹が乗っているへフラクシナスへ行かなければ。

「殿街、折紙を頼む」

「し、土道。お前、怪我は大丈夫なのか？」

怪我をしていないのか心配してくれる殿街。

土道の怪我は、既に炎で癒えてあり、あるのは制服の傷だけだ。

殿街に怪我はないと伝え安心させてから折紙を預ける。

「お、おい！何処行くんだよ」

「ちよっと、他の先生を呼んでくる。直ぐに戻ってくるから安心しろ」

そういつて直ぐに教室を抜け出す。

後ろで殿街が何か言ってくるが、それを聞かないで走る。

廊下に出ると、教室から出てきた生徒が何人かいた。その全てが何らかの怪我をしていた。それを見るたびに自分に嫌気がさす。何も出来ない自分に。

屋上へ向かい、そこでへフラクシナスの転送装置で回収して貰い、直ぐに妹が居る船橋へ案内される。

船橋に入ると、クルー達が慌ただしく指示を出しているのが聞こえてきた。

避難誘導、負傷者の輸送、精霊の観測。

それを洗い顔しながら指示を出している半楕円の床の中央にある艦長席に座っている少女。俺の妹である琴里。

「土道、来たわね」

「一体どうなっているんだ、琴里。空間震警報が鳴っていないのに空間震がっ」

「それは私から説明するよ」

隣に座っていた軍服を着た隈が酷く胸ポケットに傷だらけのクマのぬいぐるみを入れている女性。このヘフラクシナスの解析官、村雨 令音だ。

彼女は、モニターを操作し映像を映し出す。

「これが先ほど撮影した映像だ。シンにとっては少し、刺激が強いかもしれない」

映し出された映像、普通の天宮市の街並みだ。今は上空からの撮影となっている。

そんな平和そうな映像に異変が起こる。

青い空に突如波紋のような歪みが。それは直ぐに空間震となり天宮市を襲った。発生共に途絶える映像。

しばらくすると映像は映るが、次に映っていたのは廃墟となっている街。

なぎ倒されたような建物。発生した空間震の下は潰れたようにあらゆるものが埋まっていた。先ほど映っていた映像では地面からかなり離れていたはずだった。なのに、この災害。

俺はその映像を見て唾然とするしかなかった。

「今回の空間震は、余震は限りなく短い。そのため観測できず空間震警報がならなかったのだろう」

「いままでそんな事…」

「ええ、なかったわ」

空間震は時間は様々だが、避難できる余裕はあった。だが今回はそれが無い。

琴里は唾然としている土道にいう。

「現在、現界した精霊を搜索しているけどどこにも見当たらないの。」

観測に遅れたことにもあるけど、霊力も観測できないから建物中に観測機を飛ばして探しているわ」

「ASTは、来てないのか？」

「ASTは今、空間震の被害を受けて出撃が遅れているみたい。あと数十分は……」

士道はASTで、折紙のことを思い出し顔をしかめる。

「今回の空間震は、異常よ。空間の余波は観測されない。精霊の霊力も観測されない」

「どういうことだ？」

「さっきも言ったように精霊を発見出来てないのよ」

空間震が起こったのに精霊を発見出来てない？士道は琴里が言った言葉に首をかしげる。

「今回の精霊は今まで確認されていないパターン。新しい精霊の可能性がある」

「それはあるわね、霊力を隠蔽できる類か。でも、空間震が起きたからには精霊が現界したってことよ。しばらくすれば見つかるはず——」

「天宮市大通り近くのデパートで精霊らしき映像を見つけました!!」

クルーの一人が観測機の映像を見ながらそう叫んだ。

直ぐにその映像は主モニターへ移される。

デパートの店内が映し出される。だが、一瞬そこが本当にデパートの中なのか疑った。

壁、床、天井全てが宝石でできていたのだ。

宝石をあまり知らない士道でもいくつか分かるものもあるほどの宝石の数。

床には金のテーブル、椅子。テーブルの上には銀のカップと皿。皿の上にはケーキが。

そこでやっとここがカフェテリアだとわかった。あまりの変わり様で一瞬わからなかった。

その椅子に座り優雅にティータイムを楽しんでいるローブ姿の人。これが今回の精霊。この惨状を生み出した精霊。

と、急に映像は途切れてしまった。それに慌てるクルーは直ぐに別の観測機を回せと言っている。どうやら観測機が壊されたようだ。

「周りの物質を鉱物、宝石などに変える精霊だろうか。今まで見たことがない」

「それって、つまり・・・」

「新たな精霊よ。十香とは別の」

既に士道は十香という精霊を封印している。

彼女と対話し、分かり合えてその精霊の力を封印した。

今は学校にも通っているが今日は、検査でヘラタトスク<が管理してる施設にいる為、今回の空間震に巻き込まれはしなかった。

「さて、士道。やることは変わらないわ」

「精霊と対話し、解決させる・・・」

「ええ、精霊とデートしてデレさせてキスする」

その言葉に未だに慣れない。あの映像の精霊をデートに誘い、好感度上げてキスし封印する。そう、封印方法はキス、接吻である。

それに関してはよくわかっていない。

精霊に心を開かせ、キスをする。それで封印が完了する。

どこのギャルゲーだよ。と突っ込む士道。

「さあ、士道？わたしたちの戦争を始めましょう」^{デート}

琴里の言葉で、俺の戦争が始まった。

第二話 逃避

デパートに入った俺だが、いつの間にか服装がローブへと変わっていることに気が付いた。

ブカブカのローブは俺の肌に馴染み、違和感を感じさせない。まるで身体の一部のようだった。

これと違って問題はないようだから置いておくことにした。出来れば鋼兄弟の兄のほうの服装が良かったが。

そこで、二階で見つけたカフェテリアへ入っていった。

小さめのカフェテリアは今の俺にとっては休憩場だ。

店内は空間震でテーブルやら椅子などが倒れているが、そこまで酷くはない。

少し小腹が空いた俺は錬金術の確認と同時にまずはこの乱雑とした店内を変えていく。

天龍が言ったとおりなら望めば錬金できるみたいなのを言っていたが言うなら簡単だが、いざやるとなるとどうしたものか。

最初は何かモーシオンを使ってやってみよう。

思いついたのが、手を合わせ床に付くこと。例のアレだ。

どう練成するかイメージする。錬金といえば金？ 鉱物？ 宝石とか？

そして手を合わせ、床に付く。

するとどうだろう、青い稲妻を発しながら壁、床、天井を変えてゆく。

様々な色をした壁、床、天井が現れた。光り輝く宝石の数々。

イメージが曖昧でこうなったか……

なら今度はモーシオンなしで家具のほうを変えていく。まずは分解、再構築。全てを金へ変えていく。

今度は成功した。モーシオンも必要とせずにできた。

目の前には金のテーブル、金の椅子が並んでいた。

それに座ると金持ちになった気分だ。座り心地は最悪だがな。さて、次に移ろう。

まずはテーブルの一部を練成していく。そこからカップと皿を練成。

ふむ、質量を自由に換えられるようだ。

そのカップの中にティーを練成しようとする。

これも成功のようだ。沸くように水が現れる。それはレモンの香りがする。レモンティーだった。

それを一口、味もちゃんとある。

茶だけでは物足りない。ケーキも出そう。

ポンつとケーキを練成していく。使い方が慣れてきて一瞬で出せるようになってきた。

ケーキはショートケーキ。ちゃんとイチゴも乗っているぞ。

一切れ、口へ運ぶ。甘い生クリームとスポンジの柔らかさ、イチゴの酸味。

これが俺が創ったとは思えないな。

口の中に残った甘さを紅茶で飲み込み、これについて考える。

錬金術には等価交換の法則があるはず。これらを見ると質量の法則を無視している。

なら、魔術のほうの黄金錬成（アルスⅡマグナ）のほうだろうか？

でも、あれは世界を思い通りに歪める力。これとは違うだろう。

死ぬといえは死んじやうとか、記憶を消したり。

オリジナルということか・・・

黄金錬成とまではいかないが十分チートだな。

とにかく、これからもいろいろと錬成していこうと思う。何ができて何ができないのかがまだわかっていないからだ。

もう一口、紅茶を飲み外からこちらを見ている何かをどうするか考える。

ついさつき気づいたけどじつとこつちを見ている視線？を感じた。

多分、その観察機だろうなあ。

・・・いやいやいやいや。

観察機出すつてことは精霊が現れたつてことだよな。

つまり、観察されている俺が精霊？そんなバカなことがあつてたま

るか。

俺、霊力とか霊結晶持っていないし。

と、とにかく壊しておくか。

踵で地面を叩くと、俺を見ていた視線が消えたことがわかった。

何をしたかかっていうと、錬成で観察機を分解しただけ。

対象を目視で確認しなくても錬成ができるのか？

次は遠くのを錬成してみるか……

現実逃避をしながら店内から出て行く。

彼にとつてつらい現実が待ち受けているとも知らずに……

☆☆☆

〈フラクシナス〉の転送装置でデパートの前に送られた土道は、右耳に装着した小型インカムに向かって言う。

「ここで……いいのか？」

できるだけ周りを見ないようにして見る。

唯一ここだけが崩れずに残っている。偶然なのか、それとも。

『ええ、さっきの映像ではその階で確認されたわ。今、他の観察機を送って探しているわ』

新たに出現した精霊、〈アルケミスト〉が居るであろう、この大型デパートに来ている。

観察機で確認されたが、破壊され直ぐに他の観察機を出したが既に行方をくらませていた。現在、行き先は不明のようだ。

あの映像やカフェテリアから採取された物質から〈アルケミスト〉は物質を別の物へと変換させる力があるようだ。

光り輝くカフェテリアのあの有様がそれだ。

精霊自体に今のところ危険性がないが、現界したときの空間震は十香のときよりもはるかに危険だ。

もしあの空間震が地上で起きたのなら、天宮市は地図から消えていたそうだ。

これよりも被害が？

それに聞いたときには恐怖で身体が震えた。あれよりも人が…？

四月、中旬。このインカムをつけて、ヘラタトスクの指示を仰ぎながら、十香と会話をしたときを思い出した。

それから、半月しか経っていない。再び戦場に舞い戻ることになるとは思ってもみなかった。

だが、それも仕方ないだろう。

この精霊を封印する力があるから。これを使えば空間震を止められ、精霊も助かる。

「まあ、っていつても」

小さく息を吐く。その方法が、精霊を口説いてキスすることだというのだから、土道にはいささか難易度が高い。

彼女いない暦自分の年齢。そんな自分ができるのか？

・・・既に十香のときでやってしまったが。

『——土道。へアルケミスト』を見つけたわ』

あの精霊はへアルケミスト』となった。たしか、錬金術師って意味だったかな。

「・・・！何処に」

『屋上よ。今のところ移動する様子はないわ』

「わかった」

そう琴里に伝え、屋上に行くための道を探す。

「エレベーターは・・・使えるわけ無いか」

電力がないためエレベーターは使えない。ふと、中央のエスカレーターが見えそれをつかって上へと上がっていく。

途中から階段へと変え、少し乱れる呼吸を整え屋上の扉の前で緊張する。

扉は何故かスライド式になっている。へアルケミスト』が変えたの

か？

扉にかける手が止まりそうになるのを抑え、一気に開く。

視界が一気に広がる。

青空が見える屋上。そこから見える廃墟と化した街。それを見て顔をしかめてしまう。

落下防止のフェンスに誰かいる。

黒いローブを着た人物。件の精霊、〈アルケミスト〉だ。

土道に気づいていないのか〈アルケミスト〉はただ街を見るだけだ。

「え、っと」

『土道、待ちなさい。』

右耳から琴里の声が聞こえてくる。

〈フラクシナス〉が精霊をモニターリングでサポートし、土道の対話を手伝っているのだ。

幾つかの選択肢からクルー達が選ぶという。中には酷いものがあるが……

少しすると琴里から指示がある。

『——土道。今から言うことを言って頂戴』

「ああ、わかった」

土道は精霊の近くへと歩いていく。

するとやっと気づいたのか、こちらを見てくる。

そこで琴里に言われた通りに言おうとする。

「俺は名は、五河土道！よろしくう!!」

「……」

結果は壮大にスベッタ。琴里にいろいろ話し、どうするかと聞いていると。

「はあ……」

ため息が聞こえた。重々しく吐かれた息は空気となつて溶けていく。

「あー、五河 土道だったか？」

凜とした声で話す〈アルケミスト〉。その声からは疲れたものを感じ

じる。

☆☆☆

屋上で外を眺めている灯夜。その顔はフードの中であって見えな
いが酷く寡れている。

ここに来る前に、尿意を感じトイレにいった。そこまではよかつ
た。トイレでローブのフードを取るとそこには自分の記憶とは違う
顔があつたのだ。

黒かった髪は金髪に、茶色かかった黒瞳は髪と同じ金色へ、そして
顔が前より若く変わっていた。

俺の嫌いな顔、昔から女顔でバカにされてから嫌いになった。今と
なつてはなんとも思わない。

それにしても。

俺は外国人だったのか……

んなわけねえよ!!

昔も今も日本人だよ。今は変わっているが……

どうしてこうなった。

さつさと屋上へ上り、屋上の扉を意味無くスライド式の扉へと錬成
し入っていく。

外の様子は変わらず廃墟。

ここからだ俺が現れた場所のクレーターが見える。

俺がこの世界に現界したために出来たクレーター。吹き飛ばされ
たように倒壊しているビル。

全てが破壊されている街。もう、気づいている。

街の人たちを殺したのは俺だ。

身体能力までも変わったのか、強化された視界ではあつちこつちで
人が倒れている。中には四肢がないものもある。勿論、息はしていな
いだろう。

やっと出撃できたのか陸上部隊がまだ残っている人たちが救出し
ている。

多くの人が死んだ。俺が殺した。

はは、人殺し・・・か。

そこで、屋上に他に人がいることに気が付く。

学生服を着た男子生徒。この世界の主人公、五河士道がそこに立っていた。

世界は、俺を精霊として認識したのか。

士道は口を開き、

「俺は名は、五河士道！よろしくう!!」

などと言う。

居た堪れない空気が流れる中、士道は何か呟いている。

右耳に付いているインカムでへラタトスクから指示を聞いているのだろう。

俺はこの空気に耐え切れずに。

「あー、五河 士道だったか?」

そう言ってしまった。

士道は驚きを顔に表していた。

「俺、いや私に一体何のようかな?」

「それは・・・」

インカムの向こうで止められたのか、言葉が詰まった。

これ以上、空気が凍るのは勘弁願いたい。

踵で地面を叩くと、インカムがポンツと音と共に動かなくなる。

「どうかしたのか?」

「い、いやなんでもないっ」

急にインカムが壊れたことに焦りながら答える士道。

それを見て、俺は笑う。

「さて、さっきの質問の答えを教えてくださいませんか? 五河士道」

士道の顔を見て、壊れた天宮市を見て。

嗤って晒って笑う。

第三話 禁忌

俺は土道に問う。何しに来たかを。

土道はそれに戸惑うように言葉を搜している。

それを見た俺はため息をつきこちらから話しかける。

「こんなローブを着ている怪しい奴に近づくな。君はバカか？しかも、街はこの有様。普通は避難しているのではないか？」

出来るだけ冷たく、強めに言う。

それに土道は何も言い返せない。それもそうだろう。俺は君を封印する為に来ましたーなんていえないもんな。霊力ないから封印もなにも意味ないが。

「ん？どうした？何も話せない木偶の坊なのか？」

「俺すげえ罵倒されてる?!」

「やっと思ったか、ただの案山子かと思っただぞ。もしくは時間によって喋る人形とか」

「せめて人扱いをしてくれない!?!」

ふむ、これで少しは空気は和んだか。

「なら、答えてもらうか？土道君」

「・・・俺は、君と話がしたくて」

「なんだナンパか？なら他を当たってくれ」

「いやそうじゃっ!・・・そうだけど」

「うわあ、最近の若者は少しはお盛んだな。誰とも構わず話しかけて、それに引つかかった憐れな女性達を食べていくのだな、性的な意味で」

「そこまでしねえよ!」

「そこまで・・・つまり一歩手前のことはやると、そしてこれ以上して欲しければオネダリをしてみろというのだな」

「なんでそうなる!?!」

あー言えばこー言うツ!と叫びながら頭を抱える土道を見て俺は笑い、考える。

よく思っただけど、土道の精霊の力の封印方法はキスだったな。

・・・つまり男である俺は男の士道にキ、ス・・・を？
いやいやいやいや、待て待て待て!!

俺はホモではない！そもそも、俺は精霊ではない!!

「ふむ、だが君はどうやら慣れてはいないところを見ると初めて、もしくは一度やったことがあると見る」

それに士道はうつと言葉を詰まらせる。

どうやら凶星のようだ。

「その上、彼女いない暦自分の年齢。自分の身内、姉、妹などにそれをバカにされる」

「ぐほっ！」

「仲がいい男子生徒とのホモ疑惑！」

「ぐあっ！」

「そして、なんだかんだでクラスの女子複数に迫られる修羅場」

「ぐっ！なんでしってるの!？」

まあ、原作見ましたから。

士道に精神的ダメージをかなり受けたようで膝をついている。

面白いな・・・

「まあ？どうでもいいかそんなこと」

フェンスから離れゆっくりとした足取りで士道へと近づいていく。

目の前まで近づくと、耳に付いているインカムを素早く奪い取る。

「君が、とある組織と協力していたとしても。不思議な力を持っているたとしても・・・」

インカムを潰すように握り締め、鍊金を行う。手を開くとインカムは士道のミニ人形となっていた。

それをみた士道はまた驚いた顔をしていた。

「たとえば、この私の力を知っていたとしても、どうでもいい」

トンツと跳ね上がるとフワリと後ろへ重力を感じさせない動きで飛んでいく。

先ほど立っていた場所へ降り立つ。

「観客は多いほうがいいだろう。今、これを見ている彼らも私の力をもう一度見せたほうがいいだろう」

「な、何をー」

「君らが知っている通り、私の力は物質を別の物質へ変える力がある。そう、あれだよアニメや漫画によくある錬金術だ」

士道の声を遮って言い聞かせるように言う。

「錬金術といえば、有名なのは石ころを金へと変えたり、ホムンクルスを作ったりだろう」

「あ、ああ。他にも賢者の石とか。金に変える際の触媒。人間に不老不死の永遠の生命を与えるエリクサーであるとか……」

流石は士道。そういう知識はあるみたいだな。伊達に黒歴史を持っていないな。

「錬金術には、等価交換、質量保存の法則、自然摂理の法則などの絶対的なルールがある」

「要は、錬金術は原子を変える力なのだ。配列や原子そのものを変えらるそんな力」

「だが、そんな万能とも思える錬金術だが、さっき言ったとおり。絶対的なルールがある」

一呼吸つき、唾液で口の中を湿らせ、言う。

「よくあるご都合主義のアレだよ。世界というのは便利なものに枷を付けたがるようだ。世界の法則が乱れるとか」

「まあ、私にはそんなルール、関係ない」

もう一度、踵を叩き付けると屋上のフェンスを分解し、床を全てをガラス張りに変える。街全てを見やすくするように。

士道は、俺の行動がわからないようで警戒している。

「そう身構えなさんな。とても面白い芸をやるだけだから」
士道を背にし、イメージする。

対象の肉体内の記憶、膨大なエネルギー、変換する演算式。

脳神経が焼ききれそうになりながらも続けていく。

そして、頭の中で一つの錬成陣が完成する。

何度も画面の向こうで見た錬成陣。

それは禁忌の法。世界の法則を変える行為。生命を冒瀆。

それを発動させる。

俺は手を広げて高らかに叫ぶ。

「さあ、私だけの鍊金を始めようか」

☆☆☆

「なによ・・・これ」

土道のインカムが壊され、すぐに土道との連絡を取ろうとしていた琴里たち。

観察機から送られる映像をヘフラクシナスのモニターで見ている琴里は呻くように呟いた。それは船内にいるクルー達も同じだった。モニターには信じられない映像が映し出されていたからだ。

街中に赤い稲妻が走り、ありとあらゆるものが分解されていく。分解されたものは、時計の針が戻るかのように元の形へと戻っていく。唯、戻っているわけではない。崩壊したビルは傷一つ無く建っている。

それよりも驚くべきことが他にある。

元に戻っていく街の中、死体であった街の人等が全員傷一つなく倒れている様子。

勿論、息もしている。

それを救助していた陸上も間近で見て何が起きているのか分からない様子。

死んだ人間を生き返らせる。

「こんな規格外の力を使えるなんて・・・いや、それ以前に平然とそれを行うことが」

まるで命をなんとも思っていない、と琴里は思った。

「厄介な精霊が出たもんだわ」

苦虫を潰したような顔をして呟くしか出来なかった。

四糸乃パペット編 第四話 お茶会

空間震によって破壊された街はいつの間にか元に戻った。
原因は不明で、街の住人は首を捻るばかりとテレビでそのことが朝から話題となっていた。

新聞では大きく書かれていた。

『街規模の集団パニックか!?!』

死者は蘇り、生き返った本人たちも何が何やらと混乱しているようだ。

自分は確かに死んだはずだ、と皆口を揃えていつている。

偶然、災害から逃れた人が取った映像には確かに半壊した街や瓦礫で潰れている赤い何かが映っていた。

その映像は直ぐに、CGで作られたものと言われその人物は叩かれている。

そんなニュースを見ながら、土道は深いため息を付いた。

「あれは、現実だった・・・よな」

間近で見た土道でもそれは信じられなかった。

あの、目を塞ぎたくもなる光景が、泡のように消えていき全て元に戻っていった。

悪夢から覚めたかのような感じだ。

だが、アレは現実だ。

あの災害を引き起こしたのは・・・一人の精霊。

何故か、空間震の余波が観測さないうまま空間震警報が鳴らず、空間震が起こった。

過去の〈南関東大空災〉並みの災害が起こったのだ。

災害の後を、いとも簡単に消したのが空間震を起こした精霊だった。

あの精霊は何故、そんなことを？

罪の意識から？それとも気まぐれ？

それはわからない。

あの時、全てが元に戻った街に驚いたが、直ぐに精霊に問おうとしたが既にその場から消えていた。

消失したのか？と思っただが、もしそうならまたこんなことが起きてしまうのか？

居てもたっても居られず走り出そうとすると、急に浮くような感覚が襲った。

〈フラクシナス〉の転送装置だ。

回収された俺は直ぐに琴里がいる船橋へ案内される。

船橋に入ると艦長席で渋い顔をしている琴里がいた。

「琴里・・・」

「言わなくても分かっているわ」

そういって、礼音に指示を出しメインモニタに映像を出す。

それは、先ほどの映像。

赤い稲妻があちらこちらで発生し、巻き戻すかのように戻っていく。

もう一度見ると、明らかに異常。

「こんなことができる精霊は、今まで居なかったわ。まさに〈アルケミスト〉の名が相応しいわね」

皮肉のように言う琴里。それも仕方ない。あんなものを見せられたら。

「一体、どうするんだ？あの精霊がまた現れたら同じように」

「それはないよ、シン」

隣に居た礼音が言う。クルーに一言声を掛けると、映像が切り替わる。

映し出されたのは土道がさつきまでいたデパートの屋上だった。

驚く俺と・・・〈アルケミスト〉。

映像を見ていると〈アルケミスト〉が建っていた床が消え、下へ落ちていき直ぐに床は元に戻る。直ぐに映像は切り替わり、今度はデパートの外を映っていた。

そこには、走る黒いローブの姿。だが、裏路地へ消えていくところまでは映っていたが破壊されたのか映像はそこで終わる。

「見ての通りへアルケミスト」は消失せず、その場を逃走。今は行方を眩ませているわ。一応、搜索しているけどなかなか見つからないのよ」

深いため息が琴里の口から漏れる。

「いや、直ぐに見つかるだろう」

「「え？」」

「先ほど、幾つかの観測機が破壊されるという報告があった。その場所を見てみると」

礼音が操作すると、モニタに地図が表示され赤い×が複数ついていた。

「最初はここ、そして最後に確認されたのがここ。そこから予測していくと・・・」

映し出されたのは、最近出来たということでもニュースになっていたアミューズメントパークだった。

だが、今は誰もいない無人の遊園地となっていた。

「ここにへアルケミスト」がいるだろう。実際、その周囲を探索すると必ず破壊されている。間違いなくここだ。」

目の下に隈をつくって言い切った礼音がなんだがかつこいいと思ってしまった土道だった。

そして翌日の今。

勿論、学校は休校。精神的にダメージを受けた生徒が多いため、カウんセリングを受けているそうなの。

街のほうも同じだろう。

しばらく休校との連絡がついさつきあった。

俺にとっては丁度いい。

これからへアルケミスト」がいるであろう遊園地へ行くのだから。あれから、黒いローブ姿が目撃された。

あの精霊がいる確信が高まった。

「う」

一体何の為に遊園地に。そもそも何故、消失しないのか。

「う……どう」

また、あの精霊に会えばわかるのだろうか。

「——どうつ……聞いておるのかっシドー!!」

「っはっ!」

ドゴツと音と共に腹部に鋭い痛みが走る。

そのまま後ろへ、座っていたソファーごと倒れ転がる。

「シドーっ!何故、無視するのだ!!」

腹部を押さえながら立ち上がると目の前に、膝までであろうかという黒髪に紫の瞳。

美しいという言葉でさえ足りないほど美しい少女。

彼女は、夜刀神 十香。

彼女もまた、精霊だ。

俺が初めて会った精霊で、初めて封印した精霊だ。

今は、人間と変わらない生活を送っている。

そんな十香は不機嫌そうにしている。

「す、すまん。ちよつと考え事をしていた」

「……それは他の精霊のことか?」

不安そうに尋ねてくる。既に十香にも話している。

精霊のこと、昨日何があったのか。そして、今日その精霊に会いに行く。

「私も付いていくぞっシドー!」

「それは駄目だ。あの精霊は危険だし、琴里にも言われただろう?今の十香は精霊の力がないって」

「しかし……」

俯く十香。俺は安心させるために頭を撫でてあげた。

「心配するな。お前も知っているだろう?俺は簡単にやられないって」

「確かにそうだが……」

土道は一度、腹に穴を開けられている。確かにそのとき死んだはず

だった。

だが、彼の中にある精霊を封印する力とは別の力で生き返ったのだ。

「だから、待っててくれないか？」

十香は、静かに首を縦に振った。

夕暮れの遊園地。〈フラクシナス〉の転送装置で降り立った土道は直ぐに〈アルケミスト〉を探し始めた。

コーヒーカップ、メリーゴーランド、バイキング、ジェットコースター。

先の空間震の影響なのか、長期休館となっており全ての遊園地には誰もおらず、全てのアトラクションも電源が入っていないかった。

様々なアトラクションを見て回るが何処にもあの黒の姿はない。やはり、既に消失してしまったのか。

『——シン。観覧車のほうで不審な人物がいる。直ぐに行ってください』
右耳のインカムから琴里の代わりに礼音の声が聞こえた。どうやら、琴里は事情があり、その場にはいないそうだ。

指示された場所へ急ぎ走り出す。
幾つかのアトラクションを通り過ぎ、目的の場所、観覧車へ辿り着く。

今は休館の為、動いていないはずの観覧車には明かりが灯っていた。

受付には誰か立っている。

その姿を見て思わず、この遊園地のスタッフかと思ったが、この場所には誰も居ない筈。〈アルケミスト〉を除いて。

そいつは黒い、羊の顔をした執事がいた。まるで本物のような羊の被り物で今にも動きそうな程、精巧な造りをしていた。

そいつは、観覧車に乗れといわんばかりに指をさしている。

その執事に驚き、正体が解らない執事に警戒をしつつ丁度止まっているゴンドラを見る。

ゴンドラの中に、誰かいる。

黒いローブに、フードで頭をすっぽりと覆い隠した・・・精霊、へアルケミストだ。

へアルケミストは優雅に紅茶を飲みながら席に座っていた。

俺は、ゴンドラの中に入っていく。中に入ると紅茶の良い香りが鼻の奥を通る。

先ほどまで無かった筈のテーブルにはカップのほかにも数種類のケーキなどがあった。

それと同時に、扉が閉じられる。

どうやら執事に閉められたようだ。その事に焦ってしまうがゴゴッと音を立て観覧車は動き出してしまった。

立ち尽くす俺と目の前に座るへアルケミスト。

二人の間に、沈黙が流れる。

「どうぞ」

先にそれを破ったのはへアルケミストだった。

立っている俺に席を勧めてくる。

俺は空いている前の席へおずおずと座る。

前に居る精霊は一口、紅茶を飲むとカップを置き話し始める。

「さて、何か私に聞きたいことがあって来たのだろうか？五河士道」

「士道でいい」

「そうか、なら士道。まずは何が聞きたい？私のことか？それとも力のほうか？」

『——シン。まずは彼女のことを聞いてくれないか？出来るだけ情報が欲しい』

礼音の指示で答える。

「まずは、君の事を知りたいな」

☆☆☆

街を元に戻した俺は、直ぐにその場を逃げた。精霊でもない俺は消失しない。このまま、立ち尽くしても厄介な事にしかならない。

とりあえず、その場から逃げるといふ選択をした。

だが、逃げても俺を見る視線は離れずその度にその視線を破壊していった。

そして、フラクシナスから逃れるうちにこの遊園地に来てしまった。ちようど空間震のせいで誰もおらず丁度いい隠れ家となった。

だが、直ぐに見つかった。

これ以上、逃げ回るのも面倒。

彼方は、俺に接触したがっている。なら、その要望に答えよう。

よく考えれば、今の時期DEM社はまだ関わってこない。

しかも、ラタトスクの上層部はプリンセス、十香の霊力封印で士道への価値が高まっている。

ならば、その流れに乗るしかないだろう。

この時期を逃せば《ラタトスク》との関わりが困難になるだろう。

多少、自信の身を危険に晒すが問題ない。

取り敢えず士道をお茶会に誘うかな？

そして、場はゴンドラの中へと戻る。

右耳に視線を一瞬向けたということは今へフラクシナスへにサポートしてもらっているようだ。

「まずは、君の事を知りたいな」

「私の事か・・・年齢NG、身長NG、体重NGだ」

「いや、まったく答えになってないけど」

「次は何が聞きたい？」

俺は無視して次へいく。

「え、つと。確か、錬成だったけ？それって・・・」

「ああ、これのことかい？」

俺は、テーブルに置いてあるカップを小突くとカップは陶器から金へと変わった。

それを見た士道は慣れたのかあまり驚きはしなかった。

反応がつまらんな。

「これは私の力、見ての通り、金でも何でも錬成できる」
「・・・人の命も？」

士道は深刻そうな顔をしている。
命を平然と作れるというのだからそうなるだろう。

ぶつちやけアレって、肉体に残った魂の記憶とか欠片を復元したと
いうのか。

ようはザオリクです。MPは、勿論地殻変動のエネルギーです。
あと、なんか昨日のおかげでレベルアップした。

どうレベルが上がったかというと・・・

ホムンクルスを作れるようになりました。

あの受付に立ってた黒執事。コンドラを閉めてくれた黒執事。そ
してこの紅茶を入れてくれた黒ひつ・・・執事。

その他いろいろ。いやあ、ホムンクルス便利だなあ。

「・・・まあ、そんな感じだ。あの黒執事もそうだよ。彼は人工で作
り上げた生命、ホムンクルスだ」

「ホムン・・・クルス？」

「そ、三秒で作ってみた」

「もう、なんか・・・」

やつれた顔をしている士道君。若いのに苦労しているのだろうか。
初めて作るものは数十秒、時間がかかるらしくホムンクルスを作る
のに数秒かかった。

もう一体作ったら一瞬で作れましたけど。こう・・・ 楽しみが無い
ね！

出来るだけ、バリバリやりながら作っていこうと思う。なぜかって
？錬成してるって感じがするから。

「この私に作れないものはあんまり無いね」

「あんまり無いのかよ・・・てか何が作れないんだ？」

何が作れないか、と聞かれると反応に困るな。

んー、目には見えないものとか、見たこと無いものとか？

賢者の石なんか生命エネルギー集めて固めて作ればいいし。今のところ賢者の石の必要性は皆無。

「・・・見たこと無い物、とか?」

「へえ」

「まあ、どんなものか分ければある程度?」

「いや、俺に聞かれても分からないから」

と、そこで天気が変わる。

いつの間にか空は曇り空へと、ポツポツと雨が降り始め、次第にぎあざあと音を出して降り出した。

「あれ、天気予報では晴れ続きだって言ってたのに。最近外れているなあ」

「おや・・・」

雨がガラスに当たり景色を悪くする外を見ながら残った紅茶を飲み干し、立ち上がる。

丁度、ゴンドラは一周周り帰りを待っている黒い執事が見えた。

「雨も降ってきたようだし。今日のところは帰ったらどうだ土道?お茶会はまた、今度ということだ」

「え?いや。まだ聞きたいことが」

「私にも用事があるから。聞きたいことはまた今度にしてほしい。どうせ私は消失などしないからな」

土道は、インカムに視線を移す。何か指示があったのか?

「そうだな、また今度会おうな」

土道の答えを聞き、俺は扉を開け放ち外へ出る。雨の為か外は冷え、寒さで身体がブルツと震える。

隣に居た黒執事は、何処からか持ってきた傘を自分が濡れるのを構わず俺に差して雨を防いでくれる。

それを見て苦笑しながら、歩き始める。

土道が見送りをするとか言ってきたが断っておいた。

何が悲しくて男と帰らにゃーいかんだ。彼が何か言ってくる前にさっさと歩いていく。

さて、この場所は暫くしたら人が増えるだろう。

あー、早く今日の寢床を探さないとな。

第五話 出会い

ザアザアと降る雨の中。真つ黒なローブを着た変態。もとい、精霊である灯夜は傘を差して歩いていった。

歩きたびに道路に溜まった水溜りがバシヤツと跳ねるがそれを気にせず歩いていく。そもそも当たる前にまるで見えない壁のような何かによつて弾き返される。

それによつて、彼は全く濡れずにこの雨の中を歩いていける。

なら、何故傘を持っているのか。気分の問題のようだ。

雨のせいなのか、それとも余りここは誰も通らないのか。車道には車は通らず水を掛けて来る者は空から降ってくる雨だけだった。

パシヤツ

そんな音が聞こえた。空耳かと思っているとまたパシヤツと何か、水溜りの上を跳ねるような音が聞こえる。

それも近くから、上から。

近くには神社へと上がる階段。その上から聞こえてくる。

ゆっくりと音は近づいてくる。

パシヤツ、パシヤツ。

次第にその音の正体が見えてきた。

ひよっこりと見えたのがピンクのボタンと縫い目のついた大きなウサギの耳、のフード。

緑色のレインコートを羽織った水色の髪と蒼玉の瞳を持った少女が現れた。左手にはウサギ形の人形。

どうやらその少女が跳ねていた音のようだ。

少女がまた、ぴよんつと飛ぶ。まるで無重力にいるかのような身軽さで。

時間がゆっくりと流れるような感覚。振り続ける雨のカーテンの中、空を飛ぶように踊る少女を唯、見つめる。

そして、地面に着地・・・

——ずるべつたあああああんツ！

その音は今までとは違う、少女が派手に、コケた音だった。

顔面と腹を盛大に地面に打ち当て、あたりに水しぶきが散る。水しぶきがこちらまで飛んできた。

水しぶきだけではなく、何かがこちらに飛んできた。

白い、人形。

あの少女が手に付けていた人形だった。それを開いている手で受け止める。

手の中には眼帯をしたコミカルなウサギ人形。目の先には倒れて動かない水色の少女。

灯夜は軽く地面を踵で叩くと、浮ぶように階段を跨ぎ、少女が倒れている傍に降り立つ。

「大丈夫か？」

小さな身体を抱きかかえるように仰向けにして声を掛ける。

間直で見た幼い顔、水色の髪は青空のような青。柔らかそうな唇は桜色。

西洋人形の美しさがその少女にはあった。

そこで少女が目を開く。宝石のような輝きの青い瞳が彼と目が合う。

青とフードの奥の金の視線が合わさる。少女はその闇が広がるその先を見つめてるだけ。まるで意思がその闇に吸い込まれるかのように見続けていた。

すると少女は今の状況を理解したのか顔を真っ青に染めて目の焦点をぐらぐら揺らし、灯夜の手から逃れるようにぴよんと飛び上がる。

少し距離を取った少女は、全身を小刻みにカタカタと震わせ、灯夜を怖がるような視線と態度を見せる。

手に人形を持っていたことを思い出した灯夜は、怯えている少女に近づく。

「………こ、ない、で………ください………っ」

これは困ったと頭を掻くと少女は続けて言った。

「いたく、しないで………ください………」

これ（ローブ姿の変態が少女を襲っているように見える光景）を見

た第三者なら110番に直ぐに連絡物だろう。

「別に君に危害を加えるわけではない。これは君のだろうか？」

手に持っていたパペットを少女に見せる。少女は大きく目を見開き、灯夜の方へ駆け寄ってこよう、とした所で、足を止める。

ジリジリと距離を積めたと思えば直ぐに離す。

パペットを取り返したい、だけど灯夜が怖い。彼女の心境はそんなところだろう。

そんな少女の様子に苦笑した灯夜は少し考える。

灯夜がパペットを少女に良く見えるように前へ突き出す。

「……?」

少女は灯夜何をしたのか解らず頭にハテナマークを浮かべていた。

灯夜はまだ何をするかわかっていない少女に笑いながら、自らの力を使う。

ポンツと音と共にパペットが白い煙に包まれる。それを見た少女は叫びを上げそうになったが、煙が晴れたパペットを見て驚きの声を変わりに上げる。

黒い帽子、黒い衣装に早変わりしたパペットが現れた。

続いて、手を振ると同時に出てきたハンカチで包み指で三秒数えてから取ると、今度は少女と同じ服装になっていた。

今度は指をどンドン鳴らしていく。ポンツポンツと音と共にパペットの服装が変わっていくのを呆然と見ていた。

最後にハンカチでパペットを隠す。パペットの形に膨らんだハンカチに指を鳴らすと、ハラリとハンカチが手のひらに落ちる。

パペットの形は何処にも無く、ハンカチを取った手には何も持っていないかった。

そのことに未だに呆然としている少女に近づき、左手にハンカチを被せる。

「……?」

そこでやっと灯夜が近づいていることに気が付いたのか、距離を離すように後ろに飛ぶ。

少女は無くなったパペットをどうやって取り返すかと考えるが、ふと左手に違和感があった。

いつの間にか、自分の手にパペットが帰ってきてたのだ。

パペットと灯夜の顔を見比べるように何度か見ると、パペットの口を動かし始めた。

『いやー、すっごいねえ？今のマジック？まったくわからなかったよー』

腹話術でパペットを動かし、妙に甲高い声を発してくる。

『うんでさー、起こしたときに、よしのんのいろんなトコ触ってくれちゃったみたいだけど、どーだったん？正直、どーだったん？』

「変なところを触ったのなら謝る。申し訳ない。」

パペットはカラカラと身体を揺らし、笑いを表現している。

『まあ、一応助け起こしてくれたし、手品も見せてくれたわけだし、特別にサービスしといてア・ゲ・ルんっ』

「それは助かる」

少女の変わりつぷりに苦笑いしながら、パペットに返す。

『うんじゃ——』

「とは言ったものの、身体を触ってしまったお詫びをしたい」

パペットの言葉に被せて言う。

『別にいいんだよー、全然気にしてなんかいないんだから』

「それでも、詫びがしたい」

黒いフードの奥で相手には見えない笑みを浮かべ、パペットの返答を待つ。

少し悩んだような仕草をしたパペットは口を開き、答える。

『まあ、そこまで君が言うならいいけどー』

「ははっ。なら、この近くに美味しいカフェがあるんだ」

灯夜は怯えて近付かなかった筈の少女の手を取って、階段を降りていく。

向かう先は、カフェ。名前を『ケミスト』。

店長が奇妙な被り物をしている可笑しな店で有名なカフェに向かっていた。

なんでも、羊の被り物をしているとか何とかか。

第六話 ケミスト

大粒の雫で染め上げられたアスファルトの道を小走りで走っている一人の少年。

五河士道は、急に降り始めた雨と的中率の低い天気予報に恨み言を呟きながら家へ帰宅していた。

手に持っていた鞆を上へ、できるだけ雨から身を守ろうとしているが既に全身が濡れ、服が水分を吸い水が滴っている。

自分の服装を見た士道は何処か雨宿りができる場所がないかと心で呟く。

だが、こちら辺にそれらしい店も場所もない。

——せめてコンビニくらいあったら嬉しいんだがなあ。

くんくんと士道の鼻が何かを犬の如く嗅ぎ取る。雨の匂いとは別に独特で味わい深いような匂い。

周囲から香るように漂っている。

何の匂いだったかと士道は思い出そうとしながら走っているとそれはどんどん近くなっていることがわかった。

匂いの元は、どうやらこの先の店から出てきているようだ。

確か、あそこは空き地だったような気がしなくも無いがちょうどいい、雨宿りさせてもらおう。

士道はその店に駆け込むように扉を開く。

カランカランつと扉についていたベルがなり、士道が入店してきたことを告げる。

店の中に入ると、あの独特の匂いが更に強くなったのを感じ、そこで思いだす。

「コーヒー？」

どうやらこの店は喫茶店のようだ。広すぎず狭すぎない間隔の店内にテーブルと椅子が並べられている。

落ち着いた雰囲気があり初めて入った士道でも居心地が良かった。

「こんな所に喫茶店なんてあったんだなあ」

ふつと横に誰かの気配を感じ、振り向く。

「どわあっ!?!」

居たのは羊の顔だった。真っ白な毛をした羊、それが横に立っていた。

乱れる心拍を押し、もう一度見てみる。

どうやら羊の被り物のようだ。頭だけが羊で下はちゃんと人間。

服装は執事服を着ている。

「あれ、確か遊園地で・・・でも白い」

『あははっ!それ、ほんとうなのトウヤ君?』

「私は、間違いないと確信している」

楽しそうな声が店内の奥から聞こえてきた。片方は甲高い少女の声、もう一人は――

「まさかっ!」

店内の奥へ走り出す。店内の奥は曇りガラスで仕切られ人影だけが見える状態。

「やっぱり・・・」

そこにいたのはレインコートを着た見知らぬ少女と、精霊へアルケミストだった。

前と同じ黒いローブを身に纏い、その顔はフードで相変わらず見えないままだった。

「おや、これはこれは土道君じゃないか。ちょうど君の話をしていたところだったんだ」

『君がトウヤ君が言ってた土道君?君もなかなかやるもんだねえー』

少女が左手に持っていたパペットを動かしながら喋りかけてくる。腹話術か?

「君がクラスメイトの男子生徒・・・えー、名前は殿様だったか?」

「誰だよそんな偉い名前の奴は。殿街だよってか何で知って」

「その殿様と土道がデキているとか。クラスでは男二人のラブロマンスが・・・」

「おいしい!!何勝手なこと言ってるんだ!?!」

何を言っているんだこいつはという目で見てくるこの変態黒ずくめ。

前の席に座っている少女は相変わらずパペットでカラカラ笑っている。

『いやあ、士道君ってそんな趣味があつたなんて。大丈夫、よしのんは応援するから』

「いや、違うからね？・誤解だから」

「士道、立ってないで座つたらどうだ？せつかく店に来たんだからコーヒーの一杯くらい」

変態ローブが言うことも一理あり俺は隣に座ろうとする。

「何隣に座ろうとしているんだ？君は床で十分だよ」

「さつきから俺の扱い、酷くないですか？」

冗談、と言つて座れと言つてくる

コイツのせいで深いため息が出てくる。

とりあえず、テーブルの上にあつたメニューから選ぶ。雨で体も冷え、なにか暖かい物は無いかと探しホットココアを選び、店員を呼ぶ。

直ぐに店員がくるがさつきの羊の被り物をした執事だ。

「つて、この羊・・・執事はお前が、造つたやつじゃ・・・」

「よく覚えていたんだね。てつきり三歩歩いて忘れていたかと思つたよ」

「俺は鳥頭かつ！」

注文をとり終わった店員は奥へ消えていくのを見て、隣の精霊に問いかける。

「いろいろ聞きたいけど、まず何でお前がここにいるんだ？」

「デート」

「は？」

「目の前の子と」

指を刺すのは水色の可愛らしい少女。なるほど、そういうことか。

・・・いやいやいや。

「なんで精霊がナンパしているんですか?！」

「君だつて最初、私をナンパしようとしたではないか。それに、あの黒髪の少女にも」

『士道君って、純粹無垢な少女を汚したって聞いたよー?』
「誤解だ!？」

本当にコイツは何で俺のことを知っているんだ?
そもそもなんで十香のことを・・・

「私の『錬金術』に、常識は通用しない」

「どこのメルヘンさんだよ・・・」

「やろうと思えば翼くらい生やせるけど」

もうこの精霊、何でもありだ。

「それで、なんであの羊がここで店を?しかも色違うし。」

「ああ、それ?ここ、私の店だよ?あと、イメチェンらしい」

「はっ?」

「だから、私の店。店の名前は『ケミスト』。化学者って意味なんだけどね」

「なんで精霊が店を開いているんだよ・・・」

呻くように士道は呟いた。手続きとかどうしたんだよ。

「士道君。人間、金を積みあげてもやってくれるんだよ?」

「そんな汚い真実を聞きたくない」

「なら、そのホットココアを飲んでさっさと帰れ。私は彼女デートを続けたいから」

何時の間にか立っていた店員がホットココアとタオルを俺に差し出してきた。

俺は礼を言い受け取ったタオルで頭を拭きつつ、ホットココアを一
口。

冷え切った身体にココアの甘味と熱が染み渡る感覚で一息つく。

『あはは、それは嬉しいけど。よしのんはそろそろ帰らないといけな
いから』

少女がパペットで言うように席を立ち、そのまま出て行くようにする。

「またね、よしのん」

『バイビー、トウヤ』

カランカランと音と共に扉は閉じられる。

店員は奥へ引っ込んでしまい、俺とへアルケミストの二人つきり

となつてしまった。

「いつまで土道君は、私の隣に座っているのかな？」

つまり、空いた前の席に座れと。

よしのんと呼ばれた少女が居た席に座り直し、ホットココアで口の中を湿らせる。

「そういえば。あの、よしのんだっけ？お前の名前を呼んでいたけど、トウヤつて名前なのか？」

土道は精霊である十香のことを思い出した。始めて会った十香は名を持っておらず、十香という名は土道が付けたのだ。

「・・・ああそうだ。夜空に灯ると書いて灯夜。どんな闇でも輝き続ける、希望を持って生きていく。そんな名前」

その話を退屈そうに手に持っていたティーカップを飲みながら話す灯夜。

人間らしいその名は、今の灯夜の姿には似合わないものだ。

真っ黒なローブ。それに身を包む姿は夜と言うに相応しい。だが、その中に光はない。

ある筈の顔の場所は暗闇が広がっていて顔は見れない。まるで、拒絶しているかのようで。

「私の名前なんてどうでもいい。ちなみに、土道が呼ぶのは禁止。呼ばれたら鳥肌が止まらなくなりそうだ」

「俺、何かしたの？」

その問いに無視してもう一度ティーカップを口に持っていく灯夜に腹が立つ。

あつと何かを思い出したかのように声を出した灯夜に何かと思う。「土道、濡れた服のままでは風邪を引いてしまう。早く変えたらどうだ？」

確かに、濡れて肌に張り付く服は冷たく気持ち悪い。だが、今は雨が降っててたとえ出てもまた濡れてしまう。

そう思っていると、目の前の精霊は持っていたカップを置くとその指を鳴らす。

すると、濡れていた土道の服が一瞬で乾いた。

「まあ、これもサービスだ。私と話をして風邪でも引かれたら後味が悪い」

「あ、ありがとう。って話？」

「・・・やはり鳥頭か？」

ぐっ！つと言葉が詰まる。

「今度、私と話すとか約束したじゃないか」

はぁーとため息をつく精霊。土道はそこで思い出したのかあつと声を出す。

「土道が鳥頭という事がわかったと言う事で」

「何も言い返せない・・・」

「この前は、土道が質問したから次は私でいいかな」

「あ、ああ。何が聞きたい」

「・・・これと言って何も無いな」

「無いのかよ!!」

灯夜の言葉にツツコム土道。

「取り敢えず、土道の家族構成でも聞かせてくれ」

適当に思いついたことを聞いているのに気がついて土道は思わず殴りたくなる衝動を抑える。

「両親と俺に、下に妹がいるな」

「ほお、妹がいるのか」

「名前が琴里っていうんだけど」

今頃、自宅で夕飯を待っている頃だろう。早めに帰らないとな。そう考えている土道は灯夜の次の言葉で停止する。

「そいつが、お前の組織の司令か？」

その言葉に土道は凍りつく。

今、なんて言った？

「私は耳がいいんでね。つい聞こえてきてしまったんだ、インカムの向こう側の可愛らしい声がね」

「何のこと——」

「ああ、安心してくれ。会話が聞こえたのはそれくらいだ。別に空中艦がこの天宮市上空にあるとかそちらの組織の名前とかヘラタトス

ク<とかの会話は聞いてないよ」

「こちらの情報が筒抜け。その事に土道は焦る。ヘラタトスク<の事をどこで知った？それ以前にまさか、封印のことも…」

「という冗談を言ってみたり、あはは」

「… 笑えない冗談だな」

「でも、こんな冗談を他の人にでも聞かせたら思わずその人のとこまで飛んでいってしまうかもしれないな」

「っ！」

それはつまり、琴里達に報告するなってことか？

目の前の精霊を見るが表情は見えないが雰囲気からして笑っているようだ。

「お、雨が止んだみたいだ。そろそろ帰ったらどうだい？可愛い妹のところ」

窓を見てみると、雨は止み分厚い雲の隙間から太陽が見えているのが見えた。

「… そうだな。じゃあ、俺は帰るよ。えっと、ココアの代金を」

「いや、今回は私のおごりでいいよ。君がいて少しは楽しめたからね」俺を弄ったから楽しめたのではないか？などと思いつつも一度、灯夜に別れを言う。

「そうそう、一つ。言っておく事があった」

席を立て俺を呼び止める灯夜。

「是非とも”彼女達”もウチの店に来てくれ。サービスするから」

それだけ、といってまた席について店員に紅茶の追加を頼んでいた。

俺は特に疑問に思わないまま店を出て行った。

「本当に晴れてる…」

土砂降りだった空はすっかりと晴れ晴れとした快晴となっていた。

既に夕方。帰り道は茜色に染め上げていた。

時間も時間で、冷えた身体を早く温めたいと思いつながら小走りで家

へと帰宅していた。

家で待ち構えているドキドキ☆訓練が待っているとは知らずに…

第七話 レイニーガール

いくつもの店が立ち並ぶ大通り。今時刻は昼。街の人で騒がしいであろう通りには人の姿は見えない。

まるでゴーストタウンのようになっていた。

その中心、何もない場所に波紋ができる。

それは次第に大きくなっていくと空間が歪み始める。どんどん、大きくなっていく。

歪みの中に小さな光が現れたと思った瞬間、光と爆音が周りを支配する。

音と光が、止むとそこには別の光景があった。

空間の歪みがあった場所を中心に浅いすり鉢状に削り取られている。

店、街灯、電柱、道路の舗装すら全て無くなり、周囲も、悲惨な状況となっていた。

《空間震》

今のがそれだった。空間の揺らぎで起こる災害。となっている。

本当は、精霊と呼ばれるものがこちらの世界に現界する際の空間の歪みによって引き起こす突発性災害。

それが、この世界では当たり前前に起こっている。

地を照らしていた太陽は分厚い雲に覆われ、光を妨げ周囲が暗くなつた。

すると、ぽつ、ぽつと雨が降り始めた。

次第に雨は勢い増し、水のカーテンを作り上げる。

冷たい雨の中、空間震によってできた穴に誰か立っていた。

緑色のレインコートを羽織った水色の髪と蒼玉の瞳を持った少女。

無人の街に彼女唯一人いるのは酷く異常だった。

雨に打たれながら彼女は、左に手に付けているパペットを持って表情の無い顔で立っている。何をする訳でもなく。

けたたましい音が空から降ってきた。

空には鎧のような奇妙な格好をした人間が数名飛んでいた。その手に持っている武器の照準は少女に向けられていた。

そして、その引き金が引かれ――

「あー、寝すぎた」

ケミストの二階にある住宅スペースでその日を過ごしていた。

服装は相変わらず黒いローブ姿。いい加減服装を変えたらどうだ
と思う。

フードの上から頭を掻きながら一階、店内へと降りていく。

すると既に店を開ける準備をしているホームンクルスである黒執事、
この店のオーナーがこちらに気づき礼で挨拶をする。

「あーうん。おはよ、いやおそようか？」

それに挨拶を返し、お気に入りである曇りガラスで仕切られた席に
座る。

席に座ると黒執事が、トレーに食事を持ってくる。時刻は既に昼。
この食事は昼食となるな。

「おー、オムライスじゃん」

チキンライスをふつくらとしたオムレツで閉じたオムライスが目
の前に出された。オムライスにはこの店名である『ケミスト』とケ
チャップで書かれてた。

その隣には、コンソメスープにサラダの盛り付け。

自分が作ったホームンクルスに感心しながらスプーンを手に取り、一

口食べる。

「うん、美味しい」

自然と感想が口から出る。それを聞いて満足したのか黒執事は奥へ戻っていった。

その背を視線で見送り、食事へと手を付けていく。

ちなみに、食料などは錬成で作ったもので実質ゼロ円です。

本当にこの力があってよかったと思う。

欲しいものは錬成。金が欲しいなら錬成。何か作りたなら錬成。

錬金術万歳だ。

「食べ終わったらなにすっかなあ」

正直、この世界に来てからやる事が無い。

ゲームや漫画などを買って家に引きこもってもいいが、それはそれで暇すぎる。

だから、この原作に関して暇を潰す。

というのは建前で、好きなキャラに会いたいというのが本音。

狂三とか、八舞姉妹とか。四糸乃は昨日会ったな。

「そういや、何か忘れていたような・・・」

そう呟くと同時に、けたたましい警報が鳴り響いた。

街中に響くその音は、街に危険を知らせていた。

「・・・そういえば、今日だっけなあ」

まだ残っているオムライスとサラダを口にかきこみ、コンソメスープで流し込む。

とりあえず、黒執事にはシエルタワーに避難してもらおう。別にここに居てもいいが万が一のこともある。

それに、初めて造ったホームクルス。愛着も沸く。

てか、この店大丈夫か？一応、特殊合金を挟んで建てているけど。

因みにこの店も俺が造った。勿論、ちゃんと土地は買った、一括で。

軽いストレッチをしていざ行こうとするが、避難していたと思っていた黒執事が俺にお茶を差し出してきた。

態々俺の為に残っていたのか？

灯夜は苦笑いでお茶を受け取り、一気に飲み干す。お茶は飲んでも

舌が火傷しない丁度いい温度だった。

この何気ない優しさに愛着が沸くのだろう。

絶対この黒執事顔あつたら、イケメンだわあ。

黒執事に礼を言つて、店内を出て行く。

「やっぱり、雨か」

天気予報では、今日一日は晴れ。だが今は雨だ。

用意しておいた傘を差し、駆け足で行く。

向かうは、商店街。

「よしっ行きますか!」

と気合をいれてものの、数十分後に空間震に巻き込まれるってどうよ?!

埃やら土やらで汚れたローブを叩いて落としながら愚痴る。

いやあ、まさか目の前で空間震で起きるなんて……

商店街に着いた俺は、どこで空間震が起きるかわからないことに気づきトボトボと歩いていった。

商店街ということとは分かっているけどどこかなんてわかんないよ……

そのときに、数メートル先の空間が歪み、突然の爆発。

近くにいた為、爆風で遠くへ飛ばされ、顔を何度か打った。見事に鼻が折れたよ! イテエ……

とりあえず、生体錬成で鼻を修復。痛みもすっかり消えてたよ。

さて、ASTは既に現界した精霊を銃器で狙い撃ち。その精霊はびよんぴよん飛んで逃げ回っている。

一応、俺も精霊だお。ASTの皆さん、精霊(誤認)はここにもい

ますよー。てか、ラタトスクに精霊認定されてるけどASTはどう判断してんだろう？

空を見ると銃弾の他にミサイルが飛び交い危険区域となっていた。あの中に飛び込みたくねえ。

逃げ回っていた精霊は、どうやらデパートに逃げ込んだようだ。追っていたASTもそのデパートの周りで待機している。

しかも、そのデパート。俺が最初に入ったデパートなんですが。まさか二回もあのデパートに行くとかわ。

そんなことはどうでもいい。今は中に入ろう。

デパートはASTが全方位で待機している。真正面から入ればアウト空からもアウト。

どこから入るか・・・

「・・・無ければ造ればいいじゃん」

無事、デパートに侵にゆ、ではなく入り口を作って入店。

一体何処から入ったのか。地面に空洞作って、そこからデパートに入ったのだ。

いやあ、途中どっかの地下トンネルにぶち当たったときは驚いた。

丁度、列車が目の前に出てきたときはびびった。思わず分解してしまった。

トンネルに残っているのは不自然に一車両だけない列車。きつとASTの方々が直してくれるだろう。

さて、精霊はこの階にいるのだろうか。とりあえず、上へと上がっていく。

「精霊はどこだーい」

「ん？」

『おっ？』

案外早く見つかった。

ただ、四糸乃が土道に追い被さる様子が見えた。二人は俺の声が聞こえたのか此方を見る。

その光景を見た俺は。

「あ、警察ですか？今、幼い少女を襲っている青年が」

警察に電話を。

「待て待て!?!これは事故だから!!それに、今は避難中だから繋がらないだろ」

「え、警察じゃなくてASTの本部ですか？なら、目の前の精霊より凶悪な獣を・・・」

「何処に電話掛けてるんだよ!?!」

土道は俺の携帯を奪い取ると直ぐに切る。

冗談で掛けた先がまさかASTの本部に繋がるとは・・・

何故か息が上がっている土道を無視しよう。

「昨日ぶり、よしのん」

『おお！トウヤくんじゃない、昨日ぶりー』

器用にパペットを動かしながら喋るよしのん。

その隣には驚いたような顔をしながらインカムの向こうに小声で話しかける土道がいる。

「二人つきりだけど大丈夫だった？よしのんくらいの子が好みだと土道が・・・」

「そんなこと無いし、言った覚えも無い!?!」

『あはは！土道くんはよしのんの誘惑に負けちゃったもんねえ?』

「いつ誘惑してたんだよ・・・」

土道は疲れた顔をしている。土道も苦勞しているのだろう。

「それで、幼い少女に押し倒され唇がゼロ距離だった理由を三行で答えなさい」

「み、見てたのか?」

「事後だけ。過程も見ていた子ならあっちにいるけど」

土道の後ろを指で指す。

そこには、土道にとって意外な人物がいた。

雨で濡れた黒髪を揺らして立っている少女。その少女からは身が
すくむプレツシャーが（主に土道へ）向けられる。

彼女は、夜斗神十香。精霊、プリンセスと呼ばれる少女。

少し前に、土道が彼女の力を封印し、ラタトスクに保護され現在は
地下シエルターに避難していたはずだが、何故かこの場にいた。

灯夜は、どうやってこの修羅場となりそうなこの空間から逃げよう
かと考えていた。

第八話 きなこパン

「と、十香……?」

士道がその少女の名を呼ぶ。

十香と呼ばれた少女は、ゆらりと身体を揺らしながら近づいてくる。

今、士道の背には嫌な汗が流れているだろう。

「シドー?」

彼女に名を呼ばれ、思わず身体を震わす。

名前を呼ばれただけなのに身の危険を感じる。

「何を、していた?」

「な、何って……?」

「さっきのことじゃないか?」

灯夜の言葉でわかった。思わず唇に手を当てて思い出す。

十香は、その仕草を見てぐずる子供のような表情を作り、震える声を絞り出す。

「あれだけ……あれだけ心配させおいて——」

十香から押さえつけられるようなプレッシャーを感じると、足元からびしりつと音と共に亀裂が入る。

「え……」

「女とイチャコラしているとは何事かあああつ!!」

ダンッ!

怒りの叫びを士道に向け、足を打ちつけた。瞬間、その位置から中に床がベコンツ!と陥没し、さらに亀裂が入る。

「な、なななな」

「うおっ」

士道と灯夜は、十香の精神状態が不安定となり封印されている精霊の力が逆流した力に驚く。

士道は直ぐにインカムの向こうにいる琴里に問う。

その間に、こちらのもとに到着する。

鋭い視線が三人を交互に見たあと、唸るような声を出し唇を引き結んでから、土道にキツ！と視線をよしのんと俺にビツ！と指を向けた。

「……シドー。おまえの言っていた大事な用とは、この二人に会うことだったのか？」

「あ、いや、それは……」

十香の問いの答えは少し違うが、イエスだった。本当はよしのんだけだったが、何故か灯夜も来ていた。

だが、ここでイエスと言っても、此方の真意が十香に伝わることは難しい。

「……いやあー、はやあー……そおーいうことねえ……」

今の今まで十香の登場でキョトンとしていたよしのんが、甲高い声を出した。

ウサギの顔を、いたずらっぽい笑顔にしているところを見ると嫌な予感しかない。

『おねーさん？ええと——』

「……十香だ」

『十香ちゃんね。んでさ、十香ちゃんには悪いけど土道くん、君に飽きちゃったみたいなんだよねえ』

「……はっ？」

「ちよ!?!」

『いやさあ、なんていうの？話を聞いていると、どうやら十香ちゃんとの約束すっぱかしてよしのん達のところに来ちゃったみたいじゃない？これってもう決定的じゃない？』

さり気無く俺を巻き込んでいるよしのん。発言を訂正させようと思うが、空気がおかしいことに気づく。肌にビリビリとくる嫌な感じ。

「お、おまえ、何言って——があっ!?!」

土道は灯夜の代わりにパペットの発言に声をあげるが、十香に口元を掴まれ声が詰まる。

「シドー……少し、黙れ」

有無を言わせぬ迫力を発しながら、万力のような力でギリギリと頬骨を締め付けてくる。

頬の痛みを訴える土道だが、口元を押さえられているため声を出せない。

よしのんはそんな様子が愉快で仕方ないというような調子で、言葉を続ける。

『やー、ねー、ごめんねえ、これもよしのんが魅力的すぎるのがいけないのよねえ』

「……れ」

『別に十香ちゃんが悪いって言ってるわけじゃあないのよう？たあだあ、十香ちゃんを捨ててよしのん達の元に走っちゃった土道くんを責めることもできないっていうかあ』

「黙れっ！」

土道の顔を掴みながら顔を伏せていた十香は、叫びと共に顔を上げる。

ようやく、土道の顔から手が離され、咳き込んでいる。

「黙れ黙れ黙れっ！駄目なのだ、それだけは駄目なのだ！」

『ええー、駄目って言われてもねえ。ほらほらあ、土道くんもはつきり言っただげなよう、十香ちゃんはもういらない子、って』

「……っ！」

瞬間、十香はガバツとパペットの胸ぐらを掴み上げた。

無論小さなパペットである。少女の手から容易く外れ、上空に持ち上げられてしまう。

「……!？」

と、パペットを取り上げられた四糸乃は目を丸くした。

次の瞬間には眼球がぐらぐらと揺れ、顔面が蒼白となり、顔中にびっしりと汗が浮かんだ。

ついでに目に見えて呼吸も荒くなり、指先がふるふると震え始める。

土道は彼女の急な変化に、怪訝そうな視線を送った。

だが、十香はそんな様子は気づいていない。両手で掴みあげたパペットに、刃物のような殺気を含んだ鋭い視線を向け、詰め寄る。

「私は…私は！いらぬ子ではない！ シドーが… シドーが私に、ここにいていいと言ってくれたのだ。肯定してやると… 言ったのだ！ それ以上の愚弄は許さんぞ！」

その言葉は、追い詰められている子供のようなものが感じ取れた。

「おい、何とか言ったらどうなんだ!？」

パペットが声を発していたと思っているのだろうか、ウサギの首元を掴み上げながら、ぐらぐらと揺らす。

そんな様子に、少女が声にならない悲鳴を上げていた。

パペットの時の様子が嘘のように、全身をガクガクと震わせている。

そして、視線を避けるようにフードを目深にかぶり直してから、十香の服を引っ張った。

「なんだ？ 邪魔をするな。今私は、こやつと話しているのだ」

「か、えして… つ、くださ… つ」

十香の両手に持っているパペットを取ろうとしてか、少女がぴよんぴよんと飛び跳ねる。

インカムから指示を受けた土道は、頬を掻きながら、恐る恐る十香に声を掛ける。

「な、なあ、十香。その… それ、返してやってくれないか？」

「… つ！」

その言葉を聴いた十香は、愕然とした様子で目を見開いた。

話からして、土道が今、それを言うのはアウトだ。

原作を知っている俺はこの光景に違和感を感じていると、視界の端に十香の傍にいる少女、四糸乃がフードを深く被り直して震えているのが見えた。

「シドー、私よりも… 私よりもこの娘の方が… つ」

「は、はあ？ いや、そういうことじゃなくて——」

「そこまでしてくれないかな？」

これ以上黙って見られない俺は二人の話に割って入る。土道は驚

いた顔をし、十香は顔をしかめてこちらを見た。

そろそろいい加減にしてほしい。

「話を聞いていると、その土道が君の約束、もしくは用事をすっぽかしてここにいる。合っているかな？」

俺の問いに目を逸らす十香。それもそのはず、土道とは約束をしていないはず。学校では先にシエルターに行ってくれ、としか言われていない。

「ありや、違うの？なら何に対して怒っているのかな？あ、ちなみに土道とその子のキスは事故だから。君が思っているのは違うと思うよ」

「何が君を怒らせているのかな。土道がその子と一緒にいたから？一緒にデートをしていたから？それともやっぱりキスかなあ？」

「ああ、よしのんが君にいらない子って言ったのもあるね。でも、許してあげて欲しい。彼女はとっても悪戯好きだから。悪気があつて言ったわけじゃない」

目の前に立ち、取り返そうとピョンピョンと跳ねている四糸乃を撫でながら、十香の顔をフードの中から覗くようにして見つめる。

「だから、さ。その子に人形を返してあげてくれないかな。その人形はとっても大切な物みたいだしさ」

「…う」

「うっ？」

「うるさいうるさいうるさい!!お前は一体なんだ!シドーの何だ!」

えー、急に癩癩起こしたと思えば……

まあいい。人形から意識をそらせれば。

「土道のなんでもないよ。だからそうかつかしなさんな。きつとお腹が空いているから怒りっぽくなっているんだよ。だから、君が持っているきなこパンでも食べて落ち着こう」

「何を言ってる。私が持っているのは……っな?!」

十香が手に持っていたのは人形ではなく、きなこがたくさんついたパン。世間ではきなこパンという食べ物だ。

一体いつの間に摩り替わったのだろうかー？

ついさつきですね。

「出来立てほやほやだから今すぐ食べればいいさ」

これで十香の機嫌は良くなるはず。次は四糸乃を。

「ほら、これをやるから泣かないでね」

撫でながら初めて会った時の様に四糸乃の左手にハンカチを被せ、そこから人形が姿を現す。ちなみに服装は四糸乃が着ている服だ。

「あ、よし…のんっ!!」

嬉しそうに左手のよしのんを抱きしめる四糸乃。

『あれえ？いつの間に戻ってたのかな？』

ポカンとしたような声で喋るよしのん。



目の前のコレは一体何なんだ？

シドーにしえるたーに先に行ってくれと言われ、タマちゃん先生と一緒に待ってたが、何か嫌な予感を感じ、心配でここまで来た。

そしたらシドーが他の女と…キスをしている所を見て…。

それを見たら、嫌な…とても嫌な感じがしたのだ。思わず私は二人に怒鳴ってしまい、シドーに詰め寄った。

用事があの女と会うことで、私よりもあの女と会うことが——シドーがそんなことをするはずがない、頭ではわかっている。でも、心がそれを否定する。

そして、あのよしのんとか言う人形の言葉で私の何かが軋んだ。

『十香ちゃんはもういない子』

私は知らない子ではない。世界から否定されていた私を肯定して

くれたシドーが私を否定するはずがない。

思わず私はそいつを掴み上げ、さきほど言ったことを取り消すようにした。だが、急に何も言わなくなったそいつにさらに怒りが沸くそんな私にシドーが話しかけてきた。こいつを返してやってくれと。

裏切られたような気分だった。私よりこの女が、この女のほうが大切だなんて。

私は許せなかった。よしのんも、それを庇うシドーも……

「そこまでしてくれないかな？」

急にシドーの近くにいた真つ黒黒助が私に話しかけてきた。

私は今、このよしのんというやつと話しているというのに、一体なんだコイツは。私は顔をしかめてしまう。

「話を聞いていると、その土道が君の約束、もしくは用事をすっぽかしてここにいる。合っているかな？」

それは違う。シドーは先にシエルターへ行ってくれとしか言っていない。約束も用事もない。

黒いのから目をそらす。

「ありや、違うの？ならなんで怒っているのかな？あ、ちなみに土道とその子のキスは事故だから。君が思っているのとは違うと思うよ」

黒いのは私に近づいてくる。ゆっくりと。

「何が君を怒らせているのかな。土道がその子と一緒にいたから？一緒にデートをしていたから？それともやっぱリキスかなあ？」

話しかけてくるのがとても嫌だった。今すぐ離れたい。でも、動けない。

「ああ、よしのんが君にいらない子って言ったのもあるね。でも、許してあげて欲しい。彼女はとっても悪戯好きだから。悪気があっていったわけじゃない」

気持ち悪い。気持ち悪い。

「だから、さ。その子に人形を返してあげてくれないかな。その人形

はとつても大切な物みたいだしさ」

「…う」

「う?」

「うるさいうるさいうるさい!!お前は一体なんだ!シドーの何だ!」

私は、耐え切れずに声を上げてしまった。一体こいつは何の目的でここにいるんだ!私はシドーのことが心配で来ただけだと言うのに。

何故、シドーがこの女と一緒にいるを見ていると胸が痛くなるのだ。

私が声を上げているのを目の前で見ている気持ち悪いのは困ったような仕草している。

「土道のなんでもないよ。だからそうかつかしなさんな。きつとお腹が空いているから怒りっぽくなっているんだよ。だから、君が持っているきなこパンでも食べて落ち着こう」

「何を言ってる。私が持っているのは……っな?!」

私が持っていたのは人形ではなくきなこパンだった。出来立てなのか湯気が立っている。

思わず胃袋がきなこパンを欲しがる。そうだな、この気持ち悪いのも言っているとおり、私はお腹が減っていて機嫌が悪いんだ。

なら、さっさとこのきなこパンを食べてしまおう。

私はそう思い、あつあつのきなこパンに齧り付く。

うん、やっぱりきなこパンは美味しいな!

第九話 A S T

四糸乃のパペットも戻り、十香の機嫌も直った今。
俺はこの後の事を考える。

帰ろうにも外にいるA S Tが、彼女等が居なくなる時は精霊である
四糸乃を討伐するか、ロストするかの二つ。

前者は駄目、後者は何時になるかわからん。

さて、どうするか？

「土道君、君に問題だ」

「なんだ？急に」

「外にはA S T、彼女等が帰ってくれないと我々はここから出られない。
どうする？」

「え、いやいきなり言われても」

「彼女がロストするのを待つ？先にA S Tが突撃してくるかもしれない。
なら、A S Tに四糸乃を差し出すか？」

「なっ!？」

俺の言葉に土道は、驚きを顔に表しすぐに怒りへと変わる。四糸乃
もビクツと身体を震わして土道の後ろに隠れてしまう。

「冗談だ。だが、何か行動しなければいけない。時間は有限だから」
土道は悩み、インカムの向こうにいるへフラクシナスにも案はな
いかと聞いているだろう。

確かに、へフラクシナスには転送装置がある。だが、それは頭上に
障害物がないことと、へフラクシナスが転送する相手の真上に居な
ければならない。

二つ目は問題ないだろう。問題は一つ目だ。

頭上に障害物がなく、A S Tに姿を見られない場所。そんなところ
がこのデパートにあるだろうか？

デパートの周りには何十人のA S Tが囲っている。これでも少な
いほうらしいが。

外に出れば一発で見つかってしまうだろう。

「土道君、君に選択肢をあげよう」

「選択肢？」

「一つ、四糸乃がロストするのを待つ。」

「二つ、四糸乃を彼女等に渡す」

これは先ほども言ったのと同じだ。土道は、睨み付けてくるが俺はすぐに溜めていた言葉を吐き出す。

「三つ、誰かに頼るか」

最後の選択肢を聞いた土道は、呆けた顔をする。

「誰かに？」

「そう、誰かにだ」

「だけど、フラクシナスは動けない。十香の霊力は封印されて…」

俺は土道の呟きを聞いて、深い溜め息をはく

「やはり、君の目は節穴なのだろうか。だから何時までも土道は土道なのだよ」

「いや、意味わからんし」

バカにされた土道はムツとした顔で文句を言う。

「さて、頭の悪い土道君に大ヒントだ。ここには有り得ないことを平然と可能にしてしまう存在がいる。さて、それは一体だれでしょう？」

「そりゃ…え？」

「もしかしてわからないのかなあ。なら、私は帰るとしようかな」

「ま、待て待て待て!!それは本当なのか？」

俺は土道の問いにニヤリと笑う。

「勿論、本当だ」

「なら、」

「ああ、条件付きだけどね」

「へ？」

「まさか、無料で助けるとでも思ってたのかな？残念っ！そんなに世界は甘くない」

「…」

「ま、私は甘いけど」

「はっ。」

「君たちを助けてあげよう」

驚きの声を上げる土道。え、何？まさか、助けないか思った？それとも無理難題でも言われるとかかな？

そんな土道を見無視して俺は壁に近づき、手を触れる。

「さて、土道君。一つ言わせてもらえないだろうか？」

壁に青い稲妻が走り、形を変えていく。

稲妻が止むと、壁があつた場所には豪邸にでも使われていそうな扉へと変わっていた。

「別に、アレを倒してしまつても構わんのだろう？」

フードの中でどや顔を土道へと見せる。

「…因みにそれ、死亡フラグだぞ」

「勿論、知っているよ。この私があんな戦闘力5以上あるであろう奴等に負けるんでも？」

「もう、はよ行けよ」

疲れたのか土道のツツコミが適当になってきたな。そろそろ行くか。

俺は扉を開き、空を見上げる。

空は相変わらずの雲が広がり、雨を降らしている。

その中を飛び回っている機械を纏っている魔術師。

「さあ、私だけの錬金を始めようか」

待機しているASTは、突然デパートの壁から青い稲妻が放つのに驚くが隊長の日下部 燎子がすぐに指示を出し警戒する。

青い稲妻はすぐに収まると、そこには豪華な扉へと変わっていた。ASTが疑問に思う因りも先にその扉はゆっくりと開かれる。

そこにいたのは真っ黒なローブを来た人物だった。

精霊であるハーミットはあんな姿はしていなかった。では、一体あ

れは何なのか。疑問が頭を埋めていく中、黒いローブは動き出す。

下げていた手をこちらに向けてけるとまたあの青い稲妻が周囲に現れる。空中に漂う青い稲妻は、あるものを生み出す。

それは、剣だ。

なんの装飾もないただの剣。それが黒いローブの周りに青い稲妻と共に現れていく。

A S Tは突然のことに驚くが、一つの答えが思い付く。

まさか、アレは精霊？

理解したときには遅かった。こちらを向けていた手は下ろされていた。

現れた剣は、意思があるかのように空を切り裂き、こちらに向かってくる。

燎子は、指示を出しかわすが何人かはその剣に当たってしまったが、甲高い音を出して防がれる。A S Tが纏っているC R Yユニットは随意領域テリトリーと言うものを展開している。ある程度の攻撃は防げる。

A S Tは直ぐに持っている武器で反撃をする。

弾の弾幕が黒いローブへと撃たれるが、周囲にバリアのような膜で塞がれ効果はない。

「くっ！やはり精霊なのね」

燎子は、新たに現れた精霊に歯噛みする。

しばらく攻撃を受けていた黒いローブは床を踵で鳴らすと床が持ち上がるように上へと上げる。

攻撃を受けながら上へと移動する黒いローブは、デパートの屋上で降り、床に脚が付く瞬間またあの青い稲妻が走り、今度は様々な武器が出てくる。

剣、槍、斧、刀。種類はさまざまだ。数も倍近く多くなってる。

同じように武器で撃ち落としていくが、落とすきれずA S Tの一人に当たる。

瞬間、眩い光を発し爆発する。

何が起こったのか周りのASTがそちらを向いてしまう。その隙は見逃さず、集中して武器を向かわせる。

爆発がいくつも起こり、何人かに当たったことを知らせる。

何故、いきなり爆発したのか？ 燎子は、他の隊員が武器に当たる瞬間をよく思い出す。

「まさか、随意領域だけに反応して?! 一体どうすれば」

「私が行く」

「折紙!?!」

白い髪の毛、折紙と呼ばれた少女は、スラスターを吹かし武器と弾が飛び交う中を進んでいく。

向かってくる武器は銃で撃ち落とし、撃ち漏らしたものは剣で切り裂いていく。

その様子を見た黒いローブは内心焦りながら武器を作り、少女に向けていく。

(うおおおおおお!! こっち向かってきてるう?!)

灯夜は冷や汗だらだらにしながら向かってくる折紙に武器を撃ち込んでいく。だが、折紙は所持している銃や剣を使って全て撃ち落とされ距離を積めてくる。

そして、次第に錬成が間に合わず気付けば目の前に来て、持っているレーザーソードらしきものを俺に…ってあぶねええ!

すんでのところで一応持っていた剣で受け止める。

因みに受け止めたのは偶然である。

「おや、これは可愛いらしいお嬢さんが来てくれたようだ」

余裕そうに見せてるが緊張で出てきた手汗で滑っていつ剣を落とすか内心心配である。

「貴方、何者?」

「初対面なのに行きなり私の事を聞きたいなんて、さては君は私の

ファンかな？」

「ハーミット以外の霊力は観測されていない。なのに精霊のような力を使う貴方は一体なに？」

ギリギリと押し合う武器が音を響かせる。

力は互角か？

「ふふ。なに、私はただの錬金術師だ、よっ！」

俺はさらに力を込め、武器を弾き後ろへと飛び距離をとる。

「錬金術師？」

「そう。石を金へと変えたりホムンクルスを造ったりなのだ」

試しに持っていた剣を槍へと変えて見せる。

「…貴方の目的は？」

「なに、少しこの場を任せただけだよ」

「任せられた？」

折紙はなにか含みがある言葉に訝しげにする。

「そろそろ、良いだろうか。さて、申し訳ないがお別れの時間だお嬢さん」

「っ！まっ!？」

逃げる黒いローブを捕まえようと足を前に出すと何かにぶつかり、爆音とともに視界が白く塗り潰される。

そこで折紙の意識は途絶えた。

折紙の足元に閃光弾と音爆弾を仕掛けた灯夜は、デパートの中を走っていた。爆発と共に直ぐ様錬金で床に穴を開け、その場を逃げたのだ。

いつ仕掛けたのか、それは剣を槍へと変えたときだ。槍へと意識を向けさせ、足元に閃光弾を錬金しておいたのだ。材料はあっちこっちに落ちている弾や瓦礫を使っていた。例え、別方向から来たとしてもそれを踏めば起爆するようにと。

しばらく走っていた灯夜は、一階まで降りると回りに誰もいないことを確認してその場に座り込む。

「あー！すっげえ緊張したっ」

フードを取り、錬成で作った団扇を扇ぎながら水を出す。

「こんなこと二度とやらねえ、やりたくない。カッコつけなければよかった」

今さら自分がやったことを悔しながら水をごくごくと飲んでいく。

「まあ、でも錬成で随意領域に反応して爆発する武器を造れるかを検証できた」

さっきの爆発は前から考えていたAST対策の一つだ。

初めはASTの武装を分解しようとしたが何かに阻まれて出来なかった為、先ほどの錬成での攻撃となった。多分、阻まれたのは随意領域のせいだろう。

造った武器に随意領域だけに反応して爆発するように仕掛けが施してある。

効果はあつたようだが、折紙には効かないようだ。

折紙に効かないとなるとあの最強の魔術師もだろうなあ。こりや、帰ったら考え直しか？でも、牽制には使えるから…これ以上は帰ってからにするか。

てか、土道たちちゃんと逃げれたのか？四糸乃はロストしたと考える…あ。

パペット無くしてないから土道が折紙の家に行くイベントが無くなるじゃん！パペットを落とさないと結構流れが変わるぞこれ。

と、とりあえず四糸乃の封印をどうするかだ。パペットを無くしたことでのよしのんと言う人格から本来の人格である四糸乃に移って、令音が四糸乃をモニタリングした結果を見て、二つ人格があるってことがわかってー……

「帰って寝よ」

とうやは かんがえるのを やめた！

何とかなるでしょ、いや何とかするだろ…土道が。

最後は土道に丸投げな灯夜だった。

第十話 組織

新たに現れた精霊との戦闘後のASTは、本部へと帰還し今回現れた黒いローブについての報告書に燎子は驚愕していた。

「霊力の反応がない？まさか、ならあれは一体なんなのよ」

精霊だけでも手が一杯な上に、正体不明の出現。燎子の頭を悩まし、頭痛がしてきた。

「折紙、あの精霊モドキと何か話していたみたいだけど何か情報はないのかしら？」

隣にいた折紙に聞いた。

「あの黒いローブは、自分のことを錬金術師と言っていた」

「錬金術師、物質を金に変えたりの？」

「こくりと頷き燎子の言葉を肯定する。」

「精霊じゃなくて、錬金術師…ああ、この精霊の認識名も〈アルケミスト〉ってそう言う意味ね。確かに、あの光景を見れば納得がいくわね」

燎子は、黒いローブ——〈アルケミスト〉が剣を作り出す光景を思い出した。

「しかも、この回収した剣だけ…これもまた意味がわからないわ」

報告書には〈アルケミスト〉が錬金したいくつかの武器の写真が載っており、それと同じ部分に幾つかの報告が書いてある。

「材質はよく見られる鉄等、だけど正体不明のエネルギーの痕跡が見受けられる…ねえ？」

「霊力ではないの？」

「それなら、〈アルケミスト〉を精霊として討伐するよう、命令が上からくるはずよ」

それをしないとすることはまだ会議しているか、それとも別の何かか。

「……」

「どうかしたの？」

神妙な顔をしている燎子に声をかける。

「…折紙、私はこの〈アルケミスト〉は精霊だと思っているわ」

「…何故？」

「前に一度、この天宮市は一度壊滅した、いやしていたといった方がいかしら。貴女はそのときその影響で病院に運ばれていたからわからないだろうけど」

折紙は、突然巨大な音と衝撃で気を失っていたことを思い出す。

「それが、なにか関係あるの？」

「そうね、これを見れば解る筈よ」

鍵付きの引き出しから出された数枚の資料が机の上に置かれる。手に取り資料の内容を見ていく折紙はその目を見開く。

「赤い稲妻、黒い影の目撃」

資料には監視カメラと思われる画像が貼り付けられ、そこには荒れ果てた街に赤い雷鳴が光る天宮市と、黒い影の姿が映っていた。

「しかも、その時にすら霊力は観測されず別のエネルギーが観測されているわ」

「ならこの〈アルケミスト〉は…」

「ここまで規格外な存在、精霊だけでいいのに別のが出てくるなんて…はあ」

燎子は持っていた報告書を机の上に放り投げ新たな問題に頭を抱える。

「とりあえず、今は上からの命令を待ちましょう。〈アルケミスト〉についてはそれからしましょう」

そう言つてこの話を終わらせる。このまま考えても埒があかないからだろう。

折紙は持つている資料に視線を下ろし、写真を見る。

それは、街を赤い稲妻が覆い尽くすその写真を。

折紙が何を思いその写真を見ているかは、今はわからない。

場所は変わり、DEM社

DEMの社長であるアイザック・レイ・ペラム・ウエストコットは数枚の報告書を見て興味深そうに何度も読み返していた。

「アイク、どうかしたのでしようか？」

「いやなに、面白い報告書が来てね。君も読んでみるかね？」

世界最強のウィザード、エレン・ミラ・メイザースは、アイザックから報告書を受け取り内容を見ると彼女も同じように目を見開いて驚く。

「こんなことがあり得るのですか？」

「実際にそれは起こっているよ、エレン」

そう言われても直ぐに信じられはしない。

彼らが見ているのは天宮市で起きた集団パニックの記事などが纏められたものだ。

「ですが、精霊ですら死者を生き返らせるなど」

「ふふ、だけど面白いと思わないかい？」

「…まさか、これも計画に入れると言いたいのですか？」

「そのまさかさ。もしこの存在が手に入れば我々の計画はさらに進むだろうと私は思うがね」

「確かに、このような規格外な存在であれば…ですが危険かと」

「それも確かだ。ならもう少し様子を見てから動くでしょう。だが、

その時は頼んでもいいかい？最強の魔術師、エレン・ミラ・メイザース」

「安心してください、アイク。」

相手が誰だろうと私は負けません。ましてや、物を作るだけの存在などに負けるなどあり得ません」

彼女の威圧的な雰囲気を見るにそうとう自信があるのはわかる。アイザックは、彼女を期待していると笑いながら手元に帰ってきた資料にまた視線を下ろす。

「有り得ないことを可能にする存在、まさにへアルケミスト」と言う名

は相応しい。会えるのが楽しみだ」

アイザックはプレゼントを待つ子供のように心を踊らせながらそういった。

〈フラクシナス〉 内部

「本当に何なのかしらあれは」

琴里は、幾つかの報告書を見ながらそう吐く。

霊力は観測されず、精霊と近い力を持っているナニか。

「〈アルケミスト〉は、シンとは友好的だと思うのだが」

隣にいる令音がいう。確かに、土道をからかっているが好感度はそこまで低くはない。

土道のことは気に入っているのだろう。

「チャンスはあるってこと、かしら？」

「なんとかシンには彼女をデートに誘えばあるいは」

いまだに灯夜のことを女性だと思っている二人。

「そうね、あとでいくつかのプランを見直して新しく考えていきましょう。もし、封印が無理でもラタトスクに入ってもらえば結果オーライよ」

あとで、土道には新しい訓練ギアルゲーをしてもらわないとね。

その時、土道はうすら寒いものを感じたが気のせいかと思い、気にしなかった。

後日、土道には魔法学校が舞台のギアルゲーをやる羽目となったのは言わなくてもわかるだろう。

因みに、魔法での戦闘などがあり、難易度はナイトメアとかなんとか。勿論、その戦闘で負けた場合は土道の恥ずかしい黒歴史が晒されるのであった。

灯夜の知らない場所でも物語は変わっていく。
〈AST〉、〈DEM〉、〈ラタトスク〉
三つの組織に相手に彼はどう進んでいくのか。
それは今はわからない。

「物語が変わっていく」

筒上の白い部屋で真つ赤に燃える紅の髪を持った少女が呟く。

その黄金の瞳はある世界を見ていた。黒いローブを来た錬金術師
を見ていた。

彼女は、嬉しそうに目を細目で見ている。

何時だっただろうか、こんな気持ちになるのは。

ああ、彼に初めて会ったときからか。

その時の私はいつも恥ずかしそうにしていたが、そんな私を引つ
張っていくのが彼だった。

いつも一緒だった。どんなときも一緒だった。だから知ってる。

彼が好きなるものを知ってる。

彼が憧れていたものを知ってる。

彼が……好きだった子のことも知ってる

人は成長していくものだ。いつまでも子供ではない。

いつも一緒だった彼は私から離れていく。

幼い頃の彼は一緒だった私から離れていく。

何時からか私の中で彼は大切な存在となっていた。

そんな彼が私から離れていく、それはいい。私を覚えてくれている
ならそれで。
でも。

彼の横にいた知らない女の子がいるのは耐えられなかった。

偶然、私は何かの店の中で二人を見つけてしまった。

女の子と嬉しそうに話しながら照れ臭そうに頬を染めてそっぽ向く彼の姿は見ていられなかった。

私はその場から離れた。

【私の何かが音を立てる】

私は彼にその時の事を聞いた。何をしていたか、どうして一緒にいたのか。

彼は、何でもないといいた。彼はあの子とは何にもないといいた。

嘘、だってあの子と話するときあの笑顔はいつも私に向けていたものだった。

【私のなにかが音を立てる】

私は、耐えられなかった。彼が何処かに行ってしまうのが。本当に私の元から離れて行ってしまおうのが。

【私のなにかがオトヲタテル】

だから、しつこく聞く私に向けた彼の言葉が心に罅いた……。

「■■■■には関係ない」と。

【オトヲタテテ 壊れる】

そこからは覚えていない。思い出したくない。ただ取り返しのつかないことをやってしまった。それは解っている。

だから私が彼に会うこと事態、有り得なかった。でも、また会えた。今まで我慢してきた感情が溢れそうになった。普段しないようなミスをしてしまったり昔のように話してしまっただが、私は楽しかった。本当に。

ふと、いつの間にか手を伸ばしそうになっている手を、片手で止める。

「私には見ていることしか出来ない。いや、それしかしちや駄目」

自分に言い聞かせるように、そう呟く。

彼を殺した……私には彼と一緒に……

天をも揺るがす煉獄の龍と呼ばれた少女は、ただただその黄金の瞳

で世界を見ているだけだった。

第十一話 お誘い

A S Tとの戦闘の次の日。

灯夜は、昼近くに起きる。昨日そのまま寝たのかローブを来たまま頭は寝癖だらけとなっていた。

身体が汗でベタベタになっている事に気が付き、顔をしかめ直ぐにシャワーを浴びに行く。

シャワーを浴び終わり、新たなローブを来て開店前の一階へと降りると丁度朝食を準備し終えている黒執事が灯夜を待っていた。

「おはよう」

朝の挨拶をし、席に座って今日の朝食を見る。

メニューは、味噌汁に白ご飯に鮭の切り身。今日は和風で決めているらしい。

灯夜は朝食を食べながらこれからのことを考える。

四糸乃がああ場を逃げ出さなかったと言うことはパペットを落とすイベントが無くなり、折紙がパペットを拾うことも土道が折紙の家に行くことも無くなった。

そして何より、四糸乃が氷のドームを形成することもなくなった。転生そうそう原作崩壊を起こしてしまった灯夜は、この問題をどうするか頭を抱える。

あの後、四糸乃は隣界へとロストしたはず。原作なら、次の現界は今日となるが今となつては怪しいものだ。

だが、近い内に現界するのは確かだろう。一応、こちらの世界で空間震について調べたが、どうやら一回起れば日を跨いで数回起こるようだ。

原作でも、ヘフラクシナスが十香の現界を予想していたので四糸乃の時も同じと見ていいだろう。

なら、また新たな空間震が起こるのを待ち、土道が四糸乃との接触を手伝えればそれで良い。

もし、それでなにか不都合・・・たとえば封印が出来ないのであれば、何かしらの手を考えないといけない。

具体的に、士道と四糸乃のデートプラン・・・なんで士道の為にそんなこと考えないといけないんだ？

考え事をしている内に、朝食を食べ終わり食器が黒執事に片付けられ変わりに食後のミルクティーが置かれていた。それを一口飲み、一息付く。

「あー、俺に封印能力があればなあ」

あれば、ヘラタトスクと円滑に協力関係になったりするんだが。DEM社？捕まって解剖ルートまっしぐらです。

あのもやしっこー部長（笑）に会ったらすぐに逃げる。

俺の実力は、そこいらの精霊と比べるとかなり劣ると思っている。いくら錬金術がチートでもそれを使う俺が扱いきれていない。

此処んところはこれからの鍛錬しだいかな。

それに、昨日使った対ASTの攻撃。ある英霊の技をパク・・・参考にしたものだったが効果的面だ。まあ、折紙さんには突破されましたがね！

一応、あれ以外にも案はあるが、形にならない。

もうこの際、約束されし勝利の剣

でも錬成してブツ放つか？いや、まず創れるのか？それ以前に使用する魔力をどうするかだ。魔力は当てがあるが足りるかどうかはわからない。てか、

まあ、それに変わるものなら考えているけど……

とにかく、目標として四糸乃の封印が第一と考えておく。

これからの方針が決まった俺はまだ残っているミルクティーを飲み干し、早速行動を開始する。

まずは、士道と接触し四糸乃の現界に備えておこうか。

出掛けようとする俺の肩を誰かが叩く。

誰か、と言っても一人しかいないが。

「どうかしたか、黒執事」

呼び止めた黒執事は、出入口の方を指差し何かを知らせる。扉の窓から見える外の景色はポツポツと雨が降る姿を見せていた。

ああ、雨が降ってきたのか。それを知らせに？

黒執事は、首を振って俺の答を否定する。

なんだ、違うのか？

首をかしげる俺を放っておいて奥へと戻ってしまおう。

一体なんなんだ？

と、そこで後ろからカランカランっと出入口の扉が開かれる合図のベルが鳴る。どうやら誰かが来店してきたようだ。

なるほど、これを知らせに来たのか。

だが、それなら俺を呼び止める程でもなさそうだか。

とりあえず、この店の店長として来店してきた客を迎えるために振り向き対応しようとする。

：よく思っただか全身黒ローブの人が店長って怪しくない？

そんな下らない考えは、来店してきた客の姿を見て吹き飛ばす。

『やっほー、トウヤ君。また遊びに来ちゃたよー』

パクパクと動かすパペットを動かすレインコートのような服を着た葵い少女。

その少女は、昨日この世界に現界し俺がASTから逃がした精霊・四糸乃だった。

——なるほど、気が利く羊だこと。

苦笑いを浮かべながら来店してきた彼女の対応をする灯夜だった。

何故か店に来た四糸乃、よしのんを前に座っていた席に座らせ前の席に俺も座る。それと同時に黒執事が飲み物を持ってくる。

俺はアツプルティー、よしのんはオレンジジュースだ。

因みに余談だが、この黒執事、店の開店後は白くなる。だからそのときは黒執事、ではなく白執事。言いづらい。

何故かは創り主である俺でもわからん。本人いわくイメチェンと言っている。

『いやあー、急に来てビックリしたあ？ごめんねえ、どうしてもトウヤ

君に昨日のお礼が言いたくてね』

揺らしながら喋るよしのん。なるほど、昨日のことのお礼を言う為だけにここに来たのか。と言うか現界するとき起きる空間震は？と思っただけ、精霊には静粛現界と言うものがあって空間震を起こさなくても現界できる方法があるのだ。

おっと、電波を受信したようだ。

「別に気にしないでいいよ。ちよつと彼女等に用があつたから丁度よかつた。それにあれくらいは戦力、大したことないよ」

と言って内心は折紙さんの特攻でビビりまくりでしたけど。

よしのんは、そんな俺の余裕な言葉に感心したような声をあげる。

『ほほうー、流石はトウヤ君ってことかしらあ？でもお、お礼はちゃんと言つておくよ。ありがとうね！』

「気にしなくてもいいが…まあ、どういたしまして」

よしのんからは見えないが、フードの中の顔は言われ慣れていないのか少し赤くしている灯夜だった。

『んでねえ？お礼はこれだけじゃないのよ』

「…どう言うことだ？」

灯夜は訝しげによしのんを見る。

よしのんはケラケラと笑うように揺らしながら言う。

『大したことじゃないけどお、よしのんとデートしてあげるって言うのはどうかな？』

「……」

…いや、正直予想外な事に言葉が出てこない。

まさか四糸乃、ではないがよしのんからデートのお誘いが来るとは思いもしなかつた。

「それは嬉しいお誘いだ。なら、デートは何時にするかな？」

『今すぐって言いたいけどお、やっぱりデートは待ち合わせから始まるでしょー？なら今日のお昼、昨日会ったデパート前に待ち合わせつてことで！』

「それなら解りやすい。なら一旦ここでお開きと言うことで」

『おっけー！よしのんは先にいくから、またお昼にねー！』

そのまま走って出ていくよしのん。

まだ残ってるアップルティーを一口飲みながら、灯夜はよしのんとのデートについて考える。

あちらから来るとは、本当に予想外だ。俺の何がよしのんを引き付けたのか。……まあ、店に招いた事かそれとも手品を見せたことあたりかな。

さて、デートに行くために身支度でもするかあ…

「……あつ」

俺は重大な事に気づいてしまった。

「服装、どうしよ」

自分の服装は黒いローブにフードを被った姿。

誰がどう見ても変態ですねありがとうございます。

一応、服は錬成できるが…これを脱いだら俺のアイデンティティが失われてしまう気がする。

暫く、悩みに悩んだ灯夜は黒執事に判断してもらい、決断したのであつた。

第十二話　デート

身支度を終えた灯夜は、待ち合わせであるデパートを目指してゆったりとした足取りで歩いていた。

もう一度シャワーも浴び、一応デパート内と外でのデートコースを考えて来るなど準備万全だった。

何も問題ない。そう本人は思っているのだろう。

歩く様子を見れば自信に溢れている、ように見える。

だが、一つ。たった一つだが問題があった。

デートであるにもかかわらず、灯夜はいつも着ている黒いローブを着ていたのだ。

さも当然のように堂々と歩く姿は呆れを通り越して感心する。

端から見れば変態にしか見えない。実際、通り掛かる人の視線が痛い。

当本人は、気にしていない様子で歩いていく。

何故、服装を変えなかったのか。

本人によると、これが俺のアイデンティティーだから、だそうだ。黒執事もそれでいいそう。

デートくらい脱げや。

さて、目的地のデパート近くまで来ると、黄色いテープで立ち入りを禁止している道まで来た。

そこまでくると昨日の戦闘の後があちらこちら見受けられる。

灯夜は、そんなテープを気にせず踏み越えて先へ進んでいく。

暫く瓦礫の景色を見ながら歩くと、目的地のデパートにたどり着く。ASTの攻撃や俺の対AST攻撃などで今にも崩壊してしまいうような見た目となっていた。

そんなデパートの入り口に、レインコートの少女が壁に持たれかけてボーとして待っていた。

時間的には、まだ昼まで一時間近くある。

灯夜は待たせるのも悪いと思い、早めに来たがどうやら先にいた少女も同じようだ。

「やあ、よしのん。待たせたかな？」

何時もの口調で待っていた少女に話しかける。

話しかけられてから気付いたのか、ビクツと震えてから灯夜の方を向き、パペットを揺らす。

『やつほおトウヤ君！ええと確か、今来たところよんっ』

よしのんはお決まりの台詞を言ってケラケラと笑う。

『トウヤ君は何時もの黒いローブなんだねえ？折角のデートなんだから脱いだりしないのかなあ？』

「生憎、これは私が私であるためのものでね。脱いでしまつては意味がない。それに、よしのんも何時もの服装ではないか」

『あはー、残念ながらよしのんの服はこれしかないのよー。トウヤ君は、よしのんの私服姿に期待しちゃた感じい？』

「おや、期待したのがバレてしまったか。よしのんは勘が鋭いな」

ニヤニヤと体を揺らして茶化してくるよしのんに灯夜は、肩をすくめる。

「さて、冗談はさておきさつそくデートを始めようか。よしのんがいきたい場所があるならそこを優先的に向かうがどうする？」

『そうねえー』

うむむ、と腕を組んで悩むよしのん。ぽんつと手を叩く。

『よしのんってさつきも言った通り、よそ行きの服が無いのよお。トウヤ君、何処か良いところないかなあ？』

「成る程、服屋か。ならこの近くにあった筈だからそこに行こうか」

『おおー！流石トウヤ君、頼りになるねえ』

「はは、そう褒めてるな照れてしまうではないか」

二人は会話を楽しみながら服屋へと向かっていった。

『そう言えば、トウヤ君。聞きたいことあるんだけど』

「どうした、よしのん？」

『トウヤ君の顔って一度も見たことないんだよねえー、と言うかトウヤ君のこと君付けで呼んでるけど、ほんとのとこどつちかわかんない

んだよねえ。実際、どなの？男の子なの？男の子にしては声は高いしやっぱり女の子なのかなあ？」

「…え？」

いきなりのよしのんの質問に俺は言葉が詰まる。

顔に関しては、一度もフードを脱いだことがないから仕方ないが、まさか男と解っていないなかったのか。

君付けだからってつきりわかっていたものだ。

「よしのん、私は男だよ」

『そうだよねえ、ねえねえ！トウヤ君の顔、見せてくれないかなあ？どんな顔かよしのん、見てみたいなあ』

「ふむ、私の顔か」

『いやいやあ、真つ黒なフードの中に隠れたその顔には、すっごい興味がある！駄目かな？』

「…まあ、フード位なら取ってもいいか」

そう言っつてフードに手をかける。

「後、私の顔など大したことないから、あまり期待しないでほしいのだが」

『いいから、ほらっ！』

急かすよしのんにため息を付く灯夜は、フードを取り払った。

バサツと音と共に、フードの中に隠れていた顔が現となる。

最初に目についたのは肩近くにまで延びたキラキラと輝く金の髪だった。さらさらと風に揺れる金髪は、眩しく輝いている。

次は、長い間太陽に晒されなかったのか真つ白な肌。

童顔だが、ある程度整っている顔。

そして何より目を引かれたのは、彼の瞳だった。

髪と同じ黄金に輝いているが、妖しい魅力がその瞳にはあった。

灯夜の素顔を見たよしのんは、凍ってしまったかのよあに動かなくなる。

灯夜は、自分の顔の何処が面白いのだろうかと考えながらフードを被り直すと、フードの中が暗闇となり見えなくなった。

「ま、こんな顔だ。これと言っつて面白くは——」

『トウヤ君、すっごい美人じゃん!!なんで今まで隠してたの?いやあ、まさかフードの中にこんな顔を隠してたなんてトウヤ君って恥ずかしいやがりさんねえー』

「別に隠していたわけではないが、好き好んでフードを脱ぎたくなかっただけだ。因みに、美人と言うのは女性に使うのではないだろうか。せめてイケメンとか」

『あ、女顔だから隠していたのかなあ?それなら気にしてたらゴメンね?』

「:..いや、もういいや」

色々と諦めた灯夜は、もう二度と人前でフードを脱がないと決めた。

さて、暫く歩いて服屋に着いた灯夜達だが、店に入ってきた灯夜達の服装を見た店員は訝しげそうに見ていたが、本人達は気にせず服選びに夢中となっていた。

今は更衣室の前で灯夜が待ち、中で着替えているよしのんが出てくるのを待っていた。

『うんしょ、ふぬうー。片手だと着替え辛いわねえ』

苦戦しているのかごそごそと言う音と一緒に声が聞こえる。パペットを持っている手じゃ厳しいだろうな。

さらに時間が立つと、お待たせーと言いながらカーテンを開けて出てくるよしのん。

「ほう、なかなか似合っているじゃないか」

よしのんの服装は、薄水色のワンピースに麦わら帽子だ。

「だが、今の季節。少し寒いのではないだろうか?」

『そうだねえ。なら、これを着てみようかな』

そう言ってカーテンを閉め、着替え始める。

暫くするとまた苦戦している声が聞こえる。

『あれー?入らないなあ、ふぬうー!..つて、おわわわ』

ドンツと音と共にごろんと更衣室からよしのんが転げ出てくる。

着替え途中だったようで服を片手まで通した状態で、あとは下着姿のよしのんが目の前にいた。

「大丈夫か、よしのん」

「……」

「ん？よしのん、どうかしたか？まさか、何処かぶつけたのか？」

無言のよしのんを心配した灯夜が近付くと、ずざざと後ろへ下がり距離を取られる。

「み、ないで…下、さい…っ！」

持っていた服を握りしめながら、恥ずかしいのか涙目で顔を赤くして灯夜を拒絶する。

いきなりのよしのんの行動に目を丸くしている灯夜は足元に見慣れたものが落ちていた。

「なるほど、パペットを落としたのか」

拾い上げて、四糸乃に渡そうとするが一定の距離を離され、なかなか渡せられない。

このままでは色々和不味いので(周りの目が)、パペットを四糸乃に投げ渡す。

四糸乃は、帰って来たパペットを直ぐに手に嵌める。

『いやあ、転んじやうなんてよしのんドジっ子！』

「次から気を付けてくれ」

ケラケラと笑うよしのんに俺は注意し、ため息をつく。

そんな事があったが、それから服選びを再開し、幾つかの服を決め購入した。

勿論、服の代金は俺持ちである。

よしのんはこの世界の金を持っていないから、仕方ない。それに、手持ちの金ならかなりあるから大丈夫だ。

『奢ってもらっちゃって悪いねー』

「気にすることはない。金銭ならいくらもある。それより、本当にその服装でいいのか？」

今のよしのんの服は、元のレインコートだ。

『ふふーん、この服はまた今度の時に着る事にするよ』

ニヤニヤと笑うよしのん。まあ、本人がそれがいいならこれ以上言わなくていいか。

服屋を出ると相変わらず雨が振り続けている。

そう言えば、天気予報では晴れると言っていたが大外れだな。

「…？」

灯夜はキョロキョロとなにかを探すように周りを見回し始める。

『どうしたの？』

「いや、誰かに見られてたような気がしたんだが…気のせいかな？」

『ふっふっふ、もしかしたらトウヤ君の隠れファンか何かかなあ？』

「はは、それは無いかな。さて、次は何処に行こうかね」

歩きながら次のデートスポットへ行こうとすると、急にローブが何かに引つ張られるのを感じ足を止める。

隣にいるのはよしのんだけだが、よしのんが引つ張っているのか？

そう思いながら隣にいるよしのんを見ると、確かによしのんが俺の
コートを引つ張っていた。

だが、少し違っていた。

引つ張っていたのはよしのんでは無く、四糸乃本人だった。

「…あ、その……」

小さな声を出して何かを伝えようとしているが聞こえない。恥ずかしいのか顔を少し赤らめている。

「ゆっくりでいい。言いたい事があるのだろうか？」

出来るだけ優しく言ってみるがどうも威圧的だ。

四糸乃は一瞬で顔を真っ赤に染め、下を向いてしまう。

『あらあー、四糸乃ったら。ほら、トウヤ君に言いたいことあるんでしょ？』

よしのんは四糸乃を急かすように言う、たどたどしい言葉で喋る。

「や、つき…はぐめ…んなさ、い」

「…さつき？ああ、別に気にしていないわい」

灯夜は今ので三度目彼女達に驚かせられている。

まさか、封印前で四糸乃が表に出てくるとは…

四糸乃は二つの人格を持っており、今まで話してきたよしのんとい
うのは、自らの臆病故に暴走しがちな自分の力から世界を守ってくれ
るヒーローとして、生み出したもう一人の別人格だ。

いつもはよしのんに身体を任せているはずが、なぜ今出てきたのだ
ろうか？

やはり、四糸乃パペット編は完全に崩壊したと見た方がいいな。な
ら、士道が四糸乃を封印する可能性が低くなる恐れが、いや彼女の行
動を見れば限りなくゼロに近いと見て間違いない。

原作ではASTの攻撃にされる中、一人で寂しく泣いていた所へ颯
爽と命がけで無くしたよしのんと再会させた士道に心を開いていき、
霊力の封印するが…

この状況じゃ無理ですよー。

「…あ、あと…その」

まだなにか言いたそうに、よしのんを着けていない手をもじもじと
する。

なにこのかわいい生き物？

『もおうー、トウヤ君って鈍感さんねえー。四糸乃はデートなんだか
ら手を繋ぎたいって言ってるんだよねえー？』

「よ、よしのんっ！」

よしのんの口を押さえる四糸乃。もごもご何か言いたそうにし
ている。

「その…だめ、ですか？」

「駄目ではないよ。私もデートなのに初歩的なことを忘れていたよ」

そう言い灯夜は、四糸乃に手を差し出す。

四糸乃は、また顔を赤くして震えながら自分の手を灯夜に手に近づ
けるが、途中で躊躇う。

思わずその姿に微笑みその手を握ると、ビクツと震え赤い顔を更に
赤くする。

四糸乃はあうあうと言って、どうしたらいいのかわからなくなって
いる。

「と、灯夜、さん」

「なにかな？」

「手…暖かい、です…安心、します」

「…そうか、私の手でよければいくらでも差し伸ばすよ四糸乃」

「…は、い」

「よし、それじゃあ行こうか」

灯夜達はそのまま手を繋いだままデートを再開していった。
近くの建物から覗く影に気づかぬまま。

第十三話 始動

四糸乃とデートを続けている灯夜は複数の視線がこちらに向けられていることに少し前から気付いていた。

最初は気のせいだと思っていたが、遠慮がないその視線は嫌でもわかる。

「ラタトスク」だけではない、敵意ある視線。ASTか、もしくは……有り得ないがDEMのどちらかだろう。

まあ、こんな格好をしてるし偶然通りかかったAST団員にでも見られたんだろう。

どう対処するか、考えているとよしのんが公園のブランコに乗ってはしゃいでいる。

『トウヤ君トウヤ君！こんなに高く漕げるのすごいでしょ！』

かなりの高さまで漕いでいるよしのんは、ブランコに捕まっているため表現は出来ていないが声からして笑っているのだろう。そんなよしのんは更に漕ぎ続けている。

四糸乃の方は、あれから表には出てきてはいない。

手を繋いだことが恥ずかしかったのか、顔を赤くしてよしのんに任せている。

「あまり調子に乗ると、放り投げだされるぞ」

俺の忠告を聞かずに更に高く漕ぐこうとするよしのん。

平気だと言った途端、手を滑らせブランコから放り出されその身体を宙に投げ出される。

驚き慌てるよしのんにため息を付きながら、俺は落下地点付近に鍊成を施す。

青い雷光が迸ると、地面が盛り上がりトランポリンがその場に現れる。

トランポリンに落ちたよしのんは、ポーンと跳ねる新たな遊びにまたはしゃぐ。

「これは……デート、と言うよりは子守りか？」

灯夜はその事に苦笑しながら此方を見ている視線を横目で流しな

がら、危なげに遊ぶよしのんを見守っている。

今見られても特に問題はないが、何か仕掛けてくるならどう対処していくか。

幾つかの対策を頭で練っていく。

『トウヤ君ー、次の遊び道具出してくれないかしらー』

「…はあ」

全く気付いていないよしのんにまたもため息が溢れる灯夜であった。



「まさか、本当に〈ハーミット〉と〈アルケミスト〉が現界してるなんて」

燎子は、CRユニットを身に纏いながら目標である二人から離れた場所で監視していた。

彼女の廻りには、数人のAST団員が待機している。人数が少ないのは隠密に精霊を殲滅するためだ。

勿論、今回の作戦が失敗しても直ぐに対処できるようにさらに離れている場所にAST部隊を待機させている。

今作戦は、偶然精霊を見つけた折紙の報告で開始された。もし、折紙の報告がなければ気づけなかっただろう。

以前、〈プリンセス〉でも同じような作戦が行われ失敗に終わった。だが、今回の作戦では試験中ではあるが前回の「CCC」の代わりとなる武器がAST本部に数日前に送られている。

その試運転として今回の作戦に使うよう上層部からの命令がきた。その武器を持っている折紙は、具合を確かめるようにCRユニットとの接続を調整している。

その顔は無表情であるが、気合いが入った雰囲気を感じられた。

折紙が持っている武器を一言で現すなら、『砲』。

普段、鎧のように纏っている部位が使用する時は、CRユニットからパージされ、パージされた部位が腕部に連結、装着される形となっているが今回の試作品の為、砲撃状態で待機されている。

本来、ある装備と対になっており、それらが合わさり初めてその力を発揮するらしいがそちらはまだ完成しておらず今はここにない。

それは兎も角、この武器は「CCC」と同じ対精霊用狙撃武器であるが、そのスペックを見た燎子は「CCC」の性能を凌駕する内容に目を疑ったものだった。

攻撃は、生成した魔力を内部にある弾丸に詰め、圧縮し放つ。ただそれだけだ。

だが、その圧縮された魔力は内部の増幅器によって膨れ上げてから対象に向けて放たれるが、その威力は一緒に送られてきた試験実験での映像を先に見てわかっている。

その映像を見た燎子は、戦争でも始めるのか？と思うほど衝撃的な光景が映っていた。

映像には何処かの実験施設の一部なのか広大な広場に武器を所持している魔術師が映っていた。魔術師は、装着しておらず地面に固定されており、制御部分から出るコードから自分のCRユニットに繋げ少し離れている場所で操作していた。

そこで、燎子は映像に出ている魔術師は、そこそこ有名な魔術師だったことを頭の隅で思いながら映像を見続けていた。

そして、研究員の指示で起動させていく。
甲高いモーター音が内部から聞こえ、それがさらに高くなっていく。

そして、カウントダウンが始まる。
30秒を切ると先ほどまであれこれと話していた研究員たちの声が止み、機動音のみが響く。

制御している魔術師は、指先を簡易の引き金に指を掛け、撃つ準備とその衝撃に備えテリトリーを強化する。

映像室で見ているASTメンバーも息をのみ、映像を見つめる。

残り後、十秒。

『3』

『2』

『1』

『0』

ガチンツと言う撃鉄の音が響くと共に画面が眩い光で塗りつぶされた。そして次に来たのは地鳴りのような大きな爆発音。

何が起きたのか、ASTメンバーは思わず防いだ目と耳から手を離し再び映像を見る。

銃口から真っ直ぐと抉られ、道のように出来ていた。砲撃が通った部分は砲撃の熱でゆらゆらと蒸気が出ている。それが遙か先まで続いている。

今まで見て来た武器でこれ程の強力なモノは誰も見たことはなかった。

制御していた魔術師は、鼻から血を流し頭を押さえながらほかの魔術師に抱えられながら運ばれていつている。

あれほどの威力を放つ武器だ。使用者に多大なダメージがくるはず。

燎子は、映像に驚愕するがすぐにある疑問が頭に浮かぶ。何故、こんな武器を此方に送ってきたのか？

データでは、映像よりは威力を抑えたものを送って来ているようだ。

だが、試運転などは彼方で幾らでもできる上、精霊に使用するなら何もここで試さなくても良いだろうに。

それが燎子の頭の隅でこびりつくように残っている。

「…まあ、考えたところで上の考えなんて解らないし」

そう言つて思考を切り替える。

今は目の先の精霊たちだ。これほどの武器だ、殲滅までとは言わず傷くらしいは負わせてみたいものだ。

「折紙、わかつているでしょうけど今回の武器は【CCC】とは比にならないほどの負荷が貴女に掛かるわ。一応、彼女たちも補助するけど」

回りにいる魔術師たちもそれに頷く。

今回の武器は、余りにも使用者への負荷が掛かるため周囲の魔術師が補助出来るよう開発され直したが、それでも焼け石に水程度。

「大丈夫、必ず仕留める」

そう言い、止めていた手を再び動かし作業を再開させる。

燎子は、折紙の態度にため息をつく。

「まあ、今はまだ上の連中が話し合ってるだろうし。狙撃許可はもう少し先かしら」

まだ少し精霊の監視が続くことにゲンナリしている燎子に、連絡が入る。

「やっときたのね。それで狙撃許可は？そう、貰えたのね。わかっているわ、以前のように……それはどういうこと？」

燎子は、狙撃許可が出たことにやっとこの長い監視が終わることに

安堵していると、通信の向こうから狙撃するにあたっての条件に怪訝そうに顔をしかめる。

「狙撃目標を〈ハーミット〉だけに？〈アルケミスト〉には手を出すな？まあ、効くかどうかわからない相手だからいいけど。折紙」

「なに？」

「狙撃許可が降りたわ。でも狙撃対象は〈ハーミット〉だけだそうよ。〈アルケミスト〉には手を出さなつて上からの命令」

「了解」

療子たちは、移動し始める精霊に気付き、その後を追うようにいくつかの狙撃ポイントの中から最適な場所を選びながら移動していった。

★★☆☆

デートを続けている灯夜達を、監視している組織はASTだけではなかった。

「〈ハーミット〉の静粛現界に〈アルケミスト〉との接触、ね。士道の報告がなかったらわからなかったわ」

琴里は、目の前のモニターに映っている二人の姿をみてそう言う。彼らを見つけたのは偶然通りかかった士道からの報告だった。

「仲良くデートしているだけに見えるが」

「それでも、何時ASTの連中が彼女たちを見つけるかは解らないわ。直ぐにでも彼女たちに接触することが彼女たちの為よ」

隣でモニターを見ていた士道に、琴里はそう言いクルーたちに指示を出し始める。

「士道。この際だし、二人とも攻略してみたらどう？二人の好感度も悪くないわ」

「…行きなり、二人もか？」

急激にハードルが上がった士道は、顔をひきつらせる。

十香の時でさえ骨が折れたと言うのに（実際、腹に穴が開いたが）、次はダブルで攻略。

「あら、訓練ではやったはずよ？」

「二人を攻略してたら、片方がヤンデレ化してヤンデレルートに入つてバットエンドだったけどな……」

訓練であるギャルゲー、恋してマイ・リトル・シドー 《魔法少女編》を、先日クリアしたばかりの土道だったがかなりハードな攻略だったことを思い出す。

内容は、魔法がある世界で魔法を学ぶための学校で恋愛というもの。

前作よりは攻略対象が少なく、これならすぐに終わると安堵した過去の自分を殴り飛ばしたいと何度思ったことか。

それは何故か。

とあるキャラの攻略条件が、彼女の親友との攻略を同時にしなければならぬというものだった。

偶然、好感度を上げていたキャラに親友が現れ、それから彼女と会うとその親友が何時も付いてくるという現象が現れわかった。

気にせず目的であるキャラを攻略しようとする、何故か正解の選択肢が、親友の好感度も上げてしまうことに土道は気づいた。

親友の好感度が上がるにつれ、積極的に攻略対象の会話内に入ってくるようになり無愛想だった親友は、表情が、豊かになっていく。

「それだけならなあ……」

攻略対象の好感度が十分に達したと判断した土道は、早速告白をしようとする。

場所も選び、そして彼女がきた瞬間、選択肢が現れる。

三つの選択肢を選びどうなるかを頭で予測し、正解を選択していく。

結果は、見事に受け入れてくれた。

真っ赤に染まった顔を隠しながら答を返してくれる彼女にホツとしながらコントローラーを机に置く。

ああ、これで終わった。達成感と疲労が入り交じる感覚を覚えなが

ら椅子の背もたれに寄り掛かる。

「後は、エンディングを見てセーブして琴里に報告かな」

そろそろ時間も夕食近くなり、外も夕焼けに染まった空が薄暗く
なってきたころだ。丁度、ゲームの告白の場所も夕焼けが綺麗に見え
ることで評判の良い屋上にしたことをゲームのBGMを聞きながら
思い出す。

外を見ていた土道は、ふと可笑しいことに気づいた。

何時までたってもエンディングが始まらないことに。

進めるのを、忘れたのか？と思った土道は机の上に置いたコント
ローラーのボタンを押した。

瞬間、なにか刺さるような音が聞こえた。

勿論、土道に刺さったわけでもなくゲームからだ。

さつきまでも軽快なBGMは消え、静か過ぎるほどの静寂が部屋に
走る。

雰囲気が変わったことに土道は戸惑うがまだ続くということとは理
解し、進める為のボタンを押す。

バシヤツと画面が紅く染まる。それがなんなのか、土道は理解する
前に驚きでコントローラーを落としてしまう。

画面に染まったのは、血だ。

主人公の吐血した血が彼女にかかり景色を赤に染めていた。

理由は、背中に刺さっている刃物だろう。

そして、その柄を握っているのは先ほど告白した彼女の親友。

彼女は何が起こったのか、目の前でたった今告白してくれた男性が
刺されたことが理解できず、目を開き驚く。

対して、親友はどんよりと光がない瞳で主人公を刺している。その
表情は、最初にあったとき、いやそれ以上に冷たい顔だった。

ズブリと抜かれる刃には赤黒く輝く血が付いていた。

それと同時に、急激に暗くなる意識。

何故こうなったのか、主人公の考えのスクロールが流れ、そして最
後に声が聞こえる。

『いめん、なやん』

フィードアウトする画面。

口を開けて暗くなった画面を見つめる土道に、理解させるかのよう
に『Bad End』と言う文字が現れる。

衝撃的な最後を見た土道は、シヨックのあまりその文字を見ている
ことしかできなかつた。

復活した土道は、琴里に抗議しに言ったが。

土道の恥ずかしい過去がまた世間に流れたとだけいっておこう。

「もう二度と御免だ…」

「流石にヤンデレは、駄目だったかしら。」

げんなりとする土道に琴里は、自分の兄には早すぎたかと思い、次
は少し軽めにしておこうと決めた。

次回作が琴里の頭の中で決定した瞬間、何とも言えない寒気が土道
に襲う。

「土道、転送準備が出来たから早速行って貰うわよ。今回は、どちらも
面識があるから攻略しやすいと思うのだけど、前みたいなのはやら
ないでよ」

デパートのことを言っているのだろう。

「いや、あれは俺のせいじゃないだろ」

「あら、なら十香のせいかしら？」

「そう言うことじゃなくてだな…」

「なら、あの精霊のせいかしら？家の兄は女の子のせいにする最低な
男だったのねえ」

「…俺が悪かったです」

なにも言えなくなつた土道は、さっさと琴里に行けと言われ妹の言
葉に潤む瞳を閉じ、とぼとぼ転送装置がある部屋まで歩いていった。

そんな兄の後ろ姿を見送つた琴里は、艦長席の背もたれ体重をのせ
てから正面にある机に向き直る。

「番外の精霊〈アルケミスト〉…」

机の上にあるのは、〈アルケミスト〉についての報告が纏められた紙
が置かれている。

報告書には、以前ASTの戦闘で精霊が出した剣の分析結果やフラクナシスの精霊観測データが書かれている。

それすべてに、解析不能や不明が書かれるものが多くあった。

「この世のモノではないものを創る精霊。面倒なことになったわねえ」

そう愚痴りながらクルーたちに指示を出していく琴里であった。

第十四話 前兆

俺は今、霞む視界で灰色の雨雲を見上げている。
いや、正確には仰向けになって倒れている。

曇り空なのに青色の空が見え、そこからは雨水がポタポタと降り注ぎ俺の頬を濡らしていく。

よく見ると青空じゃなく、青い髪をした少女が俺の顔の前にいる。
雨水は真っ赤に腫らした彼女の瞳から垂れ、何か言っている。だが、耳鳴りが酷く鳴り響き彼女の言葉は遠くに聞こえる。

呼吸も苦しい、まるで水の中にいるような感じだ。

「いほっ…」

むせるように喉の奥から鉄臭いものを吐き出す。舌から伝わる味で、吐き出したのが血だというのがわかる。

血を吐き出す俺を見た目の前の彼女は、取り乱すように何かを叫び、身体を揺する。

揺すられる俺の身体からは力が抜け、体温が抜けていき地面に広がる水溜まりが酷く生暖く感じられる。

それが広がっていくと更に体温が下がっていく。

どうやら、俺の身体から出ているようだ。

視線を下へ、身体の方へ向けると思わず目を背けたくなる光景が映る。

右側上半身が抉れていた。

右局部から腹部近くまで抉れ、傷は焼け焦げたように黒くなっている。周りを良く見ると荒れ果てたように破壊し尽くされた土地と、何かを防いだように泣いている少女、四糸乃の周囲は何ともなかった。

無意識に、防いだのか？

それらを理解した瞬間、激しい痛みが脳に届き悶える。

今まで体験したことがない痛みで思考が乱れる。

痛みに悶え、側で泣き出す四糸乃。そして空中には彼らを討伐しようとして現れたAST達。

何が起きたのか。何故、灯夜が重症を負ったのか。

それは、数時間前に遡る。



数時間前に遡り、公園にて。

はしゃぐよしのんにせがまれ様々な遊具を造り上げていた灯夜は、こちらに歩いてくる気配に気が付く。

「…おや、土道じゃないか。一体全体どうしたんだい？」

現れたのはこの間会ったばかりの五河土道だった。さっきまで傘を差していたが今は雨が降っていないため片手に持っている。

何か口にする前に一瞬、自分の耳に視線を向けているのが見えた。

フラクシナスから何か指示を受けたか。

「いやあ、歩いてたら偶然二人を見つけてな」

なに食わない顔で直ぐに土道は、会話を再開させる。

「なるほど。…それで？土道は一体何のようで？ああ、この前の礼のことならば非私に弄られてくれ。そちらのほうが面白い」

「おい!？」

「冗談…でもないか」

「なお悪い!!」

今日も切れのあるツツコミをする土道。

うむ、やはり土道は面白い。

「まあ、土道がいる理由など解りきっているさ」

「なっ…」

俺の言葉に息を詰まらせる。もうバレたのか？そう思っている土道に、

「土道は、可愛い幼女四糸乃に会いに来たのだろう」

「おい待て。今の発言は聞き捨てならないんだが」

「土道はロリコンだもんね」

「違うっ!!」

「まあ、土道がロリコンというのは置いて。用件は何かかな?」
取り消そうとしていた土道は、俺が話を切り替えたことで諦めたようにゲンナリとする。

「えっと、だな…『今から一緒に遊びにいかないか?』」

また、土道の視線が片耳に行く。随分とマトモな選択が決まってるみたいだ。もしかしたら、他の選択は酷いものなのかもしれないが…
それを見た俺は、踵を地面にノックをするかのように軽く叩く。
すると周囲にあつた複数の視線が幾つか消えるのを感じる。これでヘフラクシナスの監視の目が消えた。まあ、直ぐに別の観測機が来るだろうけど。

「勿論、そのお誘いを受けるよ。君の事や後ろにいる組織の事も詳しく聞きたいからね」

「そっかそっか…:はっ!?!」

突然声をあげて驚く土道。それを見た俺は可笑しく笑ってしまう。
「そんなに驚くことじゃないよ。前にも言ったじゃないか」

「前にも?…:あ、あの時か」

思い出したのかポンツと手を打つ。それを見て俺は、

「ボケるには少し早いんじゃないかな?土道じいちゃんや」

「誰がじいちゃんだ」

まあ、あれを見れば俺がヘラタトスクのこと等を知っていると云った事など忘れるよな。

それほどまで衝撃的だったんだろう。

現に、苦笑いしながら耳につけてるインカムに向けて謝っている。
こいつ、隠す気あるのかいな?

「それで、何処に行くか決まってるかな?」

「それは、だな…」

「決まっていないならこちらで決めさせて貰うよ」

土道の言葉を途中で遮る。それに少し慌てるように、頷く。
「で、どうしようかよしのん?」

先ほどからずっと俺の後ろにいたよしのんがひよこつと顔を出す。

『そうだねー。別にトウヤ君が決めても良いよー』

「そうか」

さて、よしのんに許可を貰ったし何処に行こうか。

時間は夕方近く。天候は雨。人数は三人、と一匹かな？

「私の店にでも来るかい？」

☆

場所は代わり、灯夜達がいる遙か上空。

不可視迷彩で姿を隠した空中艦へフラクシナスの艦橋席に座る燃えるように赤い髪をした少女、五河琴里はチュパチャプスを口に加えながら砂嵐が走る映像をみていた。

「やつぱり、こっちに気付いてたわね。今度は距離を離してたのに」
はあーと溜め息を付きながら、先程飛ばした新たな観測機からくる映像を待っている。

「それにしても、あの馬鹿は。なんで肝心な事を忘れていたのかしら」
琴里が言っていることは、灯夜がヘラタトスクを知っていた事だ。
精霊を保護する組織、当たり前だが精霊のことは公にできない。空間震が実は災害の力を持つ精霊でした、なんて民間人が知ればパニックになる。

その上、ヘラタトスクのことはASTにもわかっていない。故に、何故精霊であるヘアルケミストが知っているのか。

「ほっつんとに謎ねえ」

再度溜め息をつく琴里。出来ればあの精霊を此方に来てもらいた

いがもし、暴れたりなどしたら大惨事だ。

それに、

「公園全体を覆う不可視の膜が邪魔で直接、転送は無理ね」

観測機が壊される前に公園全体を覆う不可視の膜があることが今まで解析していたクルーから伝えられている。

どうやら膜で、降ってくる雨を遮っているようで公園に雨が降っていないのはその為だ。

土道が普通に公園に入れたところを見ると特定のを防ぐものようだ。

雨が触れた瞬間、弾かれるように膜を避けて降り続けている。

「今は土道に任せるしかない訳ね」

観測機や転送も使えず、唯一解っているのは土道が身に付けているインカムの音声だけだ。

此方からの指示は出せるが、相手はこちらの事を知っている。迂闊に指示を出せずにいる。

今も、フラクシナスの選択を行う瞬間に彼方が先に決めてしまっている。

だが、幸なことにどうやら彼女が営業している店に招待されたようだ。

「土道、チャンスよ。誘いにつて少しでも好感度をあげて頂戴」

そう土道に指示を出し、こちらも準備を始める。

舐めきったチュパチャプスの棒をゴミに捨て、新たに取り出し口に含む。

「さあ、私たちの戦争を始めましょう」

☆

「3時過ぎだがおやつでも食べるとしよう」

ケミストに来店した三人は、灯夜に渡されたお品書きを見て悩んでいる。

「なあ、なんでこんなに安いんだ？」

「ヒント、私の能力」

土道が書かれている料金表示が他の店と比べてかなり安いという疑問を灯夜に投げつけ、それに答える灯夜。

能力で造ったことに納得する土道だったが、相変わらず規格外な能力だと内心思いながらサイドメニューに視線を戻す。

「んじゃ、俺はホットケーキで」

『よしのんはこのスペシャルジャンボフルーツパフエでお願いねー』

「ふむ、私はショートケーキにしようかな」

カウンターで注文を聞いた黒執事は、一つ頷くと店の奥にある調理場へ向かった。

それを横目で見ながら、土道は話を切り出す。

「なあ、灯夜。聞きたいことがあるんだけど」

「なにかな、土道。あ、よしのんのスリーサイズが聞きたいとかはなしで」

「誰が聞くかつ。…お前がなんで俺のことや琴里達の事を知っているのかを聞きたい」

灯夜はフード越しから土道の顔を見る。真剣そのものだったが、それに対して灯夜はクスクスと笑い出す。

「確かに、土道の事は色々知っているが…君の妹も関わっているみたいだねえ？」

「っ！」

しまった。と言う顔をするが既に手遅れ。フード越しでもわかるニヤケた笑みを浮かべていることは土道はわかった。かまをかけたれたことを…自分の失態に苦虫を潰したような顔する。

「まあ、知ってたけどね」

「つて、知ってるのかいっ!!」

失敗したと思っていた土道は思わずツツコミを入れる。
そんな土道を見て声を出して笑い出す。

「あー、面白い。…きて、何故知っているか…なんて答えればいいものか」

顎にてを当てて悩む。原作知識を持っていると言っても信用されないだろうし、頭がおかしいやつと思われてしまうだろう。

「私の能力の一つ、とだけ言っておこうかな」

「錬成以外にまだあるのか?」

呆れたような顔をする土道。

『トウヤ君は、チートだもんねえー』

「…否定はしないね」

その気になれば兵器でも何でも創れるだろう。

四糸乃の封印の件が終わったら何か創ってみるとしよう。そう考えていると奥から黒執事が頼んでいた料理を持って来た。

「おお、旨そうだな」

『でつかあい!』

「よしのん、それ食べられるのか?」

テーブルに置かれた中でひとときわ目立つパフエ。

座っているよしのん以上はあるパフエを見てはしゃいでるよしのん。

「料理も来たことだ。食べよう。」

「それもそうだな」

『いただきます』

先によしのんがスプーンを持って食べ始める。

口に入れる度に、無表情を保っていた四糸乃の目が開かれ美味しそうに食べていく。

流星は、黒執事の料理。隠れている四糸乃の人格を表に出すとは…

「そうだ、土道。質問に答えたんだ、何か話してくれてもいいじゃないか?」

「何話せばいいんだよ」

「そうだな…君達が保護している精霊、確か十香だったかな？その子の事を話してくれ」

「十香の事を？」

十香編の後に転生した灯夜にとって原作通りに封印出来たのか気になっていった。

「あー、それじゃあ。まずは十香と会った時から話そうかな」



「なるほど、要は無理やり相手の唇を奪った上に服をひっぺがして辱しめをー」

「いや確かにキスはしたけど無理やりはしてないし服もひっぺがさないぞ!!」

士道の話聞いたが、原作通りに十香に会い、名を与え、封印したようだ。

前々から思っていたが、なんでキスで精霊の力を封印出来るんだ？「それにしても、不思議なものだ。キスで精霊の力を封印できるなんて」

「それ、俺も思った。だけど琴里はまったくわからないんだと」

原作はまだ終わっていないから俺にはわからない。一応、士道編、つまり十二巻までは見ているがその先がなあ…

最後は狂三が乗っていた第二の精霊がいたコンテナを覗いていたから次はその精霊を攻略するんだと思うんだけど。如何せんどういった能力で天使を持っているかは不明だ。

狂三が始源の精霊を探しているから情報源としてこの精霊を探している。第二の精霊はDEM社の地図に無い島だったか？に幽閉されている。この情報を利用して一緒に第二の精霊を強奪するか？一

つの選択としてこれは保留。もしくは、精霊自ら現れるまで待つ。これも一つの手だ。

やはりこの件は狂三が来るまで保留だ。下手に手を出してDEM社、アイザック・ウエストコットに目を付けられるかも…。いや、アレを見たんならもう既に目を付けられている？うわあ、俺もう手遅れなの？

「はあ…。」

思わず深いため息が漏れ出る。良かれとやったことが後々で後悔するとは。いや、そもそも死者を蘇らせるなんて誰もが知れば狙ってくるのは当たり前。

もし、この世界にDEM社以外の組織も狙ってくるかもしれない。有ったらDEMが吸収してるか？

「どうした。急にため息なんて付いて？」

ため息をついた俺を不思議そうに見てくる土道。

「いや、自分がやった行いを後悔してるだけさ」

「まあ、確かにお前の能力は凄いからなあ…。」

「私のを土道で例えるなら自室で自分の必殺技を——」「はいストツプうううう!!」

土道の黒歴史を話そうとするとすぐにとめられた。

何で知ってる!?!やここで言うのやめろつと言っているが、だが断る。

『そう言えばトウヤ君は、なんでこのお店を開いているの?』

今までパフエに夢中だったよしのんが聞いてくる。

まあ、この世界での俺の戸籍やら住所は真っ白な状態。今は家があるが戸籍はまだない。戸籍は後で作るとしよう。

「飲食店に興味があった、あとは住むところがなかったからなあ」

「あー、精霊だもんな」

精霊だから。まあ、空間震?から現れた俺を見れば精霊と思うだろう。だが、今思うと何故俺を精霊だと認識した?

俺には霊力がない。なら、精霊として識別は…。ただ精霊(仮)として見ているのか霊力をうまく隠すことができる精霊としてか。一

体どちらか。

「さて、そろそろ食べ終わったかな？」

「おう」

『美味しかったあ』

テーブルを見ると食べ終えた皿はいつの間になく、隣にいた黒執事によって下げられていた。

本当にいつ下げてるんだろな。

「よろしい、なら食後の散歩でも行かないか？」

席を立ちながらそう聞く。土道は苦笑いを浮かべて頷き、よしのんは次はどこに行くかと聞きはしゃいでいる。

「さてさて、どこに行こうかな」

近くのショッピングモール？それとも丘の上の公園かな？

よし、そこにしよう。そこなら景色もいい……店の周りにはお客さんの相手もできるだろうし。

先ほどから何か動きがあるな。慌しい気配が外から感じ取れる。

「さて、デートを再開しよう」

第十五話 前菜

「やってきました、丘の上の公園」

三人はここまで歩いてきたが、公園にはまったく人の気配がない。無人の公園に灯夜の声が寂しく響く。

「ここまでついて来てなんだけど、なんで公園なんだ？」

『もつと他の場所でもよかつたんじゃないのー？』

二人が文句を言うが、灯夜はそれを無視し近くの遊具に軽々と跳び乗り移る。

「いやいや、ここから見える景色はとても見晴らしがいいから気に入っていてね。是非とも二人に見てもらおうと思つてな」

そういうながら、遊具から離れたフェンスに飛び映る。

そつちを見た二人は、灯夜の向こうを見て納得する。

そこからは街全体を見渡せるようで、場所的にも日がくれる時間ならさぞかし夕焼けが綺麗に見えるだろう。

「だが、土道は前に来たのだったな」

「あー、十香の時か」

「暴れてる女の子に無理矢理キスして、その上服を剥ぎ取る……土道くんって鬼畜う」

「誤解だ!？」

「そのとき、抱き付かれたようだが感想は？」

「柔らか、つて何言わせようとしてんだよ!!」

『土道君そんなことしてたんだ』

「いや、よしのん。誤解だから、誤解だから引かないで」

よしのんに引かれ、焦る土道を見ながら灯夜は爆笑する。

「よしのんも気をつけたほうがいい。こんな脱がせ魔に」

「いい加減にしろ!!」

そろそろ土道がキレてしまうので（既にキレている）この辺で止めておこう。

さて、ここら辺ならそんなに暴れても問題ないか？

灯夜は、周りに敵意ある視線を感じながら警戒する。

肌をピリピリするような空気が辺りから漂い、雨は止み曇り空が広がっている。周りには人の気配がない。

多分、ASTが人払いをしたのだろう。

今側に入るのは、精霊である「ハーミット」四糸乃。

まだ一般人として扱われている精霊の力を封印する力を持つ五河士道。

そして、正体不明の精霊（仮）俺こと灯夜。

こうしてみると俺だけ曖昧な感じ。

さて、ASTが何か起こすのは今か？

ASTが狙うなら俺、もしくは四糸乃のどちらか。

多分だが、四糸乃が狙われるだろう。

霊力も天使も出さない不可解な俺よりも、討ち取る可能性が高い四糸乃がやり易いだろう。

さて、四糸乃に障壁でも張っておきますか。あ、勿論俺にも張っておきますよ？

この時、俺は自分の力に慢心していた。

どんなものを錬成し、その力を振るえることに。

だから……

——四糸乃へと迫る光の咆哮に対処が遅れた。



上空から不可視迷彩を発動しているフラクシナスの艦内で琴里は、件の「アルケミスト」を観測機で監視している。

監視場所もかなり離し、ギリギリ士道たちが見える位置での監視だ。

「ほんつとに面倒くさいわね、この精霊」

琴里は、モニターに映る黒づくめの精霊に悪態を着く。

ギリギリまで「アルケミスト」を観測した結果、灯夜からは霊力の反応は観られなかった。

霊力を隠すのが上手いのか、それとも……

「精霊の癖に霊力がないとか？」

そんな考えが頭には浮かぶが、頭をかぶり浮かんだ考えを追い出す。

それは有り得ない。精霊は、霊力の源の霊結晶があつて精霊だ。

「識別名の通り、錬金術を使う。金を錬成し、剣を産み出す。……失つた命さえも」

正直、討滅するだけつて話じゃなくなる。

あの精霊を捕獲し、従えればどんな物を創れてしまう。

それも、理論上不可能な物や。例え、無理だとしても今ある兵器の量産などはあつという間だろう。

それだけではない。失つた生命すら錬成したその力、それは不老不死ではないだろうか？

〈アルケミスト〉によって生き返らせられた民間人を健康診断として何人か検査したが、これといつて異常はない。むしろ健康体だ。

あの光景は既にかんりの規模で広まっているだろう。

A S T だけではなく、あのDEM社も出てくるはず。

「そうなる前にも、あの精霊の力を封印しないと……」

嫌な予感がする。

琴里はクルー達に観測の続きを指示に出す。

だが、突如艦内に喧しいアラートが鳴り響く。

「一体何がっ!？」

「士道君達がいる位置から南に数百メートルに魔力反応がっ!!」

クルーの一人の報告の瞬間、画面が真っ白に染まり艦内を眩しく照らす。

皆が余りの眩しさで思わず眼を伏せる。

光は観測機の破壊によつてすぐに消え、映像は砂嵐が映るだけだ。

「っ！土道たちはどうなったの?!」

呆けた頭に活を入れ、土道たちの安否を確認させる。クルー達は目の前のコンソールを叩き、映像を映す。映像に映った光景に、琴里はギリツと歯を食い縛る。

「何よ、これ……」

映像には、何かが通ったように円柱に挟られていた。周りの地面は融解し、赤く光を放っている。

先程まで見ていた公園は見る影もなくなっていた。

「民間人の避難もせずにこんな、兵器を？」

「いや、既に避難は済んでいるようだ」

いつの間にか隣にいた礼音が、言う。

礼音には、〈アルケミスト〉の解析をしていたはず。

艦内のアラートで此方に来たのだろう。

「我々に気づかれずに避難を行っていたということ、目的は彼女か」

〈アルケミスト〉……」

まさか、こんなにも早くくるとは思いもしなかった。

だが、それは自分の考えの甘さだ。

起こってしまったのは仕方ない。今は土道たちだ。

「司令！土道君たちを発見しました!!」

「っ！モニターに映して！」

土道には、イフリートの力がある。ある程度の再生能力がある。ま
ず生きているだろう。……そう思いたい。

だが、精霊達は別だ。

今まであんな攻撃は見たことはない。

例え、霊装を纏った精霊でも流石にあの攻撃は防ぎきれないかもし
れない。特に、あのハーミットでは。

映った映像に、琴里は絶句する。

過去のように土道が腹に穴を開けていたわけではない。

ハーミットが、血塗れになっていたわけではない。

〈アルケミスト〉がほぼ瀕死状態で倒れていたからだ。

だが、土道やハーミットの二人を見るが怪我ひとつも負っていない

ように見える。それどころか彼等の周囲だけ破壊のあとがない。

あの傷ではもう……

「つー士道君達の上空にASTが!!」

やはりASTか!

琴里は、してやられたとやり場のない怒りをモニターに向けて睨む。

「……士道達を回収よ。後、アルケミストの治療の準備っ!」

琴里の、指示で艦内は慌ただしく動き始める。



腹に穴を開けられた士道の時より重傷な灯夜は、自虐的な笑みを見せる。

これ程の怪我、もう肺や内蔵も焼かれているはず。

なのにまだ生きている……

いやまさか、ここまでの傷で生きてるとは……

転生と同時に体も変わったのかな?

まあ、転生物ならよくあることだ。特に気にしないでおうか。

だが、行動しなければ今も磨り減っていく命が消えてしまう。

灯夜は、まず使い焼かれた部位を分解し始める。

同時進行で失われた血肉の錬成を始める。

その瞬間、神経が錬成によって蘇ったのか錬成部分に激痛が走る。

身体をヤスリで削られ、傷口に指を入れられぐちゃぐちゃに掻き回

されているような痛み。

人体錬成は、これで二度目。

そろそろ、真理の扉が開かれるんじゃないか?

下らない思考で痛みを紛らわす。

分解が終わったのか急速に肉体の錬成が早まり瞬く間に肉体の錬成が完了した。

ついでにローブも直され灯夜は元の真っ黒黒助になっていた。

横たわりながら身体をペタペタと触り、異常がないかを探すがこれ

と行って無い。

うむ、いつも通りの変質者。

側で泣いていた四糸乃は、何が起こったのか理解できずポカンと呆けた顔をしている。

その後ろで青い顔をした土道が……って土道いたんだ。

既にフラクシナスが回収したかと思っていた。

二人にはこの先生きて貰わなくてはならない。防壁の大半を二人の前へ展開していた。お陰で二人は怪我一つ無く無事。俺は痛い思いしたけどね。

試しに、直った腕を動かしたり体を前に倒したりと、確認するが特に目立った障害はない。うむ、健康体。

完璧に直る俺の錬成マジチート。

「……はあ、いきなり攻撃とは品がない」

上空にいるASTたちを見上げながら、ため息をつく。

ASTたちは復活したこちらの姿を見て動揺しているようだ。中には折紙もいるようだが、何故か他の隊員に肩を貸して貰って鋭い目付きでこちらを見ている。

いやあー、情熱的な視線があー……

まあ、それはいい。問題はあの攻撃だ。土道が前に受けたCCCか？いや、それにしても被害がデカ過ぎる。

……新兵器か？なら、今の内に破壊しておこう。

折紙がああ状態だ。おいそれと連発出来るものではないのだろう。

ならばー

踵を地面へ叩き付け錬成を始める。青い稲妻が周囲へ広がる。

天気は曇りから雨へ、水分は幾らでもある。

雨水が集まり、それらは複数の数になりふわふわと辺りを漂い続ける。

そして、更に錬成を加える。

水球は、まるで急速に冷やされたかのように凍り、氷の塊と化した。

だが、変化はこれで留まらない。錬成は続き、氷の塊にトゲが生え出しそこから無数の刃がASTに向かって襲い掛かる。

「っ!?!散開っ!」

隊長らしい人物は、全隊員に指示し回避させる。

氷の刃は、直線上にしか飛ばずAST達は難なく回避していく。だけど、忘れてはいけない。その刃は元は水。

通り過ぎた刃は形状を水へと戻し、また氷の刃と化しASTへと迫る。

更に、水球を増やし氷へと変えAST達を囲むようにして配置する。それによって、四方八方から刃を降ってくる。それだけなら、ASTに何の問題はない。持っている剣や銃で撃ち落とすなりすればいい。

躲せないのなら、随意領域で防げばいい。

もし、その随意領域が無意味なら?

一人の隊員に氷の刃が当たる。勿論、随意領域で防御している。隊員は、迫ってきた刃を寸でのところで防げたことで表情に安堵があった。だが、直ぐにその表情は変わる。

刃が当たった随意領域の部分から凍っていく光景を見て。

「な、何よこれっー」

その先の言葉は氷の中へと消えていく。隊員がいた場所には一つの氷の球体へと変わってしまったからだ。

そして、思い出したかのように重力に引かれ落下して言った。

「そんなんっ、随意領域に反応してるというの!?!」

随意領域の凍結は、四糸乃の天使の力をパク、参考にした物だ。お陰でAST達は、随意領域で受け止める事はせず撃ち落とすか避けるかのどちらかとなった。

数名凍り付かせたが、他の隊員は中々に華麗に避けていく。

伊達に精霊を相手にしてきてはいないようだ。

お空で弾幕ごっこ(一方的)をしているASTは放っておき灯夜は、側で座り込んでいる四糸乃に近づき同じ目線になるようにしやがみこむ。

見たところ怪我はないようだ。

「四糸乃、怪我はないか?」

「あ、灯……夜さん？」

「ああ、みんな大好き灯夜さんだ」

キラツと決めてみる。ホントだよ、だってASTの皆が目の色変えて追いかけてくるから。物騒なもの持ってだけど。

「……ひっぐ」

「え？」

四糸乃は嗚咽を漏らしながら急に泣き始めてしまう。

おおおおお落ち着け、なぜ急に泣くんだ?!怖かったの?もしかしてキモかった?うわあー、死のう。

「…と、うや、さん!」

俺にしがみついて更に泣き出す。多分、俺が無事だから安心して泣いてるんだよ。

「よしよし、俺は無事だぞ」

俺は四糸乃を撫でながらあやしていく。撫でて気付いたがめっちゃ髪さらさら。ずっと撫でていたいその触り心地。そして抱き付く四糸乃。

「ここがエデンか……?」

最近、癒しがなかったから四糸乃でほっこり。

「お、おい。大丈夫か?」

そんな天国を味わっていると、空気と化していた土道が話し掛けてくる。

おいおい、邪魔すんな土道や。お前はさっさとフラクシナスに回収されてろ。

「なんか俺、罵倒されてるような気がする」

「はて、何のことやら」

そんな土道を置いておいて、まだ空で弾幕ごっこに勤しんでいるASTをどうするか。

何人が被弾したようで、氷のオブジェ(球体)と化したASTが地面に転がっている。

勿論、殺つてはいない。きっと氷の中で寒さで震え、徐々に無くなる酸素を吸い、助けを求めているだろう。

だが、攻撃を始めて数人が被弾した後は、誰も当たってはいない。このまま、長期戦に持ち込めば全員ピチユるだろうが、それまで待つ気は無い。

なら、終わらせようか。



折紙は、へアルケミストへによって造られた刃から逃げ惑いながら歯を食い縛る。

目標であつたへハーミットへを撃ち取ることが出来ず、へアルケミストへの反撃を食らい部隊を危険に晒した上に、あの場に土道が居たことに気づけなかつた自分に怒りが沸いていた。

気付いた時には既に遅く、あの時の光景が脳裏にフラッシュバックされるがそれよりも早くへアルケミストへの猛攻が始まった。

後悔は、後で幾らでも出来る。今は、この状況をどうにか切り抜けることに集中しろ。

そう、自分に言い聞かせ顕現装置を操作していく。

あの兵器を使った後のため、かなりのダメージが身体に来ているよううで操作が覚束ない。

この程度の攻撃、何時もなら躲し切りへアルケミストへに直接攻撃を行うことがつ！

酷い頭痛とまるで身体中に重りを付けられたような身体の怠さに顔をしかめながら目標のへアルケミストへを睨み付ける。

未だに氷の刃が乱れる空の中で、へアルケミストへはその手に一本の剣を造っているのが見えた。

それを視界に捉えた瞬間、ゾワリツと鳥肌が立つ。

あれは、一体なんだ？

疑問が頭に出てくるが、それ以前にあれはヤバイと頭に警報が鳴り響く。

直ぐに他の隊員に伝えようとするが、目が眩むほどの黄金に輝く光でそれは止められた。

光の発生場所は、〈アルケミスト〉が持つ剣から発せられていた。黄金と蒼の装飾がされた美しい剣。その刀身から光が溢れ辺りを照らしている。

〈アルケミスト〉は、両手で構え上空に掲げるように振り上げる。

その光景は、その場にいる誰もが見惚れてしまう美しさと、心奪われる神秘性があった。実際、何人か見惚れて止まり刃に当たり凍り付けにされていく。

此の場を切り抜ける方法を、折紙は思考するが目の前の精霊は非情にも、

「虚像^エされし^スー^スー^スー^ス」

残酷にその剣は^スー^スー^スー^ス

「……夢幻^カの^リ剣^バ」 ああああああああ!!!」

私達に降り下ろした。

刀身から放たれる光の咆哮は、轟音と共に私達を飲み込みその姿を書き消し周囲を光で塗り潰していった。

全てが光に包まれた後、結果的に私たちASTは無事だった。

あの攻撃を食らった筈だが、何処にも怪我もなく可笑しいところもない。他の隊員もそうだ。

凍り付けにされた隊員以外は軽傷等で済んでいる。

だが、あの攻撃で対象には逃げられてしまった。

「霊力の反応もなし。完全にロストしたわ」

隊長である燎子は、そう言いながら悔しそうに顔を歪めた。

新兵器を使ってへハーミットも倒せず、へアルケミストに反撃を
くらい、その上逃げられた。

悔しくないやつなんていないだろう。

「はあ、後で上に色々言われそうね……あー、また始末書が」

この後の事を考えた燎子は、頭を抱えて唸りながら無線で指揮を
取っていく。

「凍り付けにされた隊員の救助は？……そう、無事なのね。良かった
わ……何ですって？」

無線からの答えに驚いている、というより呆けている燎子に折紙は
どうしたかと聞く。

「あー。凍り付けされた隊員は無事だわ。……だけど全員首だけ出し
て埋められているらしいわ」

「……は？」

燎子の言葉に折紙も理解できないようだ。

詳しい状況を聞いてみると、皆氷は溶かされて地面へ埋められ首だ
け出ている状態で落書きなどをされているようだ。

中には、ワイヤリングスーツが下着に変えられていたりフリフリの
魔法少女のような服装になっていたり、穴の中に一緒にドジョウを入
れられていたりなどされているようだ。

変えられたワイヤリングスーツは正常に機能しているようで、しか
も前よりも魔力制御が上昇している等。

「……なにがしたいのよあの精霊は」

自分の隊の現状に更に頭を抱える燎子であった。



やあ、みんな大好き灯夜だ。

A S Tから逃げて自分の店に入るところだ。

今頃、隊長は自分の隊の様子を見て頭を抱えているのかな？
いやあー、目眩ましで聖剣（仮）使うのってどうかと思う。

ま、偽物だけど。本物なら一瞬で消滅させてるよ。オーバーキルだよ。

さてさて、俺の他に土道と四糸乃がいるんだがほとぼりが覚めるまで此所に置いておきたいんだが、ここよりフラクシナスがいいんじゃないかと思ってきたよ。

彼処ならインビジブル掛かってるし、安全だろ。

「という訳で、帰れ」

「どういうわけだよ」

飲み物を飲みながら休んでいた土道が、何言ってるんだコイツ？みたいな顔をしてこつちを見る。

「いや、普通に君が所属している組織にいた方が安全だろう。今、通信手段もないようだし」

「誰が壊したと思ってるんだよ……」

「さて、誰だろう？」

すつとぼける俺に土道はため息をついて飲み物に口をつける。

おいおい、もっとツツコめよつまらんだろ。

「それより、そのくっついて離れない子……よしのんはどうするんだよ？」

四糸乃に指を指す土道。土道が言ったように四糸乃は俺の隣に座り引っ付いている。離れるように言ったが涙目で首を振られれば諦めるしかないじゃないか……

「因みに、この子は四糸乃。よしのんは四糸乃の腕に嵌めてたパペツトの名前だ」

「そうなのか？」

「私の推測だが、彼女達は別人格。大人しい方が四糸乃、快活な性格はよしのんだ。多分、彼女を守るために現れた人格のようだが……違うか？」

なんて、自分の推測を言っているが原作知識ですありがたいとごうございませす。

四糸乃は、声をかけられてビクツと体を震わせたどたどしく言葉を出す。

「は、い。よしのんは、私の……ヒーロー、みたいな」

「ということだ。何時もはよしのんの人格が表に出ているが……」

『いやあー、そう言われるとよしのん照れちゃうなあ』

「何故か、二人とも表に出ているのだよ」

よしのんは四糸乃を守る為の人格だ。解りやすく言うなら、よしのんは四糸乃の恐怖や痛みを引き受ける人格。その為、四糸乃は表には全くと言って出てこない。

なら、何故出てきたか。

憶測だが、四糸乃自身が、表に出てくることを望んだからだ。

それによってよしのんと四糸乃が同時に表に居る訳。

「とりあえず、何か食べるか？食べるなら黒執事が」

と、そこで黒執事がトレイ持って立っていた。トレイには果物が散りばめたアイスクリームが乗っていた。

だからなんだその仕事の出来は。

言われなくても目的のものを持ってくるなんてテレパスか？

「本当に凄いな。その執事」

「……まあ、私が造ったからね。土道、こちらは任せておいてくれ。そつちは気にせず私の店の売上貢献でもしておけ」

「奢りじゃないのかよ……」

「最初の飲み物だけだ」

土道は、財布の中身を考えながら黒執事に注文をする。

その間に俺は四糸乃にデザートを与えてあやす。

四糸乃がよしのんと話している間、俺はスプーンを手に取りデザートのアイスを一口取り四糸乃に声をかける。

「四糸乃、こつちを向いてみる」

その声できよんとした顔を此方に向ける。

「あーんつと」

その口にアイスを放り込む。勿論、優しくだ。

突然、口に入れられ驚き、アイスの冷たさにまた驚き、口の中に広

がる甘さにまたも驚く。驚きすぎじゃね？

「四糸乃、今日は良く頑張ったね。疲れただろう？これでも食べて休んでいってくれ」

そう言っつて四糸乃の頭を撫でる。

四糸乃は、呆けたような顔をした後に何故か泣いてしまう。

なんでえー？なんか、やらかした？

「ち、がい……ます。かなし、くて……じゃ、なくて」

俺の慌てる様子に四糸乃が声を出す。

「うれし、くて……誰に、も……そう、いわれた、こと……なくて」

……本当にこの子は純粹だ。汚れを何も知らない無垢だ。そんな彼女に俺は眩し過ぎる。

俺は、その言葉に対し何も言わず再度頭を撫でて返す。

「さ、泣き止んだろう？今は甘いものを食べておけ」

スプーンを渡し、アイスを食べるように急かすように言う。

泣き止んだ四糸乃は、不思議そうにしていたが言われた通りアイスを食べ始める。

「慣れてんな」

「まあ、ね」

土道に言葉を返しつつ自分のカップに口をつけて一息つく。

が、まるで休ませないように誰かが店の裏手にやって来るのを感じる。感覚的にいきなり現れた。

はは、どうやら招待状は無事に読んでくれたようだな。

「さて、土道。そろそろこちらに來客が来るんだが」

「ん？そうなのか。なら俺は帰ろうか」

「いや、そのままでもいい。今日の客人は君にも関係する」

「は？それってどういうー」

土道は言葉を途中で止めた。いや、止められたと言った方がいいだろう。

カランカラン、と出入り口から入ってくる來訪者によって。

「おやおや、まさか。ー司令官……自ら現れるなんて」

「……こんな強迫紛いの御誘いを受けたからには行かない訳ないじゃ

ない」

軍服を肩で掛けた赤色の髪を黒いリボンで二つに結んだツインテールの少女……五河琴里がこちらを睨みながら言った。

おおう、怖い怖い可愛い。

さて、人数は揃った。初のラタトスクへの接触。

これが吉となるか凶となるか。

あー、この後の話し合いが楽しみだ。

第十六話 交渉【前編】

喫茶店ケミストで、不穏な空気が流れているのを土道は感じ、居心地悪そうにそわそわとしているのを横目で見てから視線を前へと戻す。そこには五河妹がこちらを睨み付けて立っている。どうやらちゃんと招待状は受け取ったようだ。

俺はへらへらと笑いながら言う。

「おや、お気に召さなかったのかな。ただ、お兄さんと精霊がいると書いてあったただけだが」

「どの口が言うのかしら」

何故か機嫌が悪い妹さんに席を勧める。勿論、土道の隣だ。

琴里が座つたのを見計らったように何時から居たのかわからない黒執事が飲み物を出す。

それに琴里は驚くが、礼を言ってカップを手にとって匂いを嗅ぐ。「別に毒なんて入ってはいないさ。御客さんにそんな失礼なことしない」

「どうかしら、怪しい風貌の貴女に言われても説得力ないわよ」
そういつて一口口に含み、味を確かめてから飲み込む。

「……美味しいわね」

「ウチの黒執事が作るのは美味しいからな」

自分も飲み物を手取る。今日はコーヒーの気分。

……黒執事よ、砂糖とミルクを所望する。

黒執事を呼ぶ、前に目の前に砂糖とミルクを置かれる。分かっているなら最初から出しても良かったんだよ？

俺が、砂糖とミルクを投入しているのを見計らって、土道は俺に声をかける。

「なあ、なんで琴里が来たんだ？」

「ん？私が招待したから」

「脅迫状でね」

「脅迫状？」

土道が、首をかしげているのに琴里がポケットから紙を取り出す。

それは1つの封筒だった。勿論、俺が送ったものだ。

丁寧に封蝋も付けてある。封蝋の様子はフラメルの十字架だ。

士道は、受け取った封筒の中の手紙を見て内容を読み始める。

『貴方のお兄さんと保護対象の精霊は、私が預かりました。返してほしければ代表者一人のみお越し下さいまし』……脅迫状じゃねえかよ！』

「だからそう言ったじゃないの。数分前の事も覚えきれないの？だからウチワヒゲムシなんだから」

妹の相変わらぬ口の悪さに士道はガクつと落ち込む。

それを見ている俺は面白そうに笑う。

見てて飽きないな。うん。

「ま、士道が単細胞なのはどうでもいいわ。それで、何故私を呼んだのかしら？」

「おや、別に君が来るようにとは書いてなかった筈だが」

「ええ、そうね。でもこの手紙には士道のことを兄と書いてあったつまり、私を示して書いたつてこと」

「……ふむ」

「どうよ、とドヤ顔を決めている琴里には悪いんだが、そこまで考えて書いた訳じゃないんだよなあ。」

正直、令音さんでもよかつたし。自分で言うのも何だけど普通に考えて司令官自らこんな怪しいやつ所に来るか？

「君がそう思いたければそうすればいい。私は特に言うこともない」

「そ、ならさっさとここに呼んだ理由を言いなさい」

「せっかちな人だ。君を呼んだのは幾つかあるがまずは四糸乃について」

隣にいる四糸乃を指を指して言う。

「四糸乃？その子の名前はよしのんじゃないのかしら？」

「いや、腕につけているパペットがよしのんだ。詳しいことはそちらで調べてくれ」

「わかったわ。それで、四糸乃をどうすればいいの？私達、ラタトスクとしては保護したいのだけど」

「その保護についてだ。彼女は私が保護したいと思っている」

「本気で・・・言ってるのかしら？」

俺の発言を聞いた琴里の目が細められる。

「ああ。君たちラタトスクは精霊の保護を目的としている。それは間違いないな」

「ええ、そうよ」

「それは、上層部皆が思っていることなのか？」
「・・・」

それを聞いた瞬間、琴里は沈黙する。

原作では士道が今まで封印してきた精霊の力が暴走した際の処置として、フラクシナスの司令官であり妹でもある琴里に始末するように指示を受けている。

確かに、彼らの選択は正しい。だが、それではASTたちと何ら変わらぬ。

それに四糸乃を封印しなければ士道は暴走しないかもしれない。

だが、それでは四糸乃が常にASTに危機に晒さ続ける。

「そんな組織に彼女を預けるわけにはいかない」

「でも、貴女が保護したとしてもASTから守りきれぬの？今回の事があつてよくそんなことが言えるわね」

「・・・」

琴里の言うとおり。士道と四糸乃を守れたが自分が犠牲となった。

何とかあったが、もしあの場に人類最強が居たのなら、例え瞬時に身体を錬成している間に仕留められていただろう。具体的に、頭と胴体がお別れして。

この力も、万能であるが使いこなす人物が未熟なら意味がない。それが今回の事でよく理解した。

「確かに。今の私では厳しいだろう。だから、君たちフラクシナスの力を借りたい。期間限定でもいい。無論、タダとは言わない」

トンツとテーブルを叩くと、青い錬成光が放ちテーブルの上には何かの機械がごろごろと錬成される。

「私が壊してしまったフラクシナスの観測機の数だけある。承諾して

くれるのならそちらが望む物を出そう」

「物で釣ろうってわけね」

「そういうことだ」

琴里は、少し考えた素振りを見せた後に顔をあげる。

「……何が目的なのかしら？」

「ん？」

「正直、その申し出は有り難いわ。ええ、私たちも力を貸してあげる。でも、どうしてそこまでしてその子を守りたいの？守りたいなら、私たちのところで保護した方がマシよ。悪いことは言わないわ。今すぐに彼女を——」

「別に、私は彼女を任せても良いんだよ」

「え？」

琴里の言葉に被せるように言う。いきなりすることに戸惑いの表情を見せる。

「彼女を守りたい、私はそう思っている。君や土道が精霊を保護、守りたい気持ちも解る。だが、彼女はどう思っている？全く知らない訳が解らない組織に守ってやる、保護してやる。そう言われて信用するか？自身を任せられるか？」

「それは、土道が——」

「そう、土道が渡り橋となってくれる。相手が土道を信用すれば土道自身が安全と言う組織に保護を求めらるだろう。土道自身も精霊を守りたいと思っている。」

はっ、使い勝手の良い兄だろうか」

ここまで言われた琴里は、顔を赤くさせ怒りで身体を震わせている。

今にも拳が飛んできそうだな。いや、飛んで来るのは砲弾か？

「だが、結果的に精霊は救える。兄が死にかけようが、他人が死のうが、精霊を救えればそれでいい。こんな過程は重要では無い。結果が全て。結果良ければ全てよし。ハッピーエンドだ」

「……そうね。だけどね、そうならないよう私達フラクシナスが全力でサポートするのよ」

琴里は、鋭い目付きで睨み宣言するように言い放つ。その瞳の奥には確かな意思が感じられる。放った言葉が彼女の本心だと。

「……わかった」

「え？」

「四糸乃の保護は君達がやってくれ。そこまで言うのなら彼女を、精霊を守ってくれるのだろうか？」

「え、ええ。勿論よ」

相手がいきなり賛成してきたのに戸惑う琴里。

「なら、まずは四糸乃を探さないとな」

「え？」

隣を指差し、それに釣られ琴里たちの視線を俺の横に向けると空になった器と誰もいない席が移る。

「どうやら、隣界へ戻ってしまったようだ。次現界するのを待つしかないようだな」

「あんた、わかってたわね」

「さてさて？なんのことやら」

「まあいいわ。それで、他にも何かあるんでしょう？さっさと話しなさい」

「せっかちな妹さんなこと。……私のことについて。君達は私を精霊として観測しているようだが」

「そうよ。識別名〈アルケミスト〉。物質を他のモノへと変える錬金術師。貴方にぴったりの名前ね」

あ、俺の識別名〈アルケミスト〉なんだ。

てつきり災厄とか深淵みたいな識別名かと思ってた。

「確かに、私にぴったりだ。まあ、今はそれは置いておこう。協力に承諾してくれる君達に私の事でも話そうかと思ってな」

「貴女の事？」

そのことに疑問に思うが、攻略の幅が増えるのは良いことだと思い直し聞くことにする。

「私は……精霊ではない」

その言葉に琴里の顔は不機嫌そうで呆れているような表情となる。

「……それは無理があるんじゃないかしら」

正直、その言葉に琴里は呆れ一瞬言葉が出なくなる。

それに対し、やれやれといった態度で話し始める灯夜に顔をひきつけさせる。

「本当にそう思っているのか？ 霊力が確認されず、空間震も初めて現れた時のみ」

「霊力をうまく隠せる精霊もいるし、空間震も静粛現界すれば問題ない筈よ。それだけでは貴女が精霊ではないと言い切れない」

琴里の言っていることに一番良い例が狂三だろう。隣界に帰らず任意で空間震を起こす。霊力も観測機で直接観測しなければ分からないほどだ。他の精霊も出来るかは知らんが。こちらの世界に然程興味がない限りそんなことはしないだろう。

「なら、これならどうだろうか」

今まで隠してきたフードに手を掛け、取り去る。

幅迫っていた視界が一気に広がる。頭全体で店内の涼しい空気を感じられる。

うーん、フードが無いと落ち着かないな。

さて、お二人の反応は如何かな？



目の前の精霊は、自分は精霊ではないと言い出すことに琴里は困惑している。

精霊じゃなければ今までのあれはいったいなんなのよ……

今までも起こしてきた事象を思い出す。

だが、確かに目の前の精霊は精霊らしくない行動が多い。最初はそんな性格の精霊なんだろうと思っていたが次第に疑念が出てくる。

もし、本当に精霊じゃないなら……

「なら、これならどうだろうか」

目の前の彼女は出し惜しむかのようにフードに手を掛けて、ゆつくりと脱いでいく。

フードから現れたのは、黄金だった。

光に反射してキラキラと輝く金髪。髪と同じ色をした瞳がうつすらと光を放っている。

そして、整った中性的な顔立ちをしていた。

なかなか、綺麗な顔をしてるわね。それを見せてどうするのかしら

？

「私、いや俺は男だ」

「……？……はあ!？」

いきなり何を言ってるんだこの精霊は。

おとこ？精霊なのに男？いや、こいつは自分を精霊じゃないと言つてたけど……いやいやそんな筈は。

「そんなに疑うならこの部屋にある観測機で俺を確かめれば良い。これ程の距離だ。正確な観測結果が出るだろう。そっちには優秀な解析班がいるだろ？」

本当にどこまで知っているんだこいつは。

琴里は、言われた通り耳につけているインカムでフラクシナスに連絡を取る。

出たのは令音だ。丁度良い、今すぐこの精霊を解析して貰おう。

「令音、アルケミストの解析をー」

『既に彼女、いや彼を調べ終わった所だよ』

令音は、私の言葉を遮って驚くことを言った。今、彼って……

『間違いなく彼は男だ。その上霊力の反応はない……彼は精霊ではない』

「……なんですって？」

驚きを隠せない私を見ている目の前の精霊モドキは、ムカツク笑みでこちらを見ている。

……余談だが、灯夜が着ているローブは、その上から通して観測機での解析などが出来ないようになってる。

フラクシナスは、まずはそのローブから解析しようにも機械が解析

不明とエラーを吐き出しお手上げ状態だった。

そして、今フードを脱いだ灯夜に対し一時的だがその効果が消え観測機での解析が可能となった。

「分かってくれたか？」

「……ええ、納得はしてないけど」

「俺が男で、精霊では無いと認識してくれるだけで結構。正体を見せたのは君たちに対して信用を得るため。それと君のお兄さんに攻略されるのだけは御免だからね」

そう言いながらまたフードを被り、素顔を隠す。フードを被った瞬間、中は黒く染まり顔を見えなくしていた。一体どういう仕組みなんだろうか。

「お、俺も男には興味ねえーよ」

「の割には会ったときにナンパしてきたけど？」

「あれはお前が精霊かと思ってだな！」

「精霊なら誰にも構わず口説くんだ。へえー？」

「いや、ちがつ!？」

焦る土道を弄っている灯夜に、琴里は会話に割って入る。

「土道が男色なのはどうでも良いわ。四糸乃のこと以外にもまだあるんでしょ？」

「ど、どうでも良いって……」

落ち込む土道は無視する。このままじゃ話が続かないわ。と、思いきや

「あれえ？土道君が男に走っていいの？琴里ちゃん、お兄ちゃんのことが大すー」

最後まで言わす前に手に持っていたカップを顔面目掛けて投げつける。

い、行きなり何を言い出すのよこいつ!？」

カップは、憎たらしく笑う顔に当たる前に見えない壁のような物に当たったと思ったら青い稲妻がカップから走り、その形を消していつてしまった。

それに、忌々しげに睨み付ける。

「ほんとに何なのよ、それ……」

「既に知ってるだろ。錬金術だ。卑金属を貴金属へ精錬し、金属に限らず様々な物質を錬成する」

「私の知ってる錬金術とは程遠いわね……まるで魔法ね」

「行き過ぎた科学は魔法と変わらない。誰かがそう言ってたな。あのAST達が使う顕現装置（リアライザ）も科学技術によって魔法を再現するものだ。そう変わらんだろう」

「原理が全く違うわよ……そういえば、貴方が錬成したものを此方で解析してみたところ一部解析不明だったわ。丁度いいわ、これについて説明してくれないかしら？」

……え？ 解析不明？

第十七話 交渉【後編】

琴里に言われた事に、表には出さずに内心では驚いている。

錬成したものが、解析不明？ いったい何を錬成して解析不明になったのだろうか。

今までの錬成してきたものは、小物から武器、食品等も数えきれない程のものを錬成してきた。

その中に、解析不明……もし食品だったらヤバイ。

このケミストの食品はほぼ全てが錬成によって造られている。ウチは自分と羊の顔をした店員しかいない為、外に買いに行くなど変な噂が立つに決まってる。

……既に、羊の被り物をした変な店と密かに噂されてることは灯夜にはわからないことだ。

因みに、珈琲豆などは取り寄せ。黒執事の拘りのように錬成すれば早いのだがそこだけは頑として譲らず仕方なく業者の方に配達して貰ったりとしている。

話がズレタ。兎も角、ワケわからんものを摂取して、体調でも崩して訴えられたらこの店が潰れてしまう……！！

「因みに、何を解析したんだ？」

「そうね、土道から聞いた話でこの店の食品は錬成したものだと言いたから此方のクルーでこの店の食品を採取したり、最初に現れたときに造ったガラス張りのビルとか。あとはASTを攻撃したときの剣とかも」

「どれが解析不明だったんだ？」

「貴方がASTを攻撃したときの剣よ。材質は普通の物だったと判明していたけれどその殆どが不明よ」

「食品は？」

「特に問題なかったわ」

あー、良かった。気付かない内にこの世に存在しない素粒子を生み出して客に食べさせていたかと思つたよ。

「……貴方、まさか自分でも解らないものを出して食べさせてたわけじゃないわよね?」

ギクウ!?

「さてさて、なんのことだ?俺がそんなミスをすることなんてあり得ない」

「ふうん?まあいいわ」

ふうー、何とか誤魔化した。もしバレたらさつき飲んだ飲み物も錬成して出した物つてバレちまうところだったぜ。

「あの羊の被り物をした店員が教えてくれたけどこれはちゃんと買ってきたものを出してくれたみたいだし」

……なんですと?

黒執事に視線を向けるとこの前まで無かつたプラカードを手に持っていた。

『丁度、近くでセールがあつた次いでに』

え、待つて。ちよつと待つて。いつの間にそんな事してるの?いやそれ以前に何で外に出てるの?もしかしてその格好で?そんなこと無いよね?

黒執事は新たなプラカードを出しこちらに向けてくる。

『ちゃんと外出用の羊ヘッドにして出掛けました』

違うそうじゃない。あとナチュラルに心を読むな。

てか、なんで外出用の頭があるの?取り替え可能なのつてどこの愛と勇気だけが友達のヒーローだよ。

そんな機能、付けた覚えはないんですが。

……そんな怪しい姿で出たら客足が遠退くじゃん。

『いえ、逆に増えました。外出次いでに宣伝もしておきましたし。特に学生の方がよくいらつしゃいます』

まあ、値段も安いし量も多いからな。所持金が少ない学生達にはこの店の値段は懐には優しいんだろうな。

全部、上手いし。

どれだけ増えてるかわからないけど客が多くなってるなら人手足りなくならないの？

『今のところは余裕をもってこなせてます』

「ねえ、話してる？、ところ悪いけどそろそろ話を戻したいんだけど」
琴里が待ちきれないみたいだし、一旦この件はあとで話し会おうか、黒執事よ。

プラカードで、了承し奥へと戻っていく黒執事の背を見送り話し合いへと戻る。

「それでどこまで話したかな。ああ、土道が男に興味があるだったか」「それはもう終わった話よ」

「ん？そうだったか。ああ、解析不明の件だったか」

これについては推測でしかないけど。元ネタである汚れた杯欲しさで殺し会うアニメでのサーヴァントが使っていた技をイメージして錬成したせいではないかと言うこと。

イメージ元の正義の味方であるあの人が使っていたのは魔術。

魔術である投影を錬成に置き換えて使っていたために解析不明になった。

そうになると、一時的に魔力を錬成しそれを剣として形造った。解析不明を示しているのは、魔力なのか？

いや、この世界でも顕現装置、CRユニットを使い魔力を精製している。解析不明になるのは可笑的い。

もしかしたらあの世界とこちらの世界の魔力は別物？

別物だったとしてもなんで錬成できるの？

まったくわからん。

と、兎も角なにか、なにか言い訳ゲファンゲファン、言わないとな。

「……解析不明なのは、それがかの伝説の物質だからさ」

うおおお、なに言ってるんだ俺！

「伝説？」

「神が与え、最も固いとされ、非常に強く、それでいて伸縮性のある金属。様々な物語でも出てくるものだ。ここまで言えば解るかな？」

「お、おい。それって……まさかオリハルコンじゃ」

「さすが士道。正解だ。伊達に荒れた中学時代を送っているわけじゃないな」

「そんな誉められ方うれしくねえーよ」
げんなりとした顔をする士道。

誰にでもそう言う中学時代あるから大丈夫。

畜生オ、持って行かれた……!!

それは、豆粒錬金術師の人です

(誰が豆粒ドチビかーっ!!)

片腕脚オートメールの人は彼方の扉からお帰りください。

「オリハルコンについては俺にもまだわかっていない部分がある。これ以上の説明はできない」

「オリハルコンの精製……規格外通り越してバグよバグ。その気になればエリクサーとかも造れるんじゃないのかしら?」

琴里は頭が痛いのか額に手を当て抱えている。

造れるには造れると思う。造ったことないから間違えて異形屍人にでもなつたら大変。デアアラの世界がバイオでハザードで祓魔師な世界になるね!

「ここまでの話を纏めておこう。四糸乃の保護、フラクシナスの協力。これにあと一つ、頼みたいことがある」

「まだあるの?もうお腹一杯よ」

「ははは、ウエスト回りが大きいのはきつとデラックスキッズプレートの食い過ぎにー」

最後まで言い終わる前に、またも物を投げつけられる。

投げつけたら犯人は、顔を恥ずかしさと怒りで真っ赤にしてこちらを睨み付けている。

「……因みに、片足で立ってたりしゃがんでも変わらないから」

その言葉にブルブルと身体を振るわしている琴里。

なんだ?マナーモードか?

「ああ、最近友達の早乙女加奈ちゃんが体重が増えたって言って落ち込んでいたけど、明らかにアップしていたお山を見て何故か自分が落ち込むことがあったらしいが……まあ、頑張れ」

今度は、グーが飛んできた。勿論、受け止めたけど、ヤダこの子顔面ど真ん中狙ってきたよ。当たってたら確実に鼻折れて鼻血が止まらないだろう。

「次、言ったらフラクシナスの主砲を上から撃つわよ!!?」

怒りと羞恥心で顔を赤、紅くして怒鳴る。耳まで真っ赤。

土道の代わりに琴里を弄っていたが、これ以上のやるとマジで上から主砲が降ってきそうなのでそこで止めておいた。

「琴里相手によくやるな……」

「妹さんの尻に敷かれてる土道にはできないもんな」

「うっせ」

「まあ?そんなツンとした態度は、愛情の裏返しでー」

「もしもし神無月?今すぐにこいつにミストルティンを」

「待てわかった。わかったからそれはやめろ」

今の俺にミストルティンなんか撃たれたら一発蒸発だ。

「話がズレたな。頼みたいことは顕現装置を一つ、こちらに寄越してくれないか?」

「顕現装置?そんなものなんで欲しがるのよ」

「いや、自称最強のモヤシ対策として解析しときたいから」

「もやし?」

DEMの自称人類最強もやしっこー部長に対抗策が欲しいからな。

顕現装置さえなければ25mすら泳げない貧弱など赤子の手を捻るより簡単。

解析して、CRユニットを停止させてしまえば煮るも焼くものお好きないように。

「まあ、性能が低いやつなら渡せるけど。機能はそこまで期待しないで頂戴」

「貰えるだけ有難い」

案外簡単に貰えるみたい。流石フラクシナス。太っ腹!

琴里のお腹もふとー

「何か言ったかしら?」

「いえ何も」

「ふん、まあいいわ。次は警告なしで撃つわ」

おお、怖い怖い。琴里弄りはここまで。時間もそろそろいい頃合
い。

時計を見ると6時辺りを指していた。

そろそろお開きかな。五河兄妹も夕食が有るだろうし。

ほぼ、空気だった士道もそれに気づいたのか夕食があると言って琴
里に帰るように言っている。

「士道、今日はハンバーグがいいわ」

「あー、十香もそう言ってたから材料は用意してあるよ」

仲良さげな兄妹。その光景に、灯夜は静かに見ている。

もしフードを脱いでいたのなら懐かしそうに目を細め、過去の記憶
に思い馳せている顔が見れただろう。

だが、フードで隠したその素顔は二人には見えない。

灯夜自身も自分がそんな顔をしているのに気づいていない。

「それじゃ、私達は帰るわ。顕現装置に関しては後日、連絡するわ」

「ああ、楽しみに待っているよ」

灯夜は、二人に手を降りながら見送り扉が閉まる。

途端に店内は、冷めたように静かになり静寂が広がる。

それに少しの寂しさを感じながら、黒執事に飲み物を頼み紛らわそ
うとするが、既に飲み物が置かれている。

灯夜は、苦笑しながら飲み物に口をつけ、息を吐き呟く。

「ダイエットしてるなら、ハンバーグは駄目だろ……」

それを呟いた瞬間、店の外から殺気が飛んできたのは気のせいだろ
う……

まあ、色々と頑張れ。

第十八話 四糸乃の気持ち

よしのんは何時も私の側に居てくれた。

辛いときも悲しいときも寂しいときも、よしのんが居れば全部変えてくれた。

私は、痛いのも辛いのも嫌で。傷付けるのも嫌で。

目が覚めれば何時も攻撃してくる人たちも、よしのんが助けてくれる。

よしのんが居れば寂しくない、怖くない、痛くない、辛くない。

よしのんは、私の理想。憧れの自分。

私みたいに弱くなくて、私みたいにうじうじしない強くて格好いい。

よしのんは私の友達で、私のヒーロー。

でも、ある日私が転んでよしのんが飛んでちゃって、私が出てきちゃって……目を開けたら、黒い服を着た人が目の前にいた。

私が被ってるのと一緒で顔を隠していたけど、不思議とその人の瞳が見えたような気がした。

綺麗な金色で、思わず呆けてしまったけど直ぐに私は離れた。

知らない人、私を傷付けるかもしれない。私が傷付けるかもしれない。

怯えていると、その人が手に持っていたのを見せてくる。

それは、私の友達のよしのんだった。

直ぐに取りに行こうとするけど、怖くて立ち止まってしまう。

どうしたらいいか解らなくて、オロオロしてる私にその人は、笑ったような感じがした。

その人は、よしのんを私に見せるように前に出した。

私は何がしたいのかわからず、首をかしげていた。

その様子を見て、また笑ったような気がしたけどよしのんがポンツと音と共に煙を上げたことに思わず悲鳴が出そうになった。

けど、煙が消えるとよしのんの姿が変わって驚いてしまう。

よしのんの姿が真っ黒な帽子に黒い服に変わっていた。

その人はどこからか出したハンカチでよしのんを包むと、三つ数えると今度は私と同じ服になっていた。

それだけで、私は驚いているのにこの人が指を鳴らしていくとどんどんよしのんの服が変わっていく。

格好いい服や、可愛い服、よく分からない服に変わっていくけど最後にまた、ハンカチを被せると今度はよしのんが消えていた。

呆然としていた私だったけど、いつの間にか私の前に立っていたその人は私の手にハンカチを掛けているのに気がついて驚いて思わず跳んで逃げてしまう。

よしのんが消えてしまったのに泣きそうになるけど、どうにかしてあの人から取り戻さないと、そう思っていた。

けど手に懐かしい感触があることに気がついた。

いつの間にかよしのんが私の所に戻ってきた。

それが嬉しくて、安心する。

よしのんが、私の変わりにその人に話しかける。

私にはそれが見えている。何時もはよしのんが表に出てくれて、私は隠れているけど今日は何時もと違うような気がする。

よしのんはさっきのマジックを褒めているけど、よしのんがその人に私の身体を触ったことを――

それに私は不思議と恥ずかしくて恥ずかしくて……

そのことに謝ってきたけど、転んだ私を助けてくれたからお礼、言わないと。

私の気持ちとは裏腹に、よしのんはその場を後にしようとする。

だけど、その人はお詫びにカフェに連れてつてくれるみたい。よしのんは断ろうとしたけど、結局行くことにしたみたい。

私はよしのんが、その人と話しているのを聞いてその人の名前が【灯夜】さんと言うことがわかった。

今から行くのは、灯夜さんのお店のようで楽しそうに話している。店には灯夜さんの他に黒い山羊さんがいるみたいで、その人について喋る灯夜さんは何だがお父さんみたい。

声が高くて顔が見えなくて男の人かも解らない。もしかしたら女の子の人かも。

でも、こんな人がお父さんやお母さんなら……

店についた私達は、色々な話をしてくれた。

最近合ったことや、灯夜さんことや、友人のこと。

土道さんと言う人について灯夜さんは面白そうに笑いながら話してくれる。

話を聞いていると、十香さんという人と付き合ってるみたいだけど、殿町さんという男の人と、その……そういう関係でも。

灯夜さんと話していると、誰かが店内に入ってきて灯夜さんに話しかけてきた。

灯夜さんがその人の事を土道という。この人が土道さん？

灯夜さんは、土道さんに冗談を言っただけにツツコム土道さん。

灯夜さんがある程度の土道さんを弄り終わり、席についた土道さんはなんでここにいかを聞いている。

灯夜さんはそれに、ここで私とデートをしていると……

それを聞いて思わず顔を赤くしてしまう。

灯夜さんとデート？私は全然そんな気じゃなかったけど、そう言われると意識してしまう。

でも、でも灯夜さんみたいな優しい人なら……

そこで、身体が引つ張られるような感覚が。

もう戻る時間が来たみたい。よしのんもそれをわかったようで灯夜さんに別れをいって店を後にする。

暫く歩くと引つ張られる感覚が強まり、意識がゆっくりと沈んでいく。

それを感じながら私は、また灯夜さんと話せる事を楽しみにしながら
らそれに身を任せる。

今度は、私が灯夜さんと……

第十九話 大罪

灯夜はコツコツと、硬い床を歩き周りに足音が響く。

そこはケミスト店内の地下に存在している地下。

コンクリートで固められた長い廊下を歩き、嚴重に隔離されている扉を電子ロックを解除することで先にある部屋へと入る。

電子音と共に扉が重たげな音を出しながらゆつくりと開いていく。

完全に開ききると、部屋の様子が明らかとなる。

薄暗い空間には円形状のガラスポットが無数に並べられていた。

ポットの中は赤い液体に満たされその中には赤く輝く宝石が浮かんでいた。

どれもが怪しい輝きを放ち、明かりが無い室内を妖しく照らしている。

その間を歩いていき、奥にある扉を開いてさらに奥へと進んでいく。

扉の無い入り口を通ると先程とは打って変わりに中は、広大な広さの空間。申し訳程度の明かりと柱が並び立ち、神殿にも似た空洞。

しばらく歩くと赤黒い線で書かれた錬成陣が書かれてあるのが見えた。その中心には台座があり、上には先程の部屋にあった赤い石が幾つも置かれてあった。だが、その色は赤黒く、見ているものを震えさせる得たいの知れないモノを感じさせる。

錬成陣に近づいた灯夜は、置かれていた台座の上の赤い石を掴み取る。

そして、台座に別の物が置かれる。

それは、独りでに蒼く輝く宝石。これを造るのにかなり苦勞をしたと思いつながら錬成陣に向かい合う。

「賢者の石。……哲学者の石、天上の石、大エリクシル、赤きティンクトウラ、第五実体。様々な呼び名があり、その形状は石であるとは限らない」

持っていた赤い石をばら蒔く。固い音が響き渡り石は地面に落ち、

まるで生き物のように書かれている五つの円の中に転がりこむ。

「此処からだ」

ローブの裾から出された手を合わせる。乾いた音が響かせる。

「さあ、始めよう私の戦争を！」

地に手を付く。錬成陣から凄まじい錬成光を放ち、目を焼く程の光が迸る。

円陣の赤い石……賢者の石は浮かび上がり、その内に秘めているエネルギーを解放する。

錬成光は、赤く輝き更に光の放出を高めていく。

中心の台座にエネルギーが集まり、蒼い宝石をその赤で染めていく。

宝石はまるで抵抗するかのようになり、バチバチと蒼い火花を飛ばす。

だが、時間が経つにつれ弱々しくなり遂には赤色へと犯されていく。

宝石は錬成をされる。

ナニかが錬成され始める。

それを見た灯夜は、口端を上げ子供の様に笑いはしゃぐ。

「アハハハ！ファントム、お前が何を考えているかは解らないがそう簡単に思い通りにはさせないぞ？」

笑い声が響き部屋の中、台座の上には赤黒く光を放ち脈動する宝石が浮かびあがっていた。

灯夜は、更に錬成を行い形状を変え液体化させてそれを台座から造ったグラスに注がれていく。

それを手に取り、何かを確かめるように見つめる。

血にも似た色。赤、朱、紅。

灯夜は、グラスに口を付け躊躇いもなく液体を飲み込む。

ゼリーのような感触が口から喉を通り、身体に溶け込むのを感じながら様子を見る。

直ぐに変化は起きた。

身体から赤い錬成光が走り、その身体を造り変えていく。より強く、より頑丈に。賢者の石に適応するように。

身体の内から、細胞から破壊され、また再生させられそれが幾度も行われる。

その細胞破壊され変えられていく痛みは、半身を焼き貫かれた以上の激痛がその身に襲う。

石が内包している力が途切れるか、身体が適応するか、取り込んだものが死ぬまでそれは続けられる。

腹を貫かれた以上の痛みが身体中に走り、立っていられずその場に倒れこむ。

喉の奥から溢れ出た血塊を吐き出し、賢者の石が血管を通り作り替えられていく血管がズダズダに引き裂かれ、皮膚から漏れ出た血液で着ているローブを濡らす。

激痛で叫びを上げるが、それは喉の奥から溢れ出る血で声にならず嗚咽を漏らす。

錬成の音と床に落ちる血の音、咳き込みながら叫ぶ声が響く。

数分、数十分、いや数時間以上に感じられるその地獄は終わりを迎える。

身体中を走っていた錬成光は消え、部屋の中に静寂が走る。

灯夜は、ピクリとも動かず血溜まりに倒れ込んでいる。

「……………はあ……………がはっ！げほ、ごほ……………ぐううつ」

やっと動き出した灯夜は空気を吸い込み、止まり掛けていた心臓へと酸素を送り込んでいく。

喉に貯まった血を吐き出し、身体中に残っている痛みの感覚を慰めるように身体を手で抑えながら立ち上がる。瞳が痛むのか、思わず片目を抑える。

ふらつく足取りで確認するようにその場で錬成を行う。

いつも行っているモーションは無く、錬成時に発生する青い錬成光ではなく赤い錬成光が走り、飛び散った血痕に血だらけとなったローブを作り変え新しい物へと作り替え、最後に椅子を錬成し終えそれに座る。

「げほっ、……錬成は問題なく使える。それも……以前よりもスムーズに」

抑えていた手を離し、何度か手のひらを握り開いて感覚を確かめる。

その手は、黒く鉄のように変化していた。これは炭素変化で表皮をダイヤモンド並に硬化させていた。

そして、抑えていた瞳の奥には自分の尾を飲み込み、円形をなしている蛇の印「ウロボロスの印」が現れていた。

灯夜は、何を思ったのか錬成を始め、自身の周りの明かりを作り上げる。すると灯夜の後ろに影が浮かび上がる。

すると、影はまるで意思があるかのように動きその規模を広げながらギョロつと目を開き、鋭い牙を見せ付ける。

「うーん、問題なく使えるな。あとこの影、リアルで見たら結構キモい」

自身の影にドン引きするが、影はまるでそんな灯夜を心外だ言わんばかりに目を細める。

もうここに用は無い。その場を後にしようとする。

地下から戻り、自室へと戻る際に必ず通るケミスト店内に行くと、黒執事が何故か待機していた。手にはお盆とその上に飲み物。

「気が利くね、ありがとう」

『いえ、大したことでは。自室に戻られるのなら一度シャワーを浴びることを進めます。臭いますので』

プラカードでそう伝えてくる黒執事に、思わず自身の臭いを嗅ぐ。

これといって臭いわけではないが、黒執事の嗅覚では臭うのだろう。

再度、礼を言っって言われた通りシャワーを浴びてから自室のベットへと横になる。

直ぐに睡魔が襲い、薄れていく意識の中でこれからの事をふと思いつきながら睡魔へと身を任せ、眠りについたのであった。

第二十話 氷の絶望と救い

引つ張られる感覚を感じ、目を覚ますと地面がすり鉢状に削られた場所に四糸乃は立っていた。

周りを確認すると雨が降る空にASTが飛んでいるのが見える。ASTは四糸乃を確認すると直ぐに持っている武器で攻撃していく。それを跳んで交わし、街中を駆けていく。それを追いかけていながらマイクロミサイルや銃で追撃していく。

ミサイルや弾は、四糸乃に当たる前に不可視の被膜でふさがれ効果はない。

逃げるだけで反撃しない四糸乃に、迫る一人のAST、折紙がレーザーブレードを持って斬りかかる。

四糸乃は、それを軽々しく躲わしていく。当たらない事に更に攻撃を激しくさせる折紙は、筒上のモノを取り出すと目の前に投げ込みそれを斬り付ける。

瞬間、爆発と共に目映い光が発し四糸乃の目を閉じさせる。それを狙った折紙は、レーザーブレードで斬り付ける。

「これで……っ！」

声で反応した四糸乃は、後ろへと下がるが何かを切り裂かれた音と共に四糸乃自身の意識が表に出てくるのを感じ不思議に思った矢先、左手から鋭い痛みが走る。

「あ……」

光に馴れた目を開くと着けていたパペットは、縦に切り裂かれ、その隙間から切り裂かれた傷口から赤い血が漏れだしていた。

パペットは、自身の赤い血で染まり無惨な姿を四糸乃に見せつけていく。

「あ、あああ……」

自身の友達が目の前で切り裂かれる事実に四糸乃の心を黒い何か

が滲む。

「あああああああああああああああ!!!」

頭を抱え、その事実を否定しようがするが起きたことは変えられない。
い。

叫びを上げ、涙を流し嘆く。

ガチガチと歯が鳴り、ガタガタと足が震えて、グラグラと視界が揺れて、頭の中がグシャグシャになっていく。

身体が、心が、霊結晶が、黒く黒く黒く、絶望の色に染まり始める。

自分の友達を殺した相手が憎い、だけど他人を傷付けたくない。

自分に害成す存在が許せない、だけど人を攻撃するのが怖い。

傷付きたくない、傷付けたくない、そんな優しい感情が鬱陶しく感じられる。

こんなモノ、——いらぬ!

自分を脅かすASTが、他人が、人が……何よりも、こんな奴等が居る世界が許せない。

次の瞬間、四糸乃は右手を高く掲げて、

「氷結傀儡!!!」

絶望の中、その口で天使の名を叫ぶ。

地面から白い巨体が現れる。現れたのは四糸乃の天使、氷結傀儡。

だが、前回の現れた時とは大きさが全く違った。前は数メートルほどだった大きさは、今はビルと同じ大きさとなっていた。

氷結傀儡は、低い咆哮を上げる。

瞬間、周囲の街並みが凄まじい勢いで凍り付いていく。

街の中で響き渡るその咆哮は、まるで泣いているかのように聞こえた。



「これは……」

灯夜は、目覚まし時計代わりとなった空間震警報により目が覚め、精霊が現れたことで無人となった街の中を歩いていた。

遠くでは、ASTが戦闘している爆発音が聞こえ向かっている途中。

突然、低い咆哮が聞こえた瞬間街が凍り付いていく。

灯夜は、即座に錬成を使い迫りくる冷気を防壁で防いでいく。

周りが霧で覆い隠された視界を、突風を起こし吹き払う。

霧が晴れた後の光景に、絶句する。見慣れた街は完全に凍り付いていた。

どうやら四糸乃が天使を顕現させ、街を凍り付けにしたのだ。

「四糸乃はよしのんは落としてない。なら何故天使を？」

考えるのは、一つ。現界の際に何かあった。

AST相手、ロストまで逃げ続ければいい。だが、前のこともある。

この世界に予想外なことが起こっている。

今のこの状況、原作から離れている。

「考えるよりも今は四糸乃が先か」

灯夜は、再度錬成を行う。

赤い稲妻が足元に迸るが、特に変わったことはなくあるとすれば錬成光が走り続けているくらいだろう。灯夜は、地面を蹴ると凍った地面をスケートのように滑っていく。

向かう先は、まだ戦闘が続いているであろう爆発音の元。



全てが凍った世界。氷に多い尽くされた街。

街の人々は地下のシェルターに隠れ、ASTはこの光景を作り上げた元凶に武器を向け、引き金を引く。

破裂音と爆発が鼓膜を震わし、敵に命中していることを伝えていく。

だが、目の前の敵には効いている様子はない。

怯みもせずそこに鎮座する姿に不気味に思えるが、ASTはお構いなしに攻撃していく。

「全く効いている様子はないわね」

隊長の燎子は、隊の指揮を執りながら愚痴る。

目の前に鎮座しているのは全身から白い靄を放つ鋭い牙に赤い目の巨大な兎の人形。

精霊、ハーミットが顕現させた天使だ。逃げ惑うハーミットが突然天使を顕現させ、街を氷付けにしたことに動揺したが天使は数名の隊員を凍り付けにした後に動く様子を見せずただそこに立っているだけ。

攻撃を受けていると氷結傀儡の口が開き、凄まじい勢いで冷気を吸い込み始める。

氷結傀儡の動きに、AST達は直ぐ様下がる。その直後に口に溜めていた冷気を咆哮と共に吐き出していく。

吐き出された冷気は、吹雪となり自身の身体に纏まりつくように覆い隠され吹雪のドームを形成させた。

「ちっ、厄介ね。あの吹雪、こちらの顕現装置リアライザで出力した魔力に反応して防性を高めてくるみたい。あの吹雪の中に入った瞬間随意領域事氷漬けよ」

「かと言って、随意領域を解除した状態では今度は氷の塊が銃弾のように襲ってきます。ワイヤリングスーツの防弾処理ではとてもじゃありませんが持ちません」

「魔力を帯びていない銃の砲撃はどうでしょう？」

「それも難しいわね。仮にあの吹雪、結界を抜けたとしても精霊には霊装があるのよ。魔力を纏わせていない物理攻撃じゃ、結局精霊に傷を負わすことはできないわ」

「なら、あの武器での砲撃は？」

「確かに、アレならあの結界を貫ける可能性はあるわね。只し、全力で

の砲撃ならね。そんなことをすれば狙撃者がただでは済まないわ。それに、例えば結界を貫けたとしても精霊までに到達した砲撃が精霊に効果があるかは不明よ」

どうするかを話し合っている中で折紙はビルに近づき、

「折紙？」

「こうすればいい」

折紙はそう呟くと目の前のビルに手をかざし、集中力高め顕現装置の出力を上げていく。

折紙は自分の周囲に張っている随意意識を一気に広げていく。随意意識に包まれたビルは轟音と共に浮かび上がり空中に浮遊する。

折紙の顔に苦痛の表情が浮かぶ。

「お、折紙?!何してんのよあんだ……?!」

燎子の驚愕したような声を上げる。折紙がやっていることは自殺行為のようなもの。

ビルを浮かび上がらせるほどの顕現装置の使用だ。実際、脳に強烈な負荷がかかり激しい頭痛が折紙を襲っている。

「物量で押しつぶす。これで一瞬結界は解除されるはず。そこを狙って」

「……まったく、あんたは相変わらず無茶を。……みんな、聞こえた!?強引だけど他に方法もなさそうよ。総員、最大出力を維持したまま結界範囲外ギリギリで待機!結界が消えると同時に総攻撃よ!」

「了解!」

隊員は、指示された通りその場を離れ折紙は空へと飛び、随意意識で停止していたビルを結界目掛けて落としていく。

が、次の瞬間ビルは飛んできた斬撃によって破壊されビルを貫通してきた斬撃が折紙を襲う。

折紙は、レイザーブレードで弾き返し防ぎ、斬撃が飛んできた方向へと向ける。

そこにはビルの屋上に佇む少女。美しい顔立ちに夜色の髪に水晶の瞳を持ち、手には威圧感を感じさせる大剣

「ふん、防いだか」

「夜十神、十香……っ！何故、貴女がここに……!?!」

その少女は、夜十神十香。精霊プリンセスで最重要討伐対象。

呻くように十香の名を呟く。持っていたレーザーブレードを構え十香に斬りかかる。

十香はそれを跳んで回避し、塵殺公を振りかぶる。

折紙は、空に飛んで避け十香の次の攻撃に備え再度レーザーブレードを構える。

十香も空に飛び、折紙の前に立ち塵殺公を構えて対峙する。

「シドーの邪魔はさせんぞ」

『くっ！なんでここでプリンセスがここに……！ハーミットはあとよ。総員目標をプリンセスに変更！』

その様子を見ていた燎子が他の隊員たちが十香に向かい、武器を構える。

十香は、AST達に斬撃をぶつけ、その場を飛び去る。

ASTは、斬撃を回避し逃げ去る十香を追いかけていく。

それを確認した十香は、シドー達の作戦が成功したことに笑みを浮かべる。

十香がASTを誘い出している時、土道はサーフボードの様な形に変形した王座の塵殺公に乗り氷の道を疾走していた。

その中で土道は琴里と通信していた。

『土道、どうするの。まさか、生身で結界に入る気?』

「それしかないだろ。大丈夫だ、俺は簡単に死なない」

『?!あの時とは状況が違うわ！一発切りの弾丸とは違う。吹雪が吹き荒れている領域内は散弾銃が乱射されているような状況よ?そこを進むのよ?しかも範囲内で回復の霊力を感知されたら氷漬けにされるわよ!途中で力尽きたら間違いない死ぬのよ!?!』

「やっぱり、あれは精霊の力なんだな」

『っ!』

士道に凶星を付かれた琴里は言葉が詰まる。

あの回復力は、確かに精霊の力だ。士道自身が封印した力だ。

結界に向けて突き進む士道に琴里は叫ぶ。

『士道……士道!今すぐ止まりなさい!!』

既に士道の決意は決まっていた。琴里の叫びを無視して。

『お願い……止まってっ……おにーちゃん……!』

「妹さんを無視してんじゃねえ……よつと」

「ぐぼおっ!!?」

突如、横から飛んできたドロップピククにて士道は塵殺公から落とされ冷たい凍った地面に放り出される。

「何格好付けているんだ。バカなの?まだ厨二か?」

蹴り付けた犯人は、無様に倒れ込んでいる士道を罵倒しながら追い討ちでゲシゲシと踏みつける。

「お、まえは、灯夜っ!」

「正解!正解者にはかき氷をプレゼントだ。おらぁ頭から食え」

何時から持っていたかき氷(苺ミルク味)を士道の頭に被せる。

体温で溶けた氷とミルクで、ドロドロと顔に掛かっているその姿はまるで事後のような姿だった。

「はい、パシヤリ」

「おいっ!何撮ってるんだよ!」

「いや、士道の醜態を撮ってるだけだ。後で妹さんに渡してあげよう」

「おいやめろ!」

士道は、服で顔に着いた汚れを拭いながら目の前の灯夜を睨み付ける。

「何しにきたんだ」

「そりゃ、どこから可愛い妹さんが愛しのお兄ちゃんの名を叫ぶ声が聞こえたから来ただけ。そうだろう、妹さん?」

灯夜は、耳に手をやり通信を行う。士道はその様子から灯夜にもインカムが付いているのに気づく。

『何しにきたの？それに、なんでインカムを持っているのよ』

「やれやれ、兄妹揃って同じ質問をするな。さっきも言っただろう？今から死に行く兄を止める妹の声が聞こえたから来ただけだ。後、これは前に士道の壊した奴を再錬成したから」

琴里はそれに舌打ちしたくなるのを抑える。

『それだけじゃない筈よ。さっさと話なさい』

「せっかちなねえ。そうだな……この状況は君たちには荷が重いから変わりに私が出てやろうと思っただけさ」

『……結構よ。私達だけで対処するわ』

「その割には、切羽詰まった声を出したけど？」

そう言うと、艦内のスピーカーから先程の士道との会話が再生される。丁度、琴里が士道に対し叫んでいるところ。

『なっ!? やっやめ、今すぐ止めなさい!!』

「ほら、止めて欲しければ言うこと。あるだろ？」

『くっ!』

琴里は、顔を赤くして口をつぐむ。今のフラクシナスではこの状況に対処でない。

魔力砲ミストルティンでの砲撃でも魔力に反応する結界を削り切れない。

一か八かの賭けで、士道の回復便りで突破するしかないが今もなお膨れ上がる結界の前ではたどり着く前に士道の中の霊力が尽きるだろう。

だが、今士道の目の前には協力関係を築いた存在がいる。だが、こんなにも早く灯夜の手を借りることに躊躇いがある。

……まさか、これを予想して？

『手を……して』

「聞こえない」

『……私達に手を貸してっ』

「お兄ちゃんを付けるのと甘えるように、もう一回」

『つつつつ!!……おにーちゃんっ! 私達に手を貸して頂戴!』

「アハハ、おーけー。愛しの妹よ」

『誰がアンタの妹よ!! 後で覚えておきなさい……っ!』

顔を赤くして、羞恥に悶える妹さんの顔を想像して先程の会話を録音したインカムを仕舞い込む。

うむ、これをネタに何かやらせようかな。

「さて、士道。ここからは司令官殿の指示通り私が承った。四糸乃は任せろ」

「……本当に四糸乃を助けられるのか?」

「やるだけやってみるさ。それに」

「それに?」

「錬金術者に不可能はない」

そういつて結界に向かって歩いていく。

灯夜は、思い出したのか再びインカムを取り出し通信を再開させる。

「司令官、一つ聞きたいことがある」

『……何かしら?』

ドスの効いた声で返事を返した琴里。明らかに先程の事が効いているようだ。

「四糸乃の何故あなつた?」

『……あのパペットが折紙に切り裂かれたからよ』

「は?」

あのパペット、よしのんは四糸乃の友達でありヒーローだ。もしそれが目の前で切り裂かれるなら、それは……

「司令官、四糸乃の霊力値はどうなっている?」

『それが、どうしたのよ』

「良いから答えろ」

『……霊力値が徐々に下がっているわ。既に半数を切っている』

「……それは不味い」

霊力値が下がる。それは霊結晶が反転する合図だ。

このままだと四糸乃は、間違いなく反転し二度と戻れなくなる。

『その様子だと知っているようね』

「勿論」

琴里は何か言っているが灯夜は無視して通信を切って仕舞い込み、目の前の結界に目を向ける。

「さて、四糸乃。ヒーローではないが錬金術師が助けに行くぞ」

錬成を発動させ、周囲に障壁を造ってから吹雪の中へと入っていく。

吹雪が灯夜の防壁へと当り、バチバチと音を立てているが破られる様子はない。

満足げにそれを見ていた灯夜はそのまま奥へと進んでいった。

結界内は、入ってきた時よりも吹雪が凄まじく、防壁がぎしぎしと嫌な音を立てている。

一応、今の錬成は賢者の石を媒介にして行って要る為、使う内に賢者の石が消耗していく。

これは帰ったら補充しないと、思いながら更に先へと進んでいく。

暫く結界を進み続けていくと突如吹雪は止み、静寂が広がる空間に出た。

その中心に巨大な氷結傀儡が鎮座し、その背にうずくまっている四糸乃の姿を確認した。

蹲っているせいでその顔は見えず、様子を伺えない。

灯夜は、氷結傀儡に触れる距離まで近づく。

目の前に立っているにも関わらず反応の一つもせず蹲っている四糸乃。灯夜は氷結傀儡に飛び乗り、四糸乃を抱き抱え、顔を上げさせる。

「……………」

上げさせたその顔は何も表情を見せず、目は濁り虚ろだった。

灯夜は、四糸乃が自分の左手を抱き締めているのに気が付く。

左手にはよしのんが無惨に切り裂かれ、手からは血が流れ四糸乃の霊装を赤く染めていた。

灯夜は、四糸乃の手からよしのんを取り外すそうとすると今まで反応しなかった四糸乃が動き出す。

「あ、あああああああー！」

四糸乃の叫びと共に動き出す氷結傀儡が口から冷気を吐き出し、背にいる灯夜に攻撃してくる。

防壁で防ぐが、吹雪よりも威力が上なのか障壁が凍り付きそれに対抗するようにバチバチと音を立てる。

「よし、の……………ん。よしのん……………」

ブツブツと自身の友達の名を呟く四糸乃は、氷結傀儡で攻撃してくる。

爪の斬撃、鋭い牙での噛み付き、仕舞いには巨体での体当たり等攻撃。

だが、それ全てが灯夜の防壁によって防がれる。

灯夜は錬成を行い、地面から鎖を作り出し氷結傀儡の手足を拘束する。

ただの鎖ならば簡単に振り解かれるだろう。だから鎖を何十にも絡め、強度を高めている。

手足を拘束された氷結傀儡は引き千切ろうともがくが新たに錬成された鎖により今度は胴体を拘束する。

氷結傀儡は、身動きできずその場に倒れる。

四糸乃は、氷結傀儡が倒されたことに気付いていないのか、ただよしのんの名前を呟くだけで背中張り付くだけ。

目の前で手を降るが反応無し。頬を引っ張っても反応無し……………うむ、なかなかのモチモチ加減。

灯夜は、四糸乃の頬をぶにぶにしながら少し考える。この様子だと戻る気配はない。

なら、どうするか。解決法は、こうなった原因をどうにかするだ。

さつき四糸乃の手から取ったよしのんを四糸乃に向けて見せる。

それに、ピクリと反応を見せる様子を見て灯夜はハンカチを出し、

よしのんに被せる。

ハンカチの中でモコモコと動き始める。

動きが止み、ハンカチを取るとそこには傷一つないよしのんの姿があった。

灯夜は四糸乃の瞳に少し光が戻るのに気付き、ゴホンと喉の調子を整え、

『やつはー、少しぶりだね四糸乃。元気だったかい?』

完璧な声真似を披露し、ピコピコとよしのんを動かしていく。

「あ…… ああ、よし、のん……」

四糸乃は瞳から涙を流し、身体を震わす。

『そうだよー、四糸乃の友達のよしのんだよ。四糸乃はわたしが居ないとすぐ泣いちやうんだから』

よしのんを動かしてハンカチで涙を拭いていく。

それにうんうん、と頷きながら四糸乃に、灯夜は安堵の表情を見せる。

「やれやれ。四糸乃。助けてきたよ、お前のヒーローを、お前の友達をな」

「と、うや……さん。う、え、えええ……」

四糸乃は灯夜に抱きつき更に泣き出してしまふ。

それに灯夜は、困った顔をしながら四糸乃を抱き返しながら頭を撫でてあやしていった。

「どう、やさん、ありがとう……ごいませ……よしのんを……助けて、くれて」

「なに、私はただ出来ることをやっただけに過ぎないさ」

そう言い、四糸乃の頭をポンポンと撫でてやる。

「ほれ、守られるのもいいが、四糸乃。今度はお前が守ってやれ」

よしのんを四糸乃の手に付けてあげた。すると直ぐによしのんはびよこびよこ動き出す。

『ふうー、助かったよトウヤ君。わたしからもお礼言わせてね』

「さつき言ったように、出来ることをやっただけさ」

直ぐに喋り始めたよしのんに苦笑しながらそう返す。

「さて、そろそろ夕食の時間だ。さっさとここから出て黒執事の料理を楽しもうじゃないか」

「でも、この……結界」

「おっとそうだな」

四糸乃の制御化から離れた結界は、尚も質量を増やし巨大化している。

灯夜は、錬成を発動させ周囲が赤い錬成光で照らしていく。するとあれほど猛吹雪の結界が雪のように消えていき曇り空であったはずの空は綺麗な青空が顔を覗かせる。

「き、れい……」

四糸乃は、青空を見てそう呟く。

と、同時に二人の身体を浮遊感が襲う。

「うおっ」

「……っ!?!」

視界は切り替わり、何処か別の場所へと移動していた。

「ここは、フラクシナスの艦内か?」

「そう、空中艦フラクシナスの艦内」

その声に戻り返ると、軍服を肩にかけた五河琴里と解析班の村雨令音が立っていた。

「おやおや、司令官自ら迎えて来てくれるとは」

「ふん、そっちの精霊を見に來ただけよ。まあ、別に貴方が居なくてもこっちで何とかなつたわよ」

「それはそれは、愛しのお兄ちゃんを使った作戦で上手くいっても同じ言葉が言えるのだろうか?」

琴里はその言葉に灯夜を睨み付ける。

「さて、司令官は四糸乃の検査などする為に來たんだろう?」

「その通りよ、次いでに彼女を此方で保護しておくわ」

「靈力を持った状態ではASTの観測機に引つ掛かってしまうからね。そちらに任せるよ」

灯夜は、未だに目を白黒させている四糸乃に近づき、

「四糸乃、一応彼女らは私の協力者だ。危害は加えないはずだ。彼女

の言うことを聞いて欲しい。出来るか？」

四糸乃は、少し寂しそうな顔をしてコクリと頷く。

「よしいい子だ。後で黒執事の作るパフェを御馳走してやろう」

それを聞いた四糸乃は、目を輝かせてブンブンと首を降っている。

「任せたぞよしのん」

『もっちゃんよー。四糸乃のことはまっかせなさい！』

よしのんは元気良く頷く。これなら大丈夫だろう。

「それじゃ、私は店に戻るとするか」

「待ちなさい。貴方も検診を受けなさい」

「これといって健康体なんだが」

「それでもよ」

頑固に検診を勧めてくる琴里。

「だが、断る」

灯夜は錬成を使い床を液状化させ、そのまま沈んでいく。

「ま、待ちなさい！」

「後日、店に来てくれればご馳走するからそんなじゃ、バイビー」

そう言い残して、その姿を消していった。

琴里は直ぐにクルーに艦内を搜索させるが、監視カメラにも映らず、結局見付けきれずに数時間後、発見した時にはケミストでお茶を飲んでいる姿が確認された。

その姿に苛ついた琴里だが、文句は店に行った時にでもしようと思めたのであった。

第二十一話 来訪者

四糸乃を救い出した日から二日後、灯夜は最近畳張りにした自身の部屋で倒れていた。

ピクリとも動かないその様子に、何かあったのではないかと思うだろう。

だが、徐に顔を上げ呟いた一言でそんな心配は無くなる。

「あー、だるう……」

覇気の無い顔をまた伏せしもう。

主人公である士道に会い、フラクシナスと協力関係を結び、四糸乃を救う。

小説ならたった一冊程度だが、灯夜の間接感覚では既に三冊以上に感じる。

何が言いたいかと言うと……色々燃え尽きたのだ。

「四糸乃助けた後なんだっけ？……あー狂三か、めんどうな。学校行かないと滅多に会えないぞ」

狂三は、士道の中で封印されている精霊の力が目当てで接触してくる。

確か、狂三の目的は過去に戻ることでその為に精霊一個分の霊力が必要なんだっけ？

なら、適当に造った賢者の石でも渡して置けば解決。はい、狂三編しゅーりよー。

「それは、面白くないよなあ」

もしも、だ。

士道達と戦う前に分身体を全てを潰したら？

士道を後少しで食える寸前に邪魔したら？

自身の願いが叶わないとなったら？

きつと、悔しがらるだろう。怒るだろう。怨むだろう。絶望するだろう。

「こつちから行って、弄りまくってその目を涙で一杯にしてみようか。うん、なんかやる気出て来た」

よいしょつと言いなながら立ち上がり、ぐぐつと背伸びをしていると部屋の扉からノックが聞こえる。

開けると、仕事服の黒執事が立っていた。

『お客様です』

そう書かれたプラカードを此方に見せる。

客？士道達は、昨日の夜に来たけどなあ。

昨日の夜、四糸乃攻略の打ち上げとして貸し切りでケミストで食事を開いた。

その時に、こつそり琴里に四糸乃の今後を聞くとフラクシナスで保護し、霊力封印の為士道とのデートを考えているそう。

好感度の方は聞くと、言わずらそうにしているのを見てまさか最低値なのかと思ったがそうではないらしい。

悪くない、むしろ高い方。

なら何故そう言いにくそうなのか、聞いても不機嫌になり結局答えられなかった。

これ以上聞いても無駄と判断し、別の話題を振る。

ラタトスクで保有している顕現装置は、いつ渡せるかを聞くと既配済みのようでケミスト店の裏側に置いてあるそう。

琴里達が帰った後に確認したが、かなりのデカさ。

大型冷蔵庫くらいあるぞこれ……

食事会では、四糸乃と話したり士道を弄ったり、琴里の好物のデザートスキズプレート（カロリー増増）の味を聞いて士道を弄ったり、四糸乃の汚れている口回りを拭いて上げて何故か赤面したり五河兄妹を弄ったりして楽しんだ。

こうやって、数人での食事は久し振りだ。なかなか感傷深いものがあるな。

それに浸って黙り込んだ灯夜に、士道はどうかしたか？と声を掛けてきたが何でもないと言った。誤魔化しておいた。

これから、士道が精霊を封印していけば更に増えていくのか。もっと賑やかになるな。

そんな遠くない未来の事を少し、楽しみにしながら食事会を楽しん

でいった。

それはさておき、今は来店してきた客だ。

黒執事に後ろに着いていき、居住スペースの二階から一階のケミスト店内を降りていく。

階段付近には磨りガラスが張ってありそこから見える店内には席に座っている二人の影。

そこへ近づき、一言断りを入れてから席に座り対面する。

男女の二人組。女性の方は苺が乗ったショートケーキを美味しそうに頬張りながら食べて、男の方は出されたコーヒーを飲みながら笑みを浮かべている。

「初めまして、このケミストの経営者をやっているアルケミストだ」

「会えて光栄だよ、アルケミスト。私はDEMインダストリーのアイザック・ウエストコットだ。隣に入るのは」

「エレン・M・メイザースです」

行きなりラスボス登場かよ……

俺は内心冷や汗ダラダラにしながら冷静を装う。

「ええ、知っていますよ。精霊殺しを目的としたDEM社の社長さんに世界最強とされる魔術師」

「色々と知っているようだね、興味深いよ」

「生憎、貴方のような何を考えているか解らないような人言われても鳥肌が立つだけだ」

「そう連れないことを言わないでくれよ」

クツクツと可笑しそうに笑うアイザック。隣のエレンはその目を鋭くさせて睨み付けてくる。

「そう言えば、貴方方の武器で腹に大穴空いたのですが」

「[D・D・D]のことかな？ 試作品だったがなかなかのじやじや馬だね。使い勝手が難しくてね試しにASTに送ったものだよ。作ったのは此方だが使ったのはASTだ」

試しの武器で腹に穴空けられたのかよ……

「まあ、そうしておきましょう。それで、お二人は何の用でこんな小さな店を訪ねて？ 観光か何かですか？」

「時間が空いてね、一泊二日の観光さ。丁度、日本に現れた未確認の精霊が居ると聞いて立ち寄ったんだよ」

「それはそれは、遙々イギリスから来るなんてよっぽど暇なんですね」「ここまでくる価値はあったからね」

アイザックは不敵な笑みを見せ、余裕を見せ付けるようにこの店で出されたコーヒーを飲む。

「……ここに来たのはただの観光で偶然にも立ち寄ったと?」「そうなるね」

この店は前にも言ったが、常にオープンしている。狙ってくださいと言っているように。

A S Tも無防備に堂々と店を構えているとは思っていないようで今までここに襲撃は無かった。

だが、この男は違った。

日常でも幾つかのフラクシナス以外の観測機の視線を感じたが、まさかこうも目の前にその姿を現すとは。

襲われでもしたらどうするんだ? 側に最強の魔術師が居たとしても無限にも近い武器や兵器の錬成の中ではその身は守れないだろう。

命知らず。原作でも自身の命を狙われているにも関わらず士道の様子見で日本に来たがな。

多分、自分に攻撃してこないという絶対的な自信を持っている。

「ああ、それと君に会ったら聞きたい事が合ったのだよ」

「聞きたい事ですか、スリーサイズ等は話せませんか?」

「ははっ、それは別の機会にでもしておこう」

軽口を笑いながら流す。そして、光が無い青いで此方を見る。瞳からは底知れない何かを感じる。

「アルケミスト、我々DEM社に来てくれないだろうか?」

その言葉に驚きを隠せなかった。隣に居たエレンも驚きを顔に出してバンツとテーブルを叩いて立ち上がる。

「アイク!? 一体何を、こんな訳の解らない精霊を勧誘しようとなんて……精霊なら私が殺し、霊結晶を取り出せば!」

「エレン」

激情のエレンに声を掛けるが聞いていないのかそのまま喋り続ける。

「確かに彼女の力なら即戦力になりますが……その力は我々の目的の邪魔にもなります！」

「エレン」

先程より強く言うと、エレンはハッとした顔をしてその口を閉じ収まらない怒りをぶつけるように此方を睨み付ける。

「ウチのエレンが失礼した、謝罪しよう」

「いや、気にしていない。だが、一つ言っておこう。少し力を持った自称最強に殺られるほど私は弱くない」

ガンツとぶつかる音が目の前から聞こえる。視界に広がるのは展開された障壁に斬り付けんばかりに降り下ろされたCRユニットを身に纏ったエレンの持つレザークラウド。

「この程度の障壁すら斬り捨てられない人間が最強を名乗るな」

錬成を行い、エレンのCRユニットに干渉する。赤い閃光がエレンの身体に走るとフツとそこに無かったかのように消え去る。

「なっ！・へんどラゴン」が……!?!」

消えたCRユニットに啞然とするエレン。

琴里から受け取った顕現装置を解析したことによってCRユニットに干渉することができるようになった。

いやはや、もし渡されるのが遅かったら今頃もやしっこー部長と激しい戦闘が始まっていただろう。

「お前は少し大人しくして貰おうか」

錬成で造られた鎖で身体を縛り付けられその場に倒れ込む。CRユニットが無ければただのモヤシであるエレンにはこの鎖からは抜けられない。

「くっ！離しなさいアルケミスト！」

身体を自由を奪われたエレンはその口を動かす。

なら、その五月蠅い口も塞いでやろう。

新たに錬成を行い、エレンの口にマスクが造られる。

マスクには×と書いてあり、マスクを付けられただけ筈だが何故か

喋れずモゴモゴと言うだけ。

「その姿じゃあ、最強の名は相応しくないと思わないか？自称最強さん」

んぐー、と何か言ってるがきこえない。

「あのエレンをこうも簡単に倒すとは」

「おや、切り札が倒されたのに余裕ですね社長さん。今なら貴方の首を取れる状態なのに」

床から出てきた剣がアイザックの首元に突き付ける。

「生憎、私はエレンの様に強くはないんだ。抵抗したとしても殺られてしまう」

絶体絶命の状態でも余裕を見せる。剣先が少し刺さったのか首からは血が垂れ落ちる。

それを見た床に転がるミノムシは、騒ぎ足すが踏み付けて黙らす。「……ふう、どうやら貴方は私が殺さないと確信しているようだ」

剣を消し、次いでに首の傷口を直してから溢れた飲み物の代わりに新たに出されたカップに口を付ける。

アイザックもそれに笑みを浮かべ、彼も新しいカップに口を付ける。

「社長さん。観光と言ってたけど次いでにビジネスの話でもいかがでしょう？」

「さあさあ、わたくしたち！出てきなさい!!」

狂三が叫ぶと、影から白い何かが這い出てくる。

それは、手だ。一本だけではない。

によきによきと影から現れ、徐々に這い出てくる。

見た目、ホラー映画のワンシーンだ。

そして、その姿が出てきたのは——無数の狂三達だった。きひひつとその手に武器を持って笑っている。

「わたくしたち、あの良く回る口を塞いでしまいなさい！」

本体である狂三の指示で、分身体は一斉に灯夜に襲い掛かる。

様々な攻撃が、灯夜にぶつけられていく。

銃での攻撃、自身の身体を使った攻撃、そこらに転がっている瓦礫などを使った攻撃。

だが、それ全てが灯夜が展開している障壁で無効化されている。

攻撃を受け続けている灯夜は、フードで顔は見えないがうんざりとした表情を浮かべている。

「私には無意味だ。だから、諦めてくれないかい？」

「ええ、ええ！食べる前にその憎たらしい口を塞いでからで美味しく頂きますので」

話を通じない。

何故こうなったのだろうか。突然、警報がなり様子を見に来れば倒れ伏すASTの上に立っていた。

興味本位で、近付き話でもしようかとしたがどうやら俺を狙って空間震を起こしたらしく、早々と仕掛けてきた。

狂三の攻撃は全て防壁にて防ぐことが出来るが、いい加減鬱陶しい。

狂三自身、灯夜を狙うも此方の攻撃を全て防がれ、その上天使の力を使うも無力化され自分の不利を感じ、その場を逃げるつもりでだった。

だが、灯夜の一言でそれは変わる。

「おやおや、きょうぞうちゃんじやないですか。左目の疼きは止まっ

たのかな？」

その言葉で一瞬、頭の中が真っ白になる。何の事か理解できない。いや、解っているが理解したくない。

「きょうどうちゃんもそう言うお年頃だったんだよね。うん、解る。解るよ。早めに気付かないと将来大変だもんね」

優しく語り掛け、心無しか暗闇が広がるロープのその奥にある筈の瞳が生暖かい眼差しでこちらを見ているのが解る。

目の前の存在は、自分の過去を知っている。それも、よりによって知られたくない過去を。

それを理解した狂三は・・・

「あ」

「あああああああああああ
!!!??」

恥ずかしさのあまり絶叫した。

そんな事があり、今現在も狂三の襲撃は続いていた。

挑発染みた事を言った灯夜は、別に狂三を怒らせようなどとしてはいない。

ただ、つい。そうつい言ってしまったのだ。

いきなり絶叫を上げ、発狂しながら攻撃の激しさを増していく。

「はあ、面倒な」

「面倒なら早く死んでくれませんか？」

灯夜の眩きに冷たくいい放つ狂三。

額には青筋を立てて声を荒気ながら、両手の銃の銃口を灯夜へと向け、発砲する。

弾丸も防壁へと阻まれて無効化される。

「時計の針は深夜を指している。もう良い子は夢の中にいる時間だ」

「なら、貴方はあの世へ送って差し上げますわ！」

懲りずに発砲。灯夜はため息を付きながら防壁で防がれる弾を一瞥しながら言う。

「私は、もうそろそろ帰りたいのだよ。だから終わらせようか」

「何を言ってる——」

狂三が言い終わる前に踵を地面を叩きつけ、周囲一体を爆破させる。

爆風で、狂三達は飛ばされ砂煙で視界を遮られ灯夜の姿が視認できない。

砂煙の中で姿が見えない灯夜が話し掛けてくる。

「私はこのまま、帰らせてもらう。次は昼にでも会おうか、ヘナイトメア」

急かさず狂三は、声のするほうへ発砲。一発の弾丸が放たれ何かに当たる音が聞こえた。

暫くすると砂煙は晴れ、何に当たったのかハッキリとした。

当たったの録音機。先ほどの声はこれから流されていのだろう。

まんまと灯夜に逃げられた狂三は、怒りで視界が赤く染まるのを感じる。

「きひっ、きひひひひひい！次は、次こそは貴方を殺して差し上げますわ！へアルケミスト！！」

狂三の怒号は、夜空へと消えていき後には静けさが残るだけとなった。

第二十三話 忠告

時刻は、夕方。土道は、妹の琴里と共に通学路を歩き帰宅していた。何か疲れたことがあったのか、土道の表情に疲労が見える。

「うちの学校に転校生がくるなんてなあ」

そう、今日は転校生が転入してきたのだ。

黒髪で、前髪で片目だけ隠した以下にもおしとやかな少女。滅多にない転校生、しかも美少女と来れば大興奮だろう。その証拠にクラスの男子は少女を見て大興奮だった。

だが、それだけでは終わらなかった。

「まさか、あの子が精霊なんてなあ」

「本当よ。まあ、でも探す手間が省けていいわ」

その少女は、自己紹介で自分を精霊だと言ったのだ。

そのままにしていればクラスの人気者(男子から)だった筈だが、その一言で周りから電波少女扱い。

一般人が聞けばそう思うだろう。

だが、土道は知っている。精霊が何なのかを。

少女は、他の生徒には目もくれず真つ先に土道の元へ足を運んできた。

そして、学校の案内を頼んできた。

此方としても、攻略するに当たって有難いがこうも積極的だと尻込みする。

フラクシナスにも連絡を取り、攻略が始まる。

攻略は順調に進み、途中アクシデントがあったものの相手の好感度は悪くないもの。

このままいけば、霊力封印まで行けると妹の考えだ。

と、そこで前から歩いてくる人影に気付く。

そいつは、まるでそこに闇があるかのように真つ黒なローブを羽織、頭をローブですっぽりと被っている。明らかに不審人物だ。

「あれ？灯夜じゃないか」

「げっ」

露骨に嫌な顔をする琴里に苦笑する。

そう、前から歩いてきたのは灯夜だった。

灯夜は、土道の声に気付いていたのか此方へと近寄る。

「やあ、五河兄妹。学校生活は楽しんでいるかな？」

当たり障りのない挨拶を言う灯夜。見えない顔にはきつとニヒルな笑みを浮かべているのだろう。

「相変わらず真っ黒な服装ね、あんたは」

「灯夜は、何をしてるんだ？後、前から気になってたけどその服装暑くないか？」

「なに、ちよつとした散歩だよ。あと暑くない」

「外出るくらいそれ脱げよ」

「断る。この姿こそ私の個性だからな。これがなければただの錬金術師となってしまうではないか」

何も変わらないだろう、と心で呟くが口には出さない。

「ところで、土道。聞きたいことがあったのだが少し良いだろうか？」

「聞きたいこと？これから夕食の準備が」

「なに、そんなに時間は取らせんよ。少し聞きたいことがあってな。

土道のクラスに転校生が来たようだな？」

「あれ？なんで知ってるんだよ」

「いったいその情報を何処で仕入れてくるのか、謎でしかない。もしかして、こいつ。俺をつけて……」

「安心してくれ。ストーカー紛いの事はしていない。ちよつとした風の噂で聞いたのだ。それに、こいつは精霊だとか」

まあ、こいつに至っては何かあっても不思議じゃないしな。

「まあ、そうだけど」

「なら、土道。これは忠告だ」

急に真面目な声色になる灯夜。何時もは人をからかうが今は違う。

「あの女に気を付けろ。今までの精霊とは違う。油断すれば喰われるぞ？」

「……え？」

俺が、喰われる？

灯夜の言葉に思考が止まる。

「ちよつと！一体どう言うことよ」

いきなり、兄が喰われると言われ琴里が灯夜に怒鳴りこむ。それに對して灯夜は、気にも止めずにいた。

「そのままの意味だ。私から言えるのはここまでだ。では、また」

「あ、おい待て！」

「待ちなさい！」

呼び止めようとするがそれより灯夜の練成が早い。

赤い閃光が、周囲に飛び散ると灯夜の身体が重力を無視したように浮き上がりそのまま飛んでいく。

そのまま、蜃気楼のように揺らぎ消えていった。

残された土道と琴里は、唾然とするが土道は先ほど言われた言葉を思い出す。

「喰われるって、狂三が？」

前髪で片目だけを隠した少女の顔を思い出す。いきなり転校してきてこつちに積極的だがそんな風には見えない。

だが、灯夜が無意味にそんなことを言うはずがない。

「土道、灯夜の事は気にすること無いわ」

「あ、ああ」

琴里の言葉に返事を返す。

そうだ、既に狂三の攻略が始まっている。今さら引き返すなんてできない。

土道は、灯夜の忠告を心の奥へとしまいこんだ。

だが、土道は知らない。精霊が、時崎狂三がどのような存在なのかを。